

泉宿は瑠璃橋、玉の湯、清涼館、福住、新玉の湯、一の湯の六戸、中に環翠樓と玉の湯とは、何れも橋側の溪流に臨み、眺望甚だ佳、建築また壯麗なり。泉質清く、無色無臭にして、能く満身の塵粉を洗ふに適し、驟雨の如き溪聲は、翠綠滴たるばかりの山色と共に、耳目を一新するに足る。況や湯本も此所も、須雲川の急流を利用したる水力電氣の電燈を點して、不夜城を爲し、魚は湘南の鮮を運びて、潑刺躍るばかりなり。

宮ノ下 塔の澤より阪路を登ること一里十五丁にして宮ノ下に達す。實に箱根十二湯中の中心、近年新道開けて、人力車、轎輿、乗馬等通じ、遙かに溪流を谷底に望みて、海面より高さこと既に一千百二十尺、鷹ノ巢山の半腹に在る別乾坤、中にも富士屋、奈良屋の二館最も大に、外國人は、富士屋を以て東洋第一のホテルと稱す。宜なり建築は洋風にして輪奐の美を極め、自邸内に電燈を設け、長距離電話は横濱東京と通じ、坐して談すべく、山色水光の美、比類稀なり。故に此地に最も多きは洋客にて、夏時は數百の金髮綠眼兒輻輳し、宛然外國人居留地の觀を爲す。此地には、宮内省の御用邸、郵便電信局、電話交換局等あり。其の西方の町續きを

底倉 と爲す。恰かも蛇骨川と宮城野川と合流して早川を爲す溪上にあり。温泉宿

は、蛇骨川の兩岸に跨がり、中間の橋を萬年橋と呼ぶ。南岸に在るは梅屋と仙石屋とにて、北岸にあるを高屋と爲す。橋は溪流の上、七八間の空中に懸り、遠く望めば大蛇の溪を越すが如し。橋下の溪底に太閤の石風呂あり。是れ豊太閤小田原征伐のとき來り浴したる所と云ふ。底倉より路は兩岐と爲り、蛇骨川に沿ふて登れば、小涌谷、蘆ノ湯を経て箱根町に通じ、橋を渡り、宮城野川に沿ふて行けば、木賀、強羅、仙石原、姥子の各温泉に行く可し。

堂ヶ島 宮ノ下の巖谷中、早川の岸にあり。恰かも播盆の底の如く、宮ノ下郵便局の裏手より五丁許を隔つ。溪流軒を繞り、四壁總て青山、白雲は世間と境を隔て、水聲は斷へず琴瑟を奏す。浴舎には近江屋と大和屋の二戸あり。調への瀧、白糸の瀧など、遊賞の地多し。

木賀 底倉より蛇骨川の萬年橋を渡り、宮城野に沿ふて行くこと六町にして、木賀に達す。其間溪流の兩岸に綠なす山々は屏風の如くに連なり、川は其の間を走りて、水に横はる巖石、大は家の如く、小なるも牛の臥すが如く、水は其の間を縫ふて流れ、彼方に激し、此方に碎け、驚玉駭珠、其の聲急激の屋を打つが如し。温泉宿は龜屋、仙石

屋の二戸ありて、湯本塔ノ澤の瀟洒なく、宮ノ下の宏壯に比ぶべくもあらねど、溪流の奇勝は全山第一なり。

宮城野村

木賀より流れに沿ひ遡ること五六丁にして微しく村落開け、農家五六十戸、田圃の間に散在す。湯本以西始めて水田を見るなり。村の中間に橋あり。橋傍に名物の蕎麥屋あり。橋下には水車の断へず運轉するは、米を搗くにやあらん。此地温泉なきも、宮ノ下、底倉、木賀、強羅等の浴客の爲に絶好の散歩地なり。

仙石原と強羅

宮城野より西方に川に沿ふて行けば、一里にして仙石原に達するも、此地の温泉は、地は最も僻に、温泉宿の設備は最も陋なれば、避暑遊覽の客は到ること稀に、浴客は多く近在の農夫等、農間に來りて痲疾を療せんとする者のみ。また川の西北方仙石原村より乙女峠を越れば、富士山麓の御殿場に出づべく、峠の絶頂は、富士の眺望比類稀なりと稱せらる。若し夫れ宮城野より早雲山を攀ぢ、登ること一里強羅温泉は、近年の開業にして、温泉宿は早雲館一戸なれども、庭中に方五間の大浴槽を設け、浴客の游泳に供し、境の静かなると、物價の廉なるとは、他に多く比類なし。中等宿料七十錢、晝食二十五錢許なり。

大涌谷と姥子

強羅より更に冠岳北東の半腹を繞り、急阪を上ること二十丁許にして、大涌谷、俗に大地獄に到れば、斷へず活火山の作用を逞くし、杖もて地中を突けば、忽ち熱氣を噴き、地下は常に鳴動して、久しく居るに堪へざらしむ。實に箱根温泉中最も物凄き境なり。之を過ぎて西方に蘆の湖の水光を望みて阪を降れば、湖岸を距る五丁許の地に、姥子温泉あり。浴舎は二戸にて、眼病に特效ありと稱せられ、浴客、多くは患者にて、遊覽の客稀なり。姥子より湖の北岸なる湖尻に至れば、茶屋一戸あり。舟を備へ、雇ふて之に乗れば、湖上の細波を漕ぐこと二里にして元箱根驛に着す。湖上と元箱根との事は、暫らく後に譲り、今は再び宮ノ下に戻り、底倉を經、蛇骨川に沿ふて山路を登ること十五六丁にして

小涌谷

に達す。此所も近年の開業にて、舊時は小地獄と稱し、熱湯の沸々地上に涌出するを望み見し所、今は温泉宿三河屋あり。地は海拔二千尺、また人間の苦熱を知らず。浴舎の構造壯大にして、料理は和洋の二食を準備し、玉突臺の備へまであり。眺望開豁にして、明星ヶ嶽、明神ヶ嶽と相對し、朝暉夕陰の景最も愛すべし。此所より山腹の新道を行き、健脚家は路を左方の阪下に下れば、千條の瀧をも見るを得べし。更

に阪路を登ること一里にして

蘆ノ湯 蘆ノ湯は、湯ノ花澤と共に別に一區劃を爲し、他は皆な鐵鑛泉なるも、此地のみは硫黄泉にて、温泉宿は松阪屋、紀伊國屋の二戸あり。松阪屋は、在來の同等五戸を買ふて、一家と爲し、客室百二十餘あり。洋客の爲には洋館を設け、食堂の構造、食器の設備、紳士的にも平民的にも、望むまに之に應じ、日本料理の魚肉も、三島と小田原の兩地より供給せられ、日々新鮮なるを食するを得。平年夏時浴客の多きときは、二戸の浴舎にて一時に五六百の客を容る。此所より下方宮ノ下へは一里半、隣地の湯ノ花澤へは五丁、上方の蘆の湖乃ち箱根湖水へは一里八丁といふ。

湯ノ花澤 蘆ノ湯の松阪屋の背後より、駒ヶ岳の麓を上ること五丁の地に、近年開けたる浴場にて、花の湯といふ一戸あるのみ。此の地は浴舎の外に、湯の花を採て乾燥し、四方に發賣す。其の地の高燥なる爲に、外國人の來り留まる者も數多あり。

箱根湖 蘆ノ湯より箱根湖まで、一里八丁の間、阪路も甚だしく急ならず、路傍ニタ子山の麓に曾我兄弟の墓、また多田滿仲墓と稱するもの、及び山腹の巨石に彫刻した

る二十五菩薩、同大地藏などあり。往昔此邊りは箱根別當の奥の院の舊蹟なり。盛夏の候は、山橋に乗る日本人、安樂椅子の左右に棒を添へて四人昇にする西洋人、楮は靴の上に紳鞋を穿ちたる西洋婦人などの遊客を見ること多し。山路登り盡せば、箱根湖は、四方を山に圍まれて、碧瑠璃の一大鏡を現出し、富岳は西北方に聳へて、逆さに影を湖面に落とす。湖の南岸は、塔ヶ島の半島湖上に峙ち、上に帝室の離宮は屢氣樓の如くに立ち、半島の東方は元箱根村にて、西方は箱根町、町の東端、湖水と文庫山とに介する所に古關址あり。湖は山中第一の絶景、元箱根の岸に立てば、右には箱根神社の蒼翠ありて、鎌倉幕府時代には、相模の大部分を領したる箱根別當の邸址あり。池畔の賽の河原には、今も巨石の古佛像古佛塔の起伏して横はるもの多く、以て盛時の繁昌を想像するに足る。(口繪寫眞參照すべし)箱根湖はまた蘆の湖と稱す

箱根驛 元箱根より老杉の森鬱たる東海道國道を西に往き、離宮の門前を過ぎ、古關址を経て、箱根町に達すれば、此所は五十三驛中の一にて、東海道は山下の湯本より、須雲川に沿ひ、畑、須雲の二村を經、元箱根の湖畔に出て、温泉道と合し、乃ち此所に達するなり。町の戸口は百二十餘、當初町の開けたりしとき、山下の小田原と三島との

兩地より土民を移し住ましめたるより、今も箱根町を二分して、東を小田原町、西を三島町と呼び、東は小田原藩主大久保氏の所領、西は韭山代官江川太郎左衛門の所管たり。舊時は唯だ往來の旅客にて生計せしに、東海道流車通じて以來行客稀に、町は一旦甚だしく衰頹したりしも、近時毎年盛夏には、西洋人の避暑客輻輳し、各家の室を借りて滞在する爲に、忽ち山上に外國人居留地を現し、暑中の箱根町は、古來未嘗有の繁昌を見るに至りぬ。

箱根驛より西方、山麓の三島驛まで三里二十八丁、箱根より西に數丁にして相州豆州の國境にて、更に爪先下りに、山中、笹原、三ツ屋等の立場を過ぎ、三島に着し、また西方一里半、黄瀬川の橋を渡りて沼津に着けば、東海道鐵道は、北方の山間に山北、松田、御殿場、佐野、三島の各驛を過ぎ來りて、此所に會し、鐵道は再び東海道と並行す。日金峠 箱根より伊豆の熱海へ赴く間に、日金峠の勝あり。此間五里、箱根驛の西端より登ること十八丁にして山頂に達し、此れより馬の背の如き鞍掛山の絶頂を西南に向つて行くに、右方は駿河灣の真帆片帆、江の浦、牛臥、沼津、興津、清水の邊りまで手に取る如くに望まれ、左方は相模灣に沿ひ、小田原、國府津、大磯の海岸、三浦、三

崎の半島を隔て、遠く房總の翠黛を雲烟縹緲の中に眺め、頭を轉して背後を見れば、富嶽は高く天半に聳へて、腰より下を白雲に隠す、眼界頗る廣し。山上を行くこと三里にして、十國一覽の石碑あり、故に之を十國峠とも呼ぶ。此所より山を下るに、湯河原、伊豆山、熱海の各地に通ずる阪路數條あり。日金村の地藏堂の前を過ぎ、急轉直下、五十丁にして熱海に達す。

熱 海 附 近

熱海温泉 東京より熱海に赴くには、普通は國府津まで流車、國府津より小田原までは電車、小田原より熱海までは人車鐵道に乗る。小田原より熱海まで十六哩十二鎖の間、米神、江の浦、真鶴、吉濱、門川、伊豆山、の諸驛を設け、全線の乗車賃六十六錢、一日七回づつ、双方より發車し、片道に三間時を費やすなり。箱根以東の浴客は、皆な之に由るのみならず、箱根以西の浴客も、また國府津まで流車に由り、電車と人車鐵道に依るを便とす。唯だ人車は危険の處多きと、進行の遲緩なる爲に、近來人車をも電車に改むるの計畫あり。此事早晚實行せらるべし。熱海の温泉は、由來頗る古く、冬は煖か

にして夏は涼しく、靈泉各地に湧出して、痼疾を養ふに適すれば、温泉宿には富士屋、相模屋、眞誠社、氣象万千樓、大光館、鈴木屋、阪口屋、露木、小松屋、尾張屋、古屋、高砂屋、山田屋等を著名とし、五百戸以上の市街、帝室の離宮あり、郵便電信局、警察署ありて、浴舎は家ごとに浴槽を備へ、高閣大樓軒を駢べ、東北西の三面は山を繞らし、南方のみ海に面し、海上三里を隔て、初島を庭園の如くに望み、遙かに大島に對し、眺望、氣候、温泉、旅館の要素盡く備はる。故に明治十五年の頃には、貴顕紳士多く者の爲に絶好の保養地として愛せらるゝのみと爲りたるも、避寒、避暑、遊覽、の何れも目的によるも、熱海は決して看過すべからざる勝地なり。宿料及物價も箱根に比すれば廉に、海には東京より日々に東京灣汽船會社の往復するあり。汽船賃は下等七十錢なり。唯だ汽船の小にして婦人小兒等は船量を醸し易さを遺憾とす。(口繪寫眞参照すべし)



此所に會し、内閣會議なども數しば此所に開かれしが、近來大磯、箱根、逗子、葉山等の漸く開くるに及び、交通の不便なるが爲に、熱海は其の繁昌を減じ、徒らに肺病患

熱海公園 熱海本町を距る八町許の高阜、清泉走りて亂石を噛み、忽ち合ひ、忽ち離れ、涇々潺湲、琴筑を敲するが如き所、地を拓いて梅桃を植ゑ、梅は一月の初より開き、遊賞の客をして人間第一の春を占領せしむ。

伊豆山温泉 熱海の東十七八丁、小田原より人車鐵道沿道の一驛にて、温泉宿は山下の海濱に軒を連ね、熱海街道より阪路を一町餘下りたる所にあり。伊豆山を後にして、相模灘に面し、伊豆七島を西南に望みて、房總半島を東南に眺む。明礬及硫黄質の温泉にて、婦人生殖器諸病胃腸病肺病等に効ありと稱せられ、温泉宿は、江島屋、相模屋等を巨壁とし、高所より落下する湯を引て湯瀧と爲し、海濱にて浴するもの多きは、此地の特色なり、物價は熱海に比して更に廉なり。

網代 熱海の西、海上二里、陸行すれば下田街道に沿ふ一漁村、三方に山を繞らし、風浪の險無く、船舶の寄泊に便なり。東京下田間を往來する汽船は、往復ともに此所に寄泊す。戸數四百餘、熱海と網代の間、魚見岬は海中に斗出して、海灣を二分し、沿岸に巨巖多く、星散甚だ佳なり。熱海浴客の小舟を浮めて遊覽するには極めて妙なり。

伊 東 温 泉

伊東の地名は伊豆の東といふより起り、伊豆の國田方郡の東端、網代よりは海路三里許の所にあり。東京灣汽船會社の下田通汽船と、別に伊東國府津間を往來する汽船あり。單に伊東と總稱するも、松原、湯川、岡、鎌田、新井、玖須美の六ヶ村より成り、温泉は玖須美と松原の二村中、所々に湧出し、其の松原に在る猪戸の湯、出來湯、和田の湯など最も現はる。温泉宿は、猪戸にては榎屋、山田屋、旭屋、山本屋など名高く、出來湯には、前田屋、寶來屋あり。玖須美には大阪屋、櫻屋、など、皆な多くは近來の新築にて、物價廉に、氣候人に適す。唯だ交通の不便なるを惜むなり。若しも汽船に由らざれば、陸上は、熱海へ五里、網代へ三里、修善寺大仁または韭山へはともに五里、下田へは十三里何れも人力車を通ぜず、山路僅に轎を通ずるのみ。東京へは汽船にて普通に通じ十二時間を要す。故に熱海より汽船によるか、豆相鐵道の大仁驛より下車して赴くを便利とす。此の附近には源頼朝の配流せられて伊東祐親の家に居り、其間に祐親の女と通じたりとて淫狼の遺蹟あり。

140  
403  
49

修 善 寺 温 泉 近 傍

豆相鐵道 伊豆半島は、全國至る所に温泉湧き、天城山脈を中心として、東方に熱海、伊東の温泉あり。北方に古奈、修善寺、吉奈、湯ヶ島等の温泉あり。南方には、湯ヶ野、蓮蓬寺、等の温泉あり。また西海岸は、一帯に海水浴に適す。而して熱海伊東は既に案内したれば、今は修善寺に導かんとするに、伊東温泉よりは山路五里にして達するを得るも、路險にして車を通じかたく、足弱き者の通行困難なれば、東西よりする最も安全なる順路は、東海道鐵道三島驛にて豆相鐵道に乗り替へ、終端なる大仁驛にて下車するときは、最早修善寺まで十餘丁にして、其間馬車人力車あり。豆相鐵道は三島大仁間十哩六鎮の距離、一日七回づゝ往來し、賃錢三等二十錢にして、此間四十分を費すなり。

修善寺温泉 大仁にて汽車を下り、狩野川を渡り、瓜生野を過ぎ、右折して桂川の流に沿ひ遡れば、忽ち修善寺に着す。此地の温泉は、弘法大師の發見と稱し、其の由來の古きは、鎌倉時代に頼朝の弟範頼は建久三年此所に自殺し、頼朝の子頼家も此所の

寺に幽閉せられ、後に浴室にて殺されたること、皆な歴史上に著名なるにても知らる。方今温泉宿は、桂川の溪流を挟みて兩岸に連なり、虎溪橋、後月橋の二橋を架して往來し、温泉は兩岸に湧き、また河中にも湧き、浴槽を溪流の中間に設くるあり、之を獨鉗の湯といふ。温泉旅館には、養氣館（新井）衛生館（大川）淺羽樓（淺日）疑雨來館（野田）菊屋（野田）の五軒最も現はれ、柳屋、仲田屋、橋本屋、四方樓、江戸屋、水月屋、宇佐美屋、柏屋、野田屋支店、湯川屋等あり。宿泊料は總て木錢の制を以て浴客の需に應じ、廉なるは一日二十錢、高きも一日一圓内外にて過るを得。旅館の大なるは、建築宏壯、客室瀟洒、都人士の遊浴に適し、温泉は儂麻質斯、消化器諸病、婦人生殖器諸病、神經病、呼吸器病、皮膚病等に効ありといふ。（口繪寫眞参照すべし）

**修善寺** 肖廬山修善寺は桂川の北岸なる丘上に在り。南方に面す。大同中弘法大師の創建にて、當初福地山と稱せしが、建長中鎌倉より來住せし、宋人劉蘭溪は、其の地の彼國廬山に肖たりとて、斯く改め、之と共に、橋名を虎溪と稱し、門を三笑關と號す。寺の什物には、尼將軍寄附の經卷、化條早雲の手箱、豐太閤の教書等あり。源頼家の墓は、川の南岸なる小丘の上にあり。源範頼の墓は北岸に在て、對岸の頼家墓と相對す。

頼家墓の東隣に三州園といふ遊園ありて、園内に貸席を兼ねる料理店指目館あり。浴客の徒然を慰むるに適す。

**附近の温泉** 修善寺より下田に通ずる縣道は、天城山の麓まで、四里の間は人力車を通ず。但し縣道は大仁より湯ヶ島に通ずるも、修善寺より縣道に出るには、不越阪を越るなり。斯くて縣道に出て、大平に至れば、右に旭澤あり、高き三十丈、中央より二段と爲りて二口に分れ、東に面して旭に映するより此の名あり。冬時氷結するとこは、美觀を極むといふ。大平より松ヶ瀬、青羽根の二村を過れば、右に船原温泉あり。旅館を鈴木と呼ぶ。更に南方に狩野川に沿ひ、月ヶ瀬を過ぎ門野原に至れば嵯峨澤温泉あり。旅舎一戸、湯本樓といふ。浴客は多く田舎客なり。また行くこと二十丁許にして湯ヶ島温泉に達す。また狩野川の上流にて、旅舎落合樓は、溪流に臨み、釣橋を架して往來す。家は天城山の巨材を用ゐ、建築甚だ壯麗、室は源氏名を以て命じ、桐壺、夕顔など名づく。他に二三の温泉宿あるも、小にしてまた落合樓の比にあらず。此所より歩を旋して北に向ひ、數町にして川を渡れば、東岸に西平温泉あり。旅舎一戸湯本屋といふあり。また吉奈温泉は、嵯峨澤温泉の北方數丁の地より、西に徑路を行くこと十餘丁にして達

し、温泉宿は東府屋、湯本屋、吉野屋、飯屋、萬屋の五軒あり。東府屋を巨擘と爲す。また豆相鐵道南條停車場より十町許の地に古奈温泉あり。温泉宿七八戸ありて、石橋三左衛門といふを巨擘と爲す。浴舎は料理店を兼ね、怪し氣なる藝妓などありて、地方人士の遊興を盡す所として知らる。

下 田 近 傍

下田町 湯ヶ島温泉より、天城山中に開かれたる縣道を紆餘曲折して上下し、南に向つて山路五里にして湯ヶ野に出づ。また温泉あり。更に小鍋、須原、箕作、立野等の諸村を過ぎ、四里にして下田町に達す。半島の南端なり。稻生澤川、北より流れて下田港に注ぐ所、須崎は東に斗出し、城山は西に聳へ、灣内の前面に金島横はり、三面陸を繞らして風浪の險少なく、規模は小なりと雖も良港たり。(口繪寫眞参照すべし)下田は、往時帆船時代には、遠州洋の東端にて、一たび此地を去れば、志摩の鳥羽港まで七十里の間碇泊所無く、また此地より江戸に往くにも、品川まで五十里の間、碇泊所無れば、東西往來の船舶は、皆な此所に碇泊して久しく流連したる所、今は汽船時代と爲り

て、また舊時の繁昌なまも、伊豆七島へ赴く汽帆船は、尙ほ此所に輻輳して天候の順なるを待つが故に、伊豆國中第一の都會なり。戸數約一千餘、人口五千餘、賀茂郡役所、下田區裁判所、同稅務署、警密署、郵便電信局、町役場等あり。また下田船渠會社あり、船渠の長百四十七尺、城山の麓にあり。旅館には松本、山本、阿波屋、等を著名とし、他に船宿を專業とする者六七戸あり。料理店には、鳥吉樓、八十八樓、壽樓、等の外、尙ほ數多あり。會て開港の初、徳川幕府は米國使節と協商し、下田と函館とを以て開港場とし、米國は一たび領事を此地に派遣して駐在せしめ、長州の俊傑吉田松陰が、密に米國船に乗込みて海外に赴かんと企て、捕へられたるは此地なり。惜い哉交通極めて不便に、陸上唯一の縣道なる三島往還も、天城山の險あり。况や東海岸の熱海街道、西海岸の沼津街道、何れも山岳重疊して、一條の細徑を存するのみなれば、一旦開きたる開港場も、其の不便に堪へずして、横濱港を以て之に代るに至りぬ。方今此地の交通機關は、夏時は毎日一回東京と往來する東京灣汽船會社汽船及び日々に沼津との間を往復する伊豆浦汽船會社汽船あるも、一旦風浪起れば忽ち航行を止むる不定期船にて、之を外にしては徒歩または輜輿の外、四方の往來を絶つなり。故に其地は一區の別天地を爲し、



暖昧なる小料理店多く、牛と名くる密賣淫婦徘徊し、淫風頗る盛んなりと稱せらる。  
 城山公園 下田市街の西南端なる鵜島は、中古北條氏が城を築きし所、今は城山と稱し、帝室御料林にて、老松古杉鬱蒼として茂り、登臨すれば眼界極めて濶く、下田市街と下田灣とは脚下に望み、東は下田灣の彼方に須崎と對し、須崎の背後、太平洋中に烟を吹くは大島なり。頭を回せば西南に海上五里を隔て、一小嶼の上に白塔の聳ゆるは神子元島の燈臺なり。其の背後に水天髣髴の間、一抹の青螺、宛かも庭上の踏石の如く連なるものは七島なり。山上所々に懸茶屋あり。其の風景の美に、眺望の雄偉なる、此の邊境には、惜しき物と言はざるを得ず。

伊豆七島 とは大島、新島、利島、神津島、三宅島、御藏島、及八丈島と爲す。大島へは伊東より往來すると最も便と爲し、八丈島へは横濱より特に毎月約一回小笠原島定期船の寄泊するあり。他の五島は、東京灣汽船會社汽船、下田を経て往來し、下田より新島まで海上十三里、風順なれば三時間にて達し、三宅島へは新島より十三里、また三時間にて達す。また下田より大島へ十三里、神津島へ十八里、御藏島へ三十二里、八丈島へは八十里にして、八丈島の外は、風順なるときは半日にして達するも、風逆なれば

數日乃至十數日を下田港に滯泊せざるべからず。故に下田の旅館中には、島宿と稱し、各島往來の旅客を第一の顧客とするものあり。

伊豆の西海岸

伊豆半島の西海岸は、海灣犬牙の如くに出入し、灣は皆な三面を山にて圍み、山は盡く峭峻、一大巖より成り、山腰は海波に洗はれて、洞門を爲し、懸崖を爲し、老松巖角に生じ、或は崖下に垂れ、奇景百出す。此等の奇景を探らんと欲して下田を發すれば、先づ達するは

手石の彌陀窟 と爲す。下田より西南約二里、日野川の海に注ぐ所の海上にある一小島、巖巖より成るもの、千秋不斷の海波に打たれて、一洞を爲し、中に小舟を入る。洞中の小隙、日光を漏らし、潮水に映するときは、形は三尊の彌陀の如し。土人は之を阿彌陀佛の來迎と稱し、信心深き者にあらざれば拜する能はずと云ふ。是れ潮水の干満と、日光の位地によりて、有無隱見するものなれば、之を見ることが得るは甚だ稀なるも、道理の明かなるを得れば、不思議にはあらず。唯だ其の景は甚だ愛すべし。手石を過ぎ、

山路を越へて次の海灣を南崎村と云ひ、海岸の島嶼益々多く、霸王樹の如きもの、蘇鐵の如きもの、入定の僧の如きもの、奇態百出し、島を隔て、海上には、斷へず神子元島の燈臺と相對し、海岸に平地あれば、所々に牛を放牧し、殊に景趣を加ふ。また一山を越へて小灣を長津呂と云ひ、其の南方の海中に二十丁許斗出するものを  
石廊崎 と爲す。伊豆半島の最南端にて、其の岬端に、海岸望樓と燈臺及電信局あり。石廊一に石室と書す。開天闢地以來、岬端の山腹は日夜斷へず外洋の怒濤に洗ひ去られ、皮は剝げ、肉落ち、唯だ巖石の骨立するのみ。其の懸崖の屏風の如くに峙てる半腹を穿ち、權現祠を安んず。實に半ば石窟の中にあり。故に石室權現と呼ぶ。是れ石室崎の名ある所以。長津呂より石室まで、馬背の如き半島の頂上に、一條の細巡榊の間に通するもの十八町、海岸望樓は白く綠樹の上に聳へて、屋氣樓の如し。身を岬端の巖上這ひ松の間に置き、眺を放てば右方は遙に遠州御前崎と對して、遠州洋を眼下に下瞰し、左方は相模洋を隔て、三浦三崎と相對し、前面は茫々たる太平洋、近く神子元島の燈臺を望み、遠く七島中の大島、利島、新島、神津島を指點するも、三宅島以南は視線の内に入らず。東海航行の汽帆船は、皆な日夜此の岬上と神子元島の兩燈臺を目標と

爲し、其の間を過るなり。燈臺の下、石室權現祠に至るには、獅子の怒るが如き巨巖の背を踏み、腹を攀ち、紆餘曲折して下れば、巖の最も突出する所、水面十丈の上に在りて、懸崖の下、深潭の中、蛟龍棲み、鯨鯢潛じらんと思はれ、遠く水天接する邊より頽れ來る怒濤は、大山の崩るゝが如くに懸崖を打ち、咆哮怒號、聲は萬雷の轟ろくが如く、凄まじきこと言ふ計り無し。久  
しく止まれば神悸さ眼眩す。再び歩を旋して長津呂より、山下に下れば、仲木灣の壺村漁落あり。また山を登りて次の海灣に出れば、灣の南岸は妻良、北岸を躋すれば、伊濱、雲見岬等の間に、大島小嶼星羅碁布する間を過ぎて、松崎に至るべし。  
松崎 下田以北、沼津までの間に、最も殷賑なる一小市街、中川は源を天城山より發して此所に注ぎ、川に臨みて旅館あり。下田通ひ汽船の外に、松崎沼津間にも、別に



汽船の往來するあり。松崎灣の北方一里、仁科の海岸は、岨礁壁立、風景絶佳、伊豆西  
海岸中、石室崎と相俟て、眺望比類稀なり。唯だ地の僻にして多く世に知られざるを惜  
む。

戸田海水浴 松崎以北、仁科、田子、安良里、宇久須、土肥、戸田に至るの間、皆  
な汽船の寄泊地にて、風景盡く凡ならず。而して戸田は最早沼津に近く海上四里餘に  
過ぎず。舟行容易なるが爲に、多く世に知られ、加ふるに會て安政元年十一月四日、露  
國軍艦の下田港に碇泊中、海嘯の爲に損傷したるとき、此所に来りて幕府に請ひ、天城  
山の材木を伐り出し、新たにスクーネル形風帆船を造りて歸國し、當時日本の船大工を  
使役したる爲に、我國造船業の上に一新紀元を開きたる所、また其後露國政府は其新造船  
に大砲四十八門を載せ、我國に贈りて救助の好意を謝し、日露國交の上に重要な歴史あ  
る土地として知らる。其海灣は波穩かにして海水浴に適し、前は駿河灣に面して、近く  
富士山を仰ぎ、三保の松原、清見瀨は、灣の彼方に相對し、風景また頗る佳。加ふるに  
旅館保養館は、設備整頓して物價また廉、學生の避暑地には最も適すと稱せらる。但し  
館は戸田灣口の岨端にありて、戸田村とは海上十數丁を隔つ。陸上には中間に山ある故、

海上常に小舟を以て往來す。沼津より戸田までは、毎日二回汽船往來し、約一時間にし  
て達し、賃錢は一人十五錢なり。  
戸田以北は大瀬崎を過ぎ、江ノ浦灣の内は、江ノ浦、靜浦、我入道等の海水浴地多  
く、東宮離宮も、其の間に在り。然とも沼津附近の部に於て、之を説く可れば今は略しぬ。  
斯くて箱根の西、駿河に出てたれば、今は富士登山を案内すべし。

富士山登臨

本邦第一の名山たる富士山の位地は既かずもかな。山邊の赤人が、讚嘆の歌を貽して  
より以來、此山を詩歌に詠じたるもの甚だ多く、一々枚舉するに違あらず。而して古  
此山を見むとて、諸所より集れるものは、多くは麓より眺め上げたるのみにて、登山せ  
るは稀なりしが如し。然るに應仁の亂ありて後は、登山者大に増加し、天文永祿の頃に  
は、今川氏が、登山者に關する法令すら發するに至り、徳川氏時代に至りては、更に其  
數を増加し、今は年々數萬人の登山者あり。  
登山の順路と準備 富士山嶺に躋らむには、五箇の道あり。一を大宮口と云ふ。別に

表口と稱し、駿河富士郡大宮より登るなり。第二を北口と言ひ、甲州吉田より登るものとす。大宮の表口に對して之を裏口とも言ふ。第三は東口にして、須走より登るものとす。第四は駿東郡須山より登るものにして、須山口と稱し、第五は須走口及び須山間の間なる東表口(新道とも云ふ)にして、御殿場より直接に登るものとす。從來箱根以東の人々が最も多く登れるは須走口なりしかど、昨年は新道を選ぶ者多し。登山者は、何れの道よりするを問はず、先づ麓の旅店にて、登山一切の用意を爲すべし。何れの旅店にても、萬端の用意を周旋すべけれども、念のため其重なるものを擧ぐれば左の如し。

一、強力を雇ふと、強力とは案内者の事にて、三貫目位の携帶品を負ふ。賃金は大宮御殿場よりすれば、一山(絶頂に達して再び麓に降る間にて、其間の日數時間の多少を問はず)一圓位にして、其他の登口よりすれば、六十錢以上八十錢位なり。此差異は麓の宿より絶頂に至る迄の距離の差に由る。又強力の飲食料及び宿泊料は、總て登山者の負擔とす。

一、携帶品、旅店にて綿入を貸す。但し山上に一泊せざる者には必要なし。宿屋の綿入を嫌ふ人は、毛布を携ふるも可なり。次に草鞋は一人前に十足を要す。

一、飲食物、旅店にて辨當、餅等を出すべく、又山中何れの道にても、鶏卵、牡丹餅、酒、菓子等の用意あるのみならず、絶頂には甘酒あり。然とも何れも餘り美味ならざるが故に、登山者は、豫め己の好める物を携ふべし。山中の食用としては、氷砂糖、ビスケット、牛肉罐詰、ブランドー等宜し。

さて仕度は成るべく輕装すべし。帽子は烏打帽子を尤も宜しとす。足袋は底の厚さを撰ぶべく、肌にはフランネルシャツを着すべし(初は少し暑けれど中腹以上に至りては是非とも必要あり)次に鉢裁餘り宜しからざれども、縫を着れば日光の直射を防ぐに宜し。吸筒は必ず携ふべし。又藥品には、寶丹か清心丹か、或はコロ、ダインなど宜し。是れ登山中餘りに水を飲みて下痢を起すとあればなり。此他登山者の心得一二を掲ぐれば、初め元氣に委せて登らざると。食物は數回に分つて食ふと。酒類は決して用ひざると。(但し山上にて所謂山氣に中りたる人には、ブランドー少量を與ふべし)等なり。

山は麓より頂上迄の間、何れの道をも十合に分ちて、各合毎に茶屋あり。麓に近き茶屋は、木造なれども、中腹以上のものは、所謂石室にて、山中の燒石を疊みて造りたるも

本日漫遊案内

のなり。蓋し十合に分つ所以は、山全躰を一升と見做して、一里行きしと同じ程の勢を  
覺ゆる地を以て一合と定めたるものならむか。或は又曰はく、合と云ふは、劫と書すべ  
し。これ佛説に従つて一切二劫と登り、十劫に至つて極樂淨土に達する意なりと。  
以下大宮登口より紹介すべし。須山口は佐野停車場より葛山を過ぎ愛鷹山の麓を行く  
と二里半なる須山村に在り。登山の事は他の登口と甚しき差異なきが故に之を略す。  
大宮口 大宮口より登らむには、東海道の一驛鈴川にて下車するを便とす。此驛及大  
宮間四里餘には馬車鐵道あり。賃錢二十錢なれど、富士登山者の爲には特に二割を減す  
るを例とす。先づ鈴川及び大宮附近の名勝より紹介すべし。  
鈴川 同停車場の南なる小丘を砂山と言ふ。又の名を天香久山とも云ひ、北に富嶽、  
西に田子の浦、三保の松原、久能山を望むべし。有名なる勝區、田子の浦は、驛の西南  
なる元吉原附近にして、右に三保松原、左に牛臥山を望んで風色佳絶なり。曾つて海水  
浴場開かれしかど、明治卅二年十月、海嘯の災ありて後大に荒廢せり。澗川の水門橋を  
渡りて行くべし。  
吉原 鈴川より鐵道馬車に乗りて數丁行けば、富士の正面を見る勝地たる柏橋あり

東海附道

是より廿町許にして、吉原町に達す。これ東海道驛次の一にして、甲州街道の分るゝ所、  
今尙は繁華にて、妓樓軒を列ぬ。  
福泉寺 吉原より尙ほ馬車にて行き、傳法を過ぎ、厚原に至りて下車し、右方の  
舊道を行く數丁にして、久澤村に至れば、曾我兄弟の墓、及び其木像を藏する福泉寺あ  
り。曾我祐成の妾虎御前の草庵を結びしも此寺なり。  
富士製紙會社 馬車の停る入山瀨には、富士製紙會社の第一工場あり。平間には同  
第二工場あり。規模孰れも宏大なり。附近の繁昌、一に此會社の在るが故ならむ。  
大宮町 製絲製茶業の盛なる地にして、夏は富士登山の客を迎へて繁昌するは大宮  
町なり。戸數千餘戸ありて、町内の製絲工場十餘箇所あり。皆な淺間神社の境内より湧  
き出づる湧玉池の水を利用す。有名なる淺間神社は、町の西端に在りて、町の中央に一  
の華表あり。是より一丁ばかり行けば、即ち神社にして松檜鬱蒼たり。祭神は木花咲耶姬  
命にて、境内には櫻樹數百株を植ゆ。皇太子殿下御手植の櫻、小松宮殿下御手植の櫻、  
武田信玄手植の櫻等は皆な本社に在り。又社殿の東側神立山の麓には、湛々湧き出  
づる泉ありて、湧玉池をなし、山の岩間よりも亦清水流出して池に流る。水勢盛にして

本日漫遊案内

忽ち大河流となり、清澄底の石をも数ふべく、清流掬すべし。富士登山者は此池にて身  
 軀を淨むるものとす、社前には旅店多し。此處にて登山の用意すべし。其道は淺間神社  
 の西より本社の後方に出て、右方に行くと一里にして村山に至る。此地に淺間神社の攝  
 社たる根本淺間神社あり。これより草繁き東宮ヶ原を登り一里餘にして大華表の跡ある  
 札所に達し、それより更に一里登れば八幡堂に着す。大宮より八幡堂迄馬あり。乗馬賃  
 六十錢。又村山八幡堂間の乗馬賃四十錢とす。  
 富士登山株式會社 八幡堂にては富士登山株式會社なるものあり。登山者の便を計  
 りて、山中の茶券、食券、宿泊券を賣る。山中物價大凡左の如し。  
 木賃特別 一圓二十錢  
 飯料 十七錢  
 茶(室全替にて) 十錢  
 甘酒一杯 二錢  
 草鞋一足 四錢  
 八幡堂にて金剛杖を購ひ、是より一里登れば笹垢離といふ處に至る。雲切神社あり。更  
 同並 二十二錢  
 金剛杖 七錢  
 卵一個 五錢  
 牡丹餅一個 一錢五厘

東海道路附近

に一里にして一合目に達す。是より二合三合と登り、六合目以上に及べば草木なく、眼  
 界廣豁、天地を睥睨し、身は宛も羽化登天の感あり。八合目以上は阪路急峻躡攀最も困  
 ひ。中にも九合目位より十町許の間を胸突と稱し、一步一喘歩毎に休息せざるべからざ  
 る程なり。かくて頂上淺間岳の傍に到れば、輒ち絶頂に達す。淺間神社の奥院あり。  
 (頂上の案内は後に説くべし)  
 大宮口の裾野 案内は少しく後へ戻れども、大宮口方面の裾野にて、古來名所として  
 知られたるは、富士の西麓、大宮を去る三里餘なる上井出村と白絲村との間に在る白絲  
 瀧なり。直下八丈、幅四十餘丈、水の迸り落つると宛然數百の管よりするが如し。源  
 頼朝が「白絲をあわ緒によりて結べども瀧の流は手にもたまらず」と詠みしは此瀧の事  
 なり。又仁田四郎が往復一晝夜を費したりといふ有名なる入穴は、白絲の瀧を去る約一  
 里なる上井出村大字入穴に在り。今は洞口より二町許の處に石を重ねて其より奥に入る  
 を許さず。建久四年源頼朝が催したる富士の牧狩は、今の上井出村附近にて、假御殿  
 井出館址と稱するは、白絲村字狩宿に在り。又工藤祐經が墓は白絲瀧を去る四五町の地  
 に在り。

東表口(御殿場口) 御殿場より登るを東表口とす。東海道鐵道の御殿場停車場に下れば、驛前に富士屋支店、吉島屋、桐屋、大黒屋等の旅店あり。又夕刻此地に至りて、翌日登山する者は、停車場より十二三町隔りたる舊御殿に至るを宜しとす。此處には富士屋本店、近江屋、恵比壽屋等の旅店あり。普通の道者は、多く停車場附近に屯し、此邊までは、侵入せざるが故に、雑踏するとなくして心地好し。偕て御殿場より一合目迄は三里八丁ありて、其間人力車を通ず。一里にして瀧川村、二里にして馬返し、二里半強にして太郎坊に着す。此處にて金剛杖を買ひ、それより一合目、二合目と登るなり。五合目以上箱根足柄雨降の諸山を脚下に望み、左に寶永山を眺めつゝ登れば、眼界次第に廣く壯快なること筆舌の及ぶ所にあらず。これより六合、七合と上り、胸突八丁の難所を過れば山嶺に達す。健脚ならざる人は、六合目か或は八合目にて一泊するを宜しとす。固より此他何れの石室にて宿泊するも可なれども、此二者尤も大なるのみならず、日の出の偉觀を見るに、最も適當なればなり。山中の物價は大宮口と霧俣同一なり。

須走口 御殿場より鐵道馬車ありて、須走より甲州裏口吉田に至り、それより谷村を経て官設中央線大月停車場に至る。其途中須走より籠坂峠を踰れば、山中湖あり

これ富士八湖の一にして、湖岸の幽邃なる風景愛すべし。須走には米山旅店の外に數軒あり。登山者は是等旅店にて一切の用意を調へて登山すると他の口に同じ。而して其道は八合目に於て、吉田口と合す。須走口は下り道、即ち所謂走下るに最も便なり。故に登るを東表口よりし、下りは須走に出づる人多し。山中の物價は前に同じ。

吉田口 吉田口より登らむには、官設鐵道中央線大月驛より下車し、鐵道馬車にて谷村を過ぎ、吉田に至るも可なり。又御殿場より鐵道馬車にて、須走を過ぎ、籠坂峠を越えて、吉田に至るも可なり。吉田には芙蓉閣、吉島ホテル等の旅店あり。登山の準備は前と同一なれば略す。山中の風景は、他に比して更に亦優等なり。(吉田口の富士は口繪寫眞参照すべし。) 吉田より太郎坊に至る間を鈴原と稱す、太郎坊に近き所には胎内寶あり。次に山中五合目位の右手に當りて、崛起せる小峰を小御嶽と言ひ、小御嶽神社其林中にあり。

吉田口の裾野 吉田附近の裾野にて名高きは、其西一里許なる川口湖の景を第一とす。湖中に鷗鷺島の奇勝ありて、湖畔には旅店あり。此湖の西方に聳えたるが、十二嶽にして、役の小角が富士登山前に行法したる山なりと傳ふ。川口湖の南には西湖あり。

是より富士山麓に沿うて精進湖、本栖湖等の奇勝を探り、割石峠を蹴れば三里弱にして人穴に達すべし。上記せる川口、西湖、精進、本栖の外に、山中湖（龍坂峠下）浮島沼（原及鈴川間）明見湖（甲州南都留郡明見村）志比連湖を合せて富士八湖とす。

山嶺 以上にて須山口を除くの外、東口、東表口、表口、裏口の四所を案内し終りぬ。頂上迄の里数は、須走より五里、御殿場より八里餘、大宮より八里、吉田より六里とす。以下山嶺の大畧を案内せむ。頂上八方の壯大なる風景は一々念し難ければ、今は畧す。

更に此後數歩にして舊噴火口の壁頭に出づ。俯して坑内を覗けば、種鉢の形をなし、下底に平坦なる巨岩は、千秋不盡の雪を破つて露出するあり。又噴火口岸の南方に、突出せる怪巖あり。蹲虎に似たるが故に虎石（獅子石とも稱す）と稱す。噴火口の直徑は約十三町位にして是を一周するには外輪廻り、及び内輪廻りの二道あり。



\*何れの登り口よりするも、絶頂に達したる所には、奥宮あれど、奥宮中の本社は、表口即ち南方に面したる淺間岳に在る神社なり。本社は石を疊み、内部は木造なり。其左方には都良香朝臣の富士山記の碑あり。

外輪廻り、富士山記の碑より少しく南に行き、鰐池と稱する河原（夏季は水なけれど、秋季に入れば水ありとか）を過ぎ、其より三島嶽を左方に望み、富士山嶺第一の峻峰たる劔ヶ峰に登るべし。劔ヶ峰は巖石の山にして、巖質堅くして利刀の如きが故に此名あり。其麓は野中至氏の測候所ありし所なり。是より雷巖を過ぎ白山嶽に至り、釋迦の割石と稱する斷崖を見て、東に出づれば久須志嶽あり。此處は吉田口及び須走口の絶頂にして、久須志神社を拜して、少しく下り、數戸の石室を過ぎて、富士の東側に出で、伊豆嶽、成就嶽を廻る途中に、蒸發氣の地上二面より噴出して足底に温氣を感ず。次に東麓の河原を過ぎ、巨巖の間を行けば有名なる銀明水ありて、其より八ッ子の梯子を登れば駒ヶ嶽にして、大石俵石なるものあり。此次は即ち淺間嶽にして、是にて外輪廻りを終りたるものとす。其里數約五十町許なり。以上列記せる淺間、三島、劔ヶ峰、白山、久須志、伊豆、成就、駒ヶ嶽を富士八峰と稱し、浮屠氏は是を八葉の蓮華に比す。芙蓉峰の名、之より起る。

内輪廻り 是は卅町位なり。劔ヶ峰迄は外輪廻り同一の道にして、是を下つて噴火口の岸なる平地に至れば、西麓の河原あり。此地より馬背山を右にして行くを外輪廻りと



し、同山を左に見て行くを内輪廻りとす。賽の河原を行く數十歩にして、白山嶽の麓に  
金明水あり。銀明水と並び稱せらる、井にして、水は極めて清冽なり。此兩井共に二尺許  
の深さなれど、水は曾て盡くるとなし。富士講中の徒は、是を神水と稱し、瓶に盛りて  
家に持ち歸るを例とす。金明水より噴火口に沿ひて凹凸甚しき巖石の上を行けば、東表  
口に達す。

下山 以上にて山嶺の事を案内し終りたれば、茲に下山に就きて一言せむ。何れの  
登り口にも、走り道あり。これ下山道の事にして、草鞋を三重四重に穿つて、下るなり。  
一歩出づれば、砂滑りて五六尺を下り得べく、身は飄々として、風に乘じて下るの感あ  
り、快極りなし。其道は何れも一直線なるのみならず、急がざるも自ら速かに歩を運  
ぶが故に、絶頂より三時間位にして、麓に達し得べし。

中道巡り 何れの登り口よりするも六合目位の中腹を一周するを俗に御中道巡と稱す  
途中には寶永山、崩れ穴、牡丹畑、鬼ヶ澤、天の浮橋、冠石、姥ヶ懐、大澤、大澤の石  
瀧、木花澤、佛石澤、神の御庭、小御嶽等の難所又は奇勝あり。又富士四方の風景は、  
頂上より望むも可なれども、中道巡りすれば、殊にパノラマ的風景の壯大なるを覺ゆべ  
し。(中道巡りには特に案内者を雇ふべし。其用意又登山のみの場合と異なる)

沼津近傍

沼津町 沼津は東駿の都會なり。此地永祿年中今川義元の城地にして、今川氏の滅  
ぶるや、武田氏の有に歸し、徳川氏の世となりては、松平康親、中村一氏、大久保忠佐  
等交々封を受け、安永年間水野忠友封せられ、子孫相次ぎて維新時代に至れる五万石  
の城市なるも、舊城址は毀ちて今は跡を存せず。方今人口二万餘。東京新橋停車場を去る  
と八十四哩餘、三等汽車賃一圓三十一錢、二等二圓三十錢なり。旅館には山本、勝海、  
杉本、桔梗屋、元問屋等あり。又此地より伊豆の下田、松浦、戸田に通ふ汽船、日に二回  
づつ出帆す。  
牛臥山 沼津停車場を出て、南行して狩野川に架せる渡橋を渡つて行と二十町餘、  
(人力車賃二十錢)牛臥山の麓には海水浴場あり。旅館三島館にては、賄附貸別荘の制  
によりて客を迎ふ。部屋代は一週間に八疊一圓五十錢以上三圓、六疊二圓二十錢以上  
二圓三十錢位にして、料理は一品十錢以上三十錢位迄とす。其海岸よりは左に伊豆の大

瀬崎、右に三保の松原を眺めて、宛然一幅の畫圖を見るの感あり。  
 我入道海水浴場 牛臥山の西、狩野川河口の地を我入道とす。沼津停車場に下車して行くべし。此地狩野川を隔て、近くは千本松原、田子の浦より遠くは三保の松原、久能山を眺み、稍北には富士を仰ぎ見、南方には海上三里を隔て、伊豆大瀬崎に對す。又海濱の不動岩、背後の山上に在る八幡神社境内の眺望佳絶なり。旅館には松風館あり。宿泊料は六十錢位なり。沼津停車場より此地迄の人力車賃二十錢とす。又沼津本町の裏より小船にて狩野川を下らば、夏時の遊覽最も妙なり。  
 静浦海水浴場 牛臥山の東南十町許なる静浦にも、海水浴場あり。旅館には保養館あり。宿泊料は普通八十錢とす。此地風景の明媚なる恐らくは沼津附近第一に位すべし。殊に南方には江の浦の入江を有し、朝夕富士に對する眺多し。沼津停車場より此地に至る人力車賃三十錢位にて、其途中なる桃郷には、東宮御用邸あり。又桃郷の桃林は、牛臥の三島館を去る東南五六町に在り。春季紅雲の美觀を呈する時には、林間に桃中軒なる小料理店開かる。尙ほ健脚家は、静浦より數丁南行して、獅子濱に至り、舟を雇うて江の浦を渡り、對岸の三津に上陸し、其より二里許の山間を跋渉して大仁に出

て、轉じて修善寺温泉場に行くも可なり。  
 三島町附近 東海道五十三驛中、北には箱根連山を控え、東は黄瀬川を隔て、沼津に對し、南は伊豆に至る街道の衝に當れるを三島町とす。官設東海道線は、町の北約十二町なる地に停車場を有し、豆相鐵道線は、町の南端に停車場を有す。前者を單に三島停車場と言ひ、後者を三島町停車場と稱す。鮎壺の瀧(一名富士見瀧)は三島停車場より西二町許に在り。高さ二丈餘にして瀧壺には鮎群游す。三島神社は大山祇命を祭れる官幣大社にて、三島町に在り。三島町停車場より行けば四五町、三島停車場よりは十二町餘とす。鎮座の年月不詳なり。大祭を八月十六日とす。  
 佐野附近 有名なる佐野温泉は佐野停車場より十二町に在り。園内には雲解の瀧、富士見瀧、月見瀧、鮎子の瀧、狭衣の瀧の五大瀑布ありて、黄瀬川の上流となる。園内また五龍館なる旅店兼料理屋ありて、和洋の料理を調ふ。宿泊料は五十錢以上一圓位とす。此園より六七町北方なる葛山には景ヶ島なる丘陵あり。眺望と躑躅とを以て名あり。富士登山の須山口は葛山村を過ぎて須山に至るなり。又停車場より西數丁には建武二年足利尊氏と戦ふて討死せる藤原爲冬の靈を祀れる佐野神社あり。

原町 沼津の西一里廿七丁を隔つる原町は、西に田子浦を望み、北半里には愛鷹山を負ふ。東海道中富士の眺望尤も秀麗なるは、原町附近より富士川に至る間とす。次に町内には白隠禪師が住せし鶴林山松蔭寺あり。禪師は明和年間示寂し、明治十七年正宗國師の號を賜はれる名僧なり。愛鷹山は麓より頂上迄二里半、絶頂には愛鷹明神の社あり。次に浮島沼(一名富士沼)は、原町の西約一里に在り。此沼に因みて、浮島が原と呼びし地を、略して原と稱したるが、今の原町なり。

興津附近

岩淵及蒲原 沼津を西に去て、鈴川驛を過ぎ、富士川の鐵橋を渡れば、岩淵驛に着す。是れ甲州より富士川の流れ來りて海に注ぐ所、停車場と川との間には、運河を掘りて、甲州より來れる貨物を運搬す。停車場前に、谷屋、萬屋の二旅店あり。富士川の河口西岸を吹上の濱といふ。三保の松原を望みて風景明媚なり。岩淵驛の次を蒲原とす。町内には牛若丸を慕うて此地迄來り、終に悶死せる淨瑠璃姫の墓と稱する古墳あり。此驛より興津に至る間に、薩睡峠の隧道あり。峠の上よりは富岳と三保の松原とを望むべく、

古來東海無比の勝地と稱せらる。山上に望嶽亭あり。蜀山人が「山の神去つた時の風景は三行半に書けど盡せじ」と狂歌を作りしは此處なり。峠の麓迄は興津より二十丁とす。興津海水浴場 興津停車場の西南七八丁なる清見寺門前の海岸清見湯は有名なる興津海水浴場なり。(此間の車賃十錢位)此地、前には三保の松原、西南には清水港、久能山、龍華寺の山を望み、東南には、駿河灣を隔て、豆相の青黛と相對し、東北には富岳、愛鷹の天に聳ゆるを見る。海岸亦浪平かにして、激浪の襲來あらざれば、老少婦女の游泳にも些も危険なし。旅店には東海ホテル、一碧樓、身延樓、佐野屋、千歳屋、龜島樓、十文字屋、山田屋、岡田屋等ありて、宿泊料は三十錢以上一圓迄あり。此他民家にて貸室する者多し、借料は一月大凡五圓位なり。此地新橋停車場を去る百八哩餘にして、六時間許にて達すべし。鯛を名物とし、停車場にては鯛飯を賣る。清見寺 興津北端の高丘に在り。巨龍山興國清見禪寺と號し、天武帝の朝白鳳二年の草創にて、中古廢頽し、今の堂宇は徳川家康の再建せるものなり。(是より先家康の甲州兵と薩睡峠にて戦ひし時、此寺を燒きて陣地とせる也)門前には鐵道線路通り、山門内には開山堂、佛殿、客殿等の外に、書院の庭園には飛泉九曲泉懸り、池畔には牛石、

龜石、虎石等の奇石あり。殊に其境内より清見瀉を眺めたる風景、繪も及はず。寺門は、往昔清見ヶ關の址なり。

三保の松原 眺望絶佳の地として、古來人口に膾炙せる三保の松原は、清水港の南方より、東北に向つて突出せる一里許の砂洲にて、翠松是を飾る。興津よりは舟行一里。一艘の船賃を六十錢とす。



\* 遊するを思はしむ。

清水港及海水浴場 清水

又清水港よりは陸路一里半、舟行二十丁なり。此處には三保神社あり。神社の東南六丁許には、謠曲にて名高き羽衣の松ありて、今尚ほ天女の優浴場にして、朝陽館なる旅店あり。宿泊料は八十錢以下五十錢位とす。此地江尻停車場を去る僅に十町にて、車賃十錢位なり。

龍華寺 清水海水浴場を去る西南一里十町なる村松村には、富士を望むに、最も好く適したる觀富山龍華寺あり。寺は法華宗に屬す。既に寺號の示すが如く、境内より富

士及び駿河灣を一眸に眺めたる景色、壯大亦豁如、如何なる畫伯も、筆を擲つて、自然の妙技に及ぶべからざるを嘆ずべし。備前の服部洪齋、曾つて日本三景を選んで、駿の龍華寺は實に天下第一の絶觀たり、之に次ぐを近江の觀音寺、肥前の寶永寺なりと言へり。聊か溢美の言に似たりと雖も、以て此地風光の佳絶なるを知るべし。尙ほ境内には大蘇鐵、鶴松、霸王樹等の名木あり。又故文學博士高山林次郎氏が遺骨は、遺言によりて、境内最も眺望に富みたる地に埋れり。此地より久能山迄二里餘とす。

靜岡附近

靜岡市 縣廳所在地にして、人口四萬二千餘を有す。此地昔は府中と稱せられ、今川氏代々の城地たりしか、今川義元滅びて後は、武田晴信の有に歸し、武田氏亡びて後、徳川氏之に居り、天正十八年徳川氏の關東に遷るや、中村氏居り、次いで内藤信成、徳川頼宣、徳川忠長相次ぎ、寛永九年忠長罪ありて國除せられて後は城代を置けり。かくて維新の始め、徳川家達此地に封ぜられ、是より靜岡と稱す。市内には縣廳以下諸官衙の外に、製糸會社、製紙會社、其他諸種の會社多く、新聞社には、靜岡民友新聞、曉

鐘新聞等あり。又安倍川町には菟橋軒を列ねて弦歌の聲を絶たず。旅館には大東館、品川屋(紺屋町)清鶴樓、機陽館(榮町)袋屋(吳服町三丁目)等の外に、美静館、静榮館、長生館、浮月樓、清水館、望岳樓、蓬萊亭、等あり。偕て市内の名所を舉れば、市の北隅なる賤機山は、停車場より十二町にして達すべし。其南麓に淺間神社あり。崇神帝の御宇の鎮座にして、木花咲耶姬命を祭る。社殿は三重閣にして、裝飾の壯麗を極め、世人稱して日光に次げる美觀とす。境内今は公園にて、春風駘蕩の頃には、櫻花爛熳として士女の群集す。亦美觀たり。臨濟寺は淺間神社の東北三四町の地に在り。天文年間今川義元の草創に係る。此隣地は今川氏の古城址なり。寶臺院は停車場の西三丁目許に在り。是れ徳川家康の妾、寶臺院を葬けし寺にて、維新後、江戸城内紅葉山に在りし徳川氏累代の位牌を此堂内に遷せり。又日清戦役に戦死或は病死せる静岡縣出身兵士の木像を置く。吐月峰は停車場の西約一里半に在り。連歌師宗長が草庵を結びしは此地なり。(静岡市地圖参照すべし)

森の下露「安嘉門院の」やよや待て今はかぎりの秋の色を紅葉に飾る木枯の社」とあるは此森の事なり。  
宇都谷峠 伊勢物語に宇津の山とあるは、今の宇都谷峠にして静岡市の西方約三里なる山なり。其舊道は古歌に萬の細道又は萬の下道と詠みし險路にて、鐵道線は同山脈の南を過ぎ、石部の隧道を通じて藤枝驛に走れり。  
久能山 別格官幣社東照宮の在る久能山は、有渡郡久能村大字根古屋に在り。静岡より行けば二里三十丁、清水又は江尻よりは何れも二里餘にして達す。車賃は何れより行くも略ぼ同一にて、往復六十錢、片道四十錢位なり。又馬車は往復三十錢、片道二十錢とす。東照宮の別名を久能神社と云ひ、元和三年の創建にて、社殿の壯麗なる、静岡市の淺間神社に次ぐ。山上より遠望すれば、南に渺茫たる太平洋を扣へ、東北には駿河灣を隔て、富岳を望み、清見瀉、清水港、三保の松原の優雅瀟灑たる風景は眼下に在り。旅店には石橋、豆腐屋、石垣屋等ありて、何れも宿泊料四十錢位とす。(口繪寫眞参照すべし)

焼津海水浴場

焼津停車場の東九丁許なる海濱に海水浴場旅館あり。秋月樓と云ひ、

宿泊料を四十錢以上八十錢位とす。海岸の眺望は、久能山に劣るとなし。料理店には鰻屋あり。此附近は、日本武尊が、東夷征伐の時、草薙の神劔もて逆賊の放ちし火を利用し、却つて彼等を焼き滅し給ひし跡なるが故に焼津と稱す。焼津神社は、即ち尊の記念なり。

**藤枝町** 藤枝は志太郡役所所在地にて、郡内第一の都會たり。停車場より驛の中央迄は二十丁餘あり。蓮生寺は熊谷直實の剃髮せる寺にて、停車場より二十五丁にして達すべし。此地旅店には、越前屋、柿屋、魚安、魚屋等あり。

**志太温泉** 停車場より藤枝町に至る途中、十数丁にして、左側に潮生館と録したる所より左折すれば、二十町許なる青島村大字志太に在り。風光明媚の地なり。鑛泉は、腺病、皮膚病、子宮病、僂麻質私等に特效あり。旅店の潮生館は、本店支店の二に派れ、別に藤枝停車場に出張店を置きて客を案内す。宿泊料は普通五六十錢位にて、館内には天然瓦斯を引きて點火し、且つ茶店、楊弓店等の設をなせり。又此附近には神代塚、人穴、烏帽子岩等の奇觀あり。

**大井川** 駿遠の國境をなす大河を大井川とす。源を甲信の界なる白峯に發し、諸川

### 第五回博覽會有功賞牌拜受

◎サン、カメラ(卸小賣)

黒革張取匣六枚付、附屬品一式使用説明書添付ス

一組代價貳圓五拾錢送料弊店負擔

本器發賣ノ目的ハ斯術ノ倍々發達センヲ企圖シ原價同

様極メテ低價ニ販賣ス此際至急續々御注文ヲ乞フ

各國新式寫眞器械新荷着

御來店御購求ノ方ハ本器ニテ實驗ニ供シ新々ニ營業者

ハハ開業ニ毫モ差支ナキ様無料教授ス郵券四錢投シ給ヘ

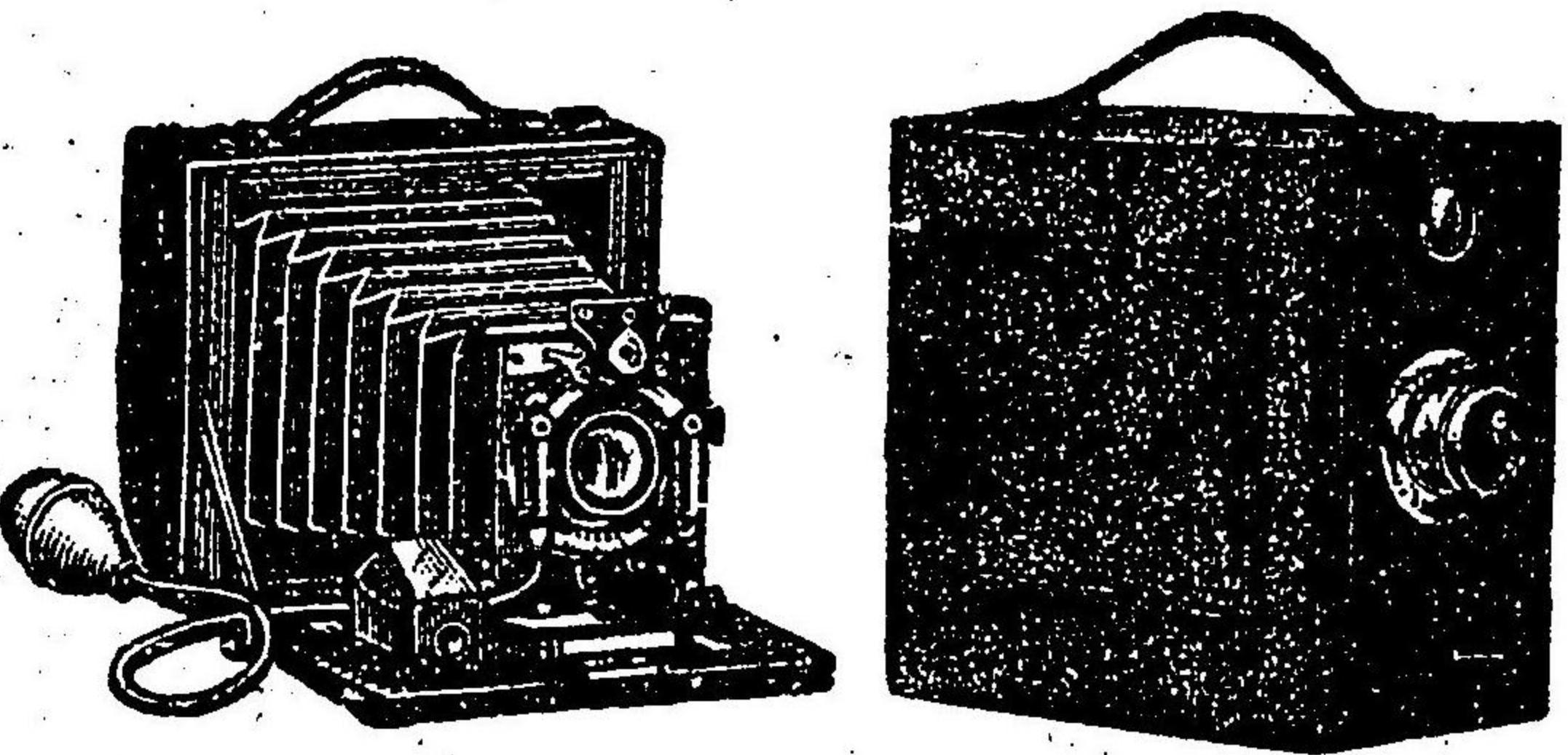
目錄進呈ス

◎今般全國各地ニ店員ヲ派シ撮影法等萬事懇切ニ御教授可致候間賣捌御希望ノ方又ハ新ニ營業ヲ爲サントスルノ諸彦ハ此際至急御申込有之度候

東京神田通新石町(大通)

進 々 堂

電話長距離本局(一一三)



寫眞器、諸材料  
直輸入商

天下之名

故大橋乙羽君著

● 千山萬水

全壹冊洋裝色刷寫真版入  
正價金五十錢郵税金十錢

本書は辱くも九重の御覽を賜ふのを榮を得發售以來既に十五版を累刊するに至るの盛運に會す總紙數六百五十餘頁各地の名山大川古蹟勝景等優美なる寫真版を挿入して一々懇切に評述したれば實に一面完全なる旅行案内なると同時に婉麗なる大文章なり

故大橋乙羽君著

● 續千山萬水

全一冊洋裝色刷寫真版入  
正價金五十錢郵税金十錢

東洋古來第一の美本として、内外の喝采を博したる千山萬水は、其の記する所の地東北に止りしを、烟霞の癖は更に著者をして、東海畿内中國西南より北陸諸州を跋涉せしめぬ。是於にてか續編あり、之を初編に比するに、經る所廣きに從ふて寫真に上れる絶景亦頗る多し。裝幀の美麗亦前編に優るとも劣ることなし。

田山花袋君著

● 南船北馬

全一冊洋裝上製袖珍美本  
正價金四十錢郵税金六錢

隨處に感興を作り到る處に詩想を着するは花袋子の紀行文なり、ことに氏は諸勝の見に富みて殘山剩水處として至らざるなく、處として探らざるなければ、その紀文には珍談奇話百出して或は溪村の夕或は深山の夜、或は怒濤岸を嘯むの邊、或は山中の湖畔など、他の紀文には見るべからざるの妙趣味あり

田山花袋君著

● 續南船北馬

全一冊洋裝上製袖珍美本  
正價金廿五錢郵税金六錢

● 雪の函館 ● 淺間横斷記 ● 草津嶺を跨るの記 ● 狐島 ● 南洋の遺跡 ● 並木つたひ ● 陸羽の一厘 ● 瀬戸内海 ● 播磨名所 ● 鎮西の諸勝 ● 一步一景 ● 箱根攝影記 ● 雪中の木會 ● 華嚴と霧降と裏見 ● 戰場ヶ原 ● 栗山郷 ● 老僧 ● 三保の松 ● 冬の日光 ● 多摩の水源 ● 富士川を下るの記

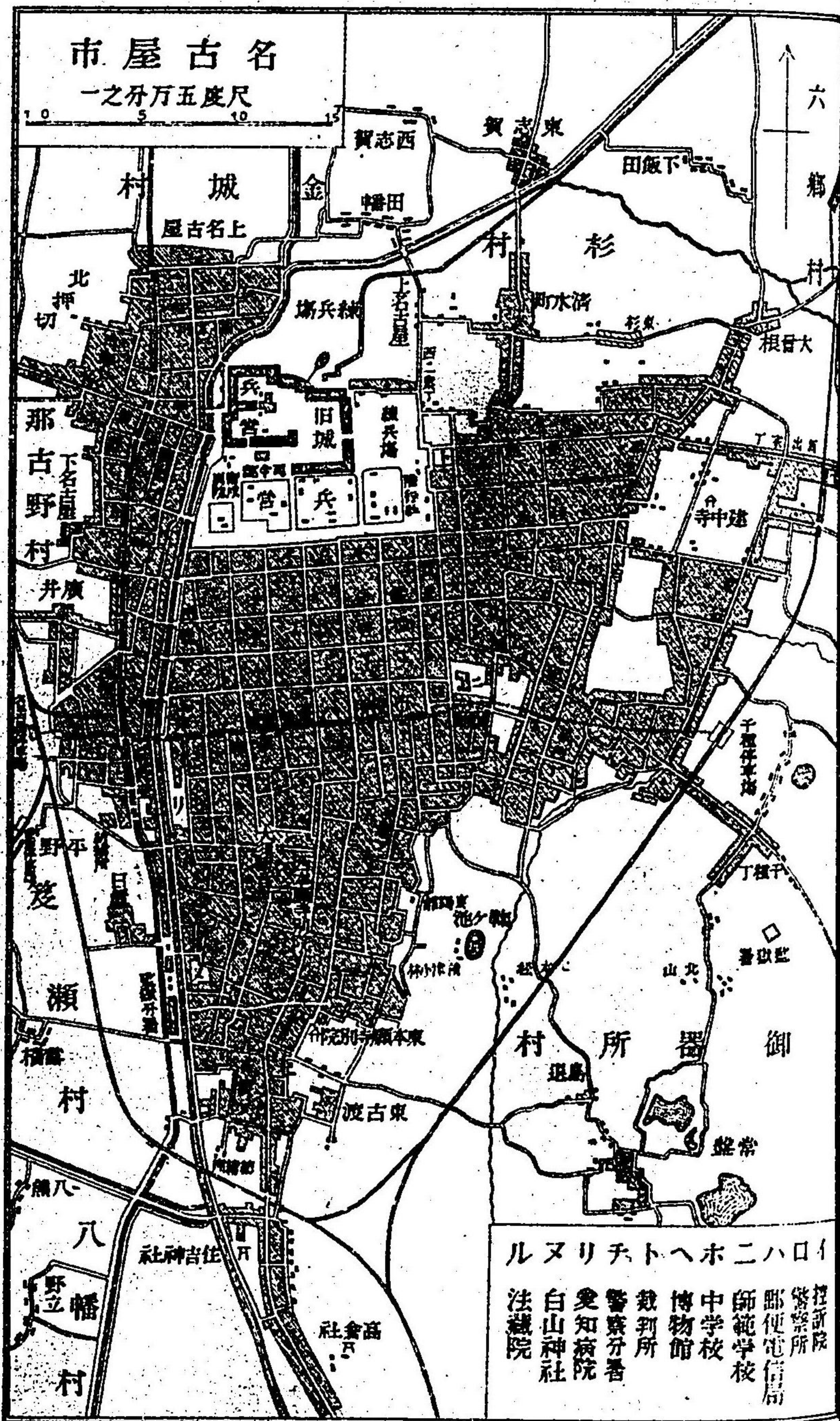
勝斯書中

館文博

目丁三町本

區橋本日京東

元兌發



國民新聞は大日本帝國の代表的新聞也、大日本國民の相  
談相手也。有力にして、上品にして興味ある、全國隨一の新聞  
也。廣く云へば、世界一覽也、狭く云へば日本一覽也。

每號  
八頁

# 國民新聞

一ヶ月  
卅五錢  
郵稅  
十三錢

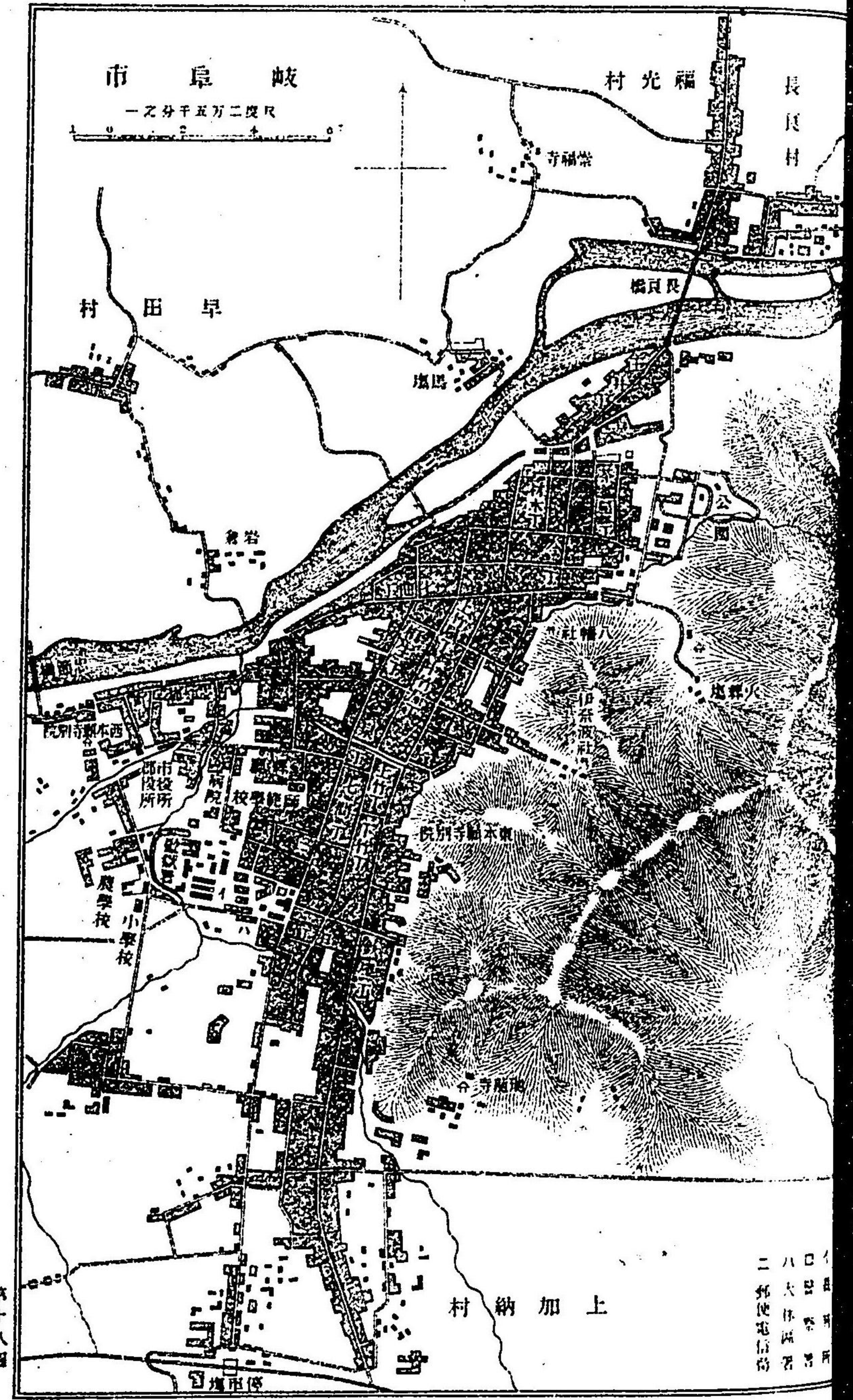
手短かいへは萬民必携の日用便覽也。一度之を手にしたる人は  
再ひ之を手離す能はざる程也。論より證據現物に就て實驗あれ。

發行所

東京橋區日吉町四番地  
電話 特新橋二八五〇(編輯用)  
特新橋二八五〇(事務用)

國民新聞社





第十八圖

人口 八千餘  
 郵政 電信 局  
 二 郵便 電信 局

●都新聞は他に真似のなき「都式」といふ本社發明の新活字にて印刷すれば外の新聞よりも二倍の読み出あり毎號面白き小説、探偵實話、及び新講談を載せ挿畫は浮世繪大家の筆になりて且つ毎月一回「都の華」といふ流行風俗専門の美麗なる冊子を添ゆ紙質鮮明、記事豊富眞に日本一の名に背かず

# 都新聞

定一ヶ月金三十五錢、三ヶ月金一圓、六ヶ月分廣告料定一五號活字廿一字詰一行一價一圓九十五錢市外は郵税一ヶ月金十三錢 價一回卅錢前金にて割引なし

發行所 東京市麴町區内幸町一丁目五番地 都新聞社  
編輯用(電話新橋三千八百八番) 庶務用(電話特新橋百七十五番)

讀 再 讀 一

大橋乙羽君著 (帝國文庫第二十四編)

紀行文集

全壹册洋裝上製金文字入  
正價六十錢 郵税十六錢

次目書本

- 諸日西東
- 國本行遊遊
- 里行脚文
- 遊遊人談集
- 紫遊遊
- 紀後後
- 細紀後
- 道行編編
- 奥筑西東
- 國本行遊遊
- 里行脚文
- 遊遊人談集
- 紫遊遊
- 紀後後
- 細紀後
- 道行編編

岸上質軒君校訂 (續帝國文庫第二十四編)

續紀行文集

全壹册洋裝上製金文字入  
正價六十錢 郵税十六錢

本書收むる所の紀行文長短四十七編年代を以て之を次序す變遷沿革の跡を考ふるに便せんが爲なり貫之朝臣の土佐日記は紀行文の祖と稱せらるゝも單行の文も少からずまた文詞古晦にして解し難きふしもあるれば之を省き嚴島御幸記を以て卷首に掲げ以

興 趣 津 々

續々紀行文集

全壹册洋裝上製金文字入  
正價六十錢 郵税十六錢

遠くは鎌倉時代より、近くは徳川時代の末に至るまで、學者の紀行文中、最も趣味あるもの數十篇を集む。艱難を極めたる旅行記あり、壯快なる冒険談あり、風流なる遊記なり、一篇自ら一篇の妙味を具へ、而も通觀すれば時世に作ひ、風俗志尙の轉變を見るべし、娛神臥遊の絶好伴侶なり

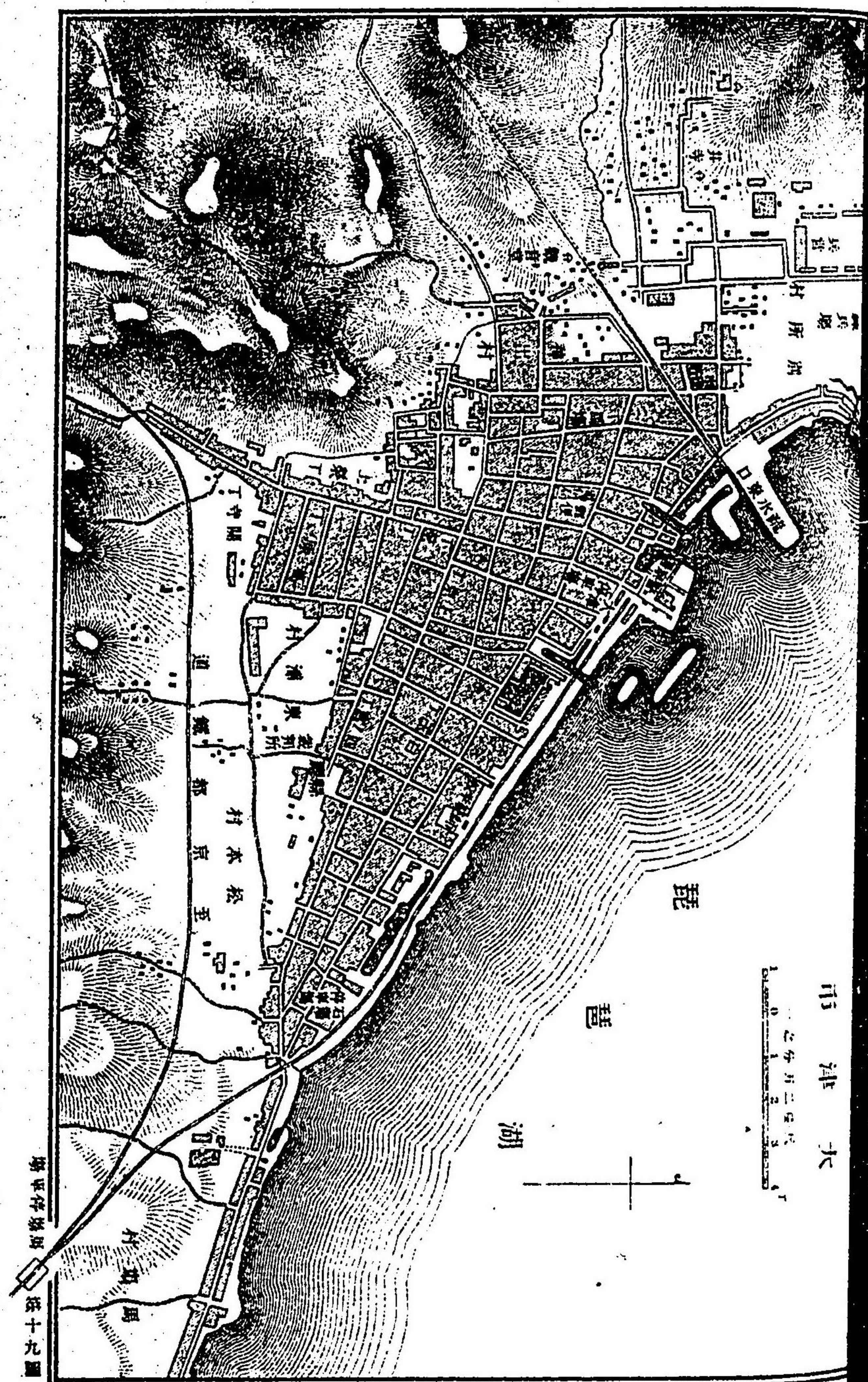
俳諧紀行全集

全壹册洋裝刺刊形頗美本  
賣價金二十錢 郵税八錢

- 俳諧紀行全集提要
- 日本紀行脚文集
- 野晒紀行翠園抄
- 奥細道管菰抄
- 椎奥の道拾遺
- 陸奥の道拾遺
- 摩訶庵日記
- 大遊三千風
- 松尾芭蕉
- 松尾芭蕉
- 椎木才磨
- 天野桃隣
- 吉井雲冷

館 文 博 目 丁 三 町 本 區

橋 本 日 市 京 東 元 兌 發



消 毒 防 臭

ク レ シ ャ ン

定 價 壹 磅 金 拾 八 錢

本品は東京帝國醫科大學衛生學教室及東京傳染病研究所の試験成績により消毒殺菌の力石炭酸よりも強しと遙に石炭酸認められ且防臭の効ある空前の發明品にして價は石炭酸に比し非常の低廉なり此廉價優勢なる内國品を以て石炭酸等の高價なる輸入品に代へ益々廣く防疫衛生の實効を奏し得んには個人及國家の大幸福なるべし

便所  
下水芥  
溜及床下  
など平素不潔になり易き場所へ五十倍の水に溶解し隔日一回位撒布せば消毒防臭の効あり且流行病の豫防となり亦蚊蚤其他悪虫の發生を絶ち猶日常痰壺灰吹等に少量づゝ置き置かば衛生上最も有益なり

中島梅子

東京神田錦町 東瓦斯株式會社

大 販 賣 店	日 本 橋 本 日 本 橋 本 日 本 橋 本	本 橋 本 日 本 橋 本 日 本 橋 本	石 本 橋 本 日 本 橋 本	町 本 橋 本 日 本 橋 本	三 町 本 橋 本 日 本 橋 本	丁 目 本 橋 本 日 本 橋 本	目 目 目 目	中 守 田 博	村 田 邊	瀧 重 元 愛	治 治 郎 堂	郎 治 郎 堂	西 關 阪	一 手 道 邊	販 賣 店
------------------	--	---	--------------------------------------	--------------------------------------	---	---	------------------	------------------	-------------	------------------	------------------	------------------	-------------	------------------	-------------



りて、其側には名物餅の餅を賣る家あり。又此左方の小丘には久延寺の子育観音あり。夜啼石の昔物語は、世人の熟知する所なるか故に今数せず。金谷停車場より此地に至る凡そ一里とす。又此地より堀の内停車場迄を一里半とす。堀の内は、停車場設置以來稍繁昌せる一驛にして、此處より掛川に至る間には満水隧道あり。

掛川町 掛川町は遠州の東南部に位し、城東郡の所在地たり。此地古より商業繁榮にして、町の北端には今川氏眞の居りし城址あり。旅館には藤屋、常盤屋、松本屋、松田屋等あり。此地より秋葉山麓までは十里とす。

可睡齋 此れ應永十四年の草創、僧恕忠の開基たり。明治六年、神佛混合を廢せし時、秋葉山三尺坊を此寺に移してより以來、參詣者常に絶ゆるとなし。袋井停車場を去る北三十町許に在り。

秋葉山 秋葉神社は軻遇突智神を祭りし神社にして、秋葉山に鎮座す、社は養老二年僧行基の開基にして、明治六年迄は神佛混合なりしが、同年三尺坊を可睡齋に移してより、秋葉神社と稱せり。老杉蒼鬱として壯麗なる社殿を圍み、境内に入れば忽ち神威の嚴やかなるを覺ゆ。同山に登らむには、袋井驛にて下車し、可睡齋に詣て、行くを便とす。

す。該停車場前には、江戸七、高砂軒等の茶店あり。是より北方に向ひ、袋井驛を過ぎ、三里にして森町に達す。其間乗合馬車、人力車等の便あり。掛川驛よりすれば、東海道を西行する數町の後、北折すれば秋葉道にて、森町まで三里とす。偕て森町より三倉まで二里の間は人力車を通ずれども、二人曳ならては不便多し。三倉より犬居を過ぎて坂下に至る間は三里半餘ありて、殆ど人力車を通せず。坂下は秋葉山麓にて旅宿十數軒あり。是より絶頂迄登り道五十町にして、頂上より、天龍川、濱名湖、遠州灘を眺望せる景、洵に壯大なり。歸路は坂下より氣田に出て氣田川を小舟にて下り、天龍川に出て、更に下つて池田に上陸すれば、三十餘町にして中泉停車場に到るべし。又坂下より直に西行して戸倉に至り、天龍川を下るも可なり。

光明寺 中泉停車場を去る八里なる光明村には、有名なる光明寺あり。天正年間徳川家康が機先を制して、武田の大軍を敗りし時、此寺院に陣地を敷けり。世に赤豆坂の合戦といふは此戦なり。其時寺僧、搦粟を饗するや、家康悦んで、光明搦粟は功名勝線なりと言へりとぞ。境内には身代り梵鐘、稚子の瀧、鹿の通路などいふ古物名所等あり。伊祖芭蕉此寺に詣て、句あり。『汗の香や衣をふるふ行者堂』

袋井驛を發して濱松に向ひ、中泉驛、天龍川驛を過ぐれば、天龍川の大鐵橋を渡る。東海道鐵道三百七十余哩の間、長江大河に架せし鐵橋多しと雖も、天龍川鐵橋の如くなるは莫し。此鐵橋は長さ約四千呎、二百呎の橋桁十九箇より成る。天龍川は、源を信州諏訪湖に發し、南流して遠江の西北隅より中央を貫き、氣田川、阿多古川を合せて海に注ぐ、流程六十餘里、舟楫を通ずる所二十五里餘なり。

濱松町 濱松町は舊井上氏六万石の城下にて、維新後一たび濱松縣廳を置かれし地なり。此地東海道、三河、駿河、信濃、新所、渡船等の諸街道の衝に當り、古より町内繁榮なり。今は人口二万餘を有す。濱松城址は、町の北端に在りて、城内に東照宮あり。社殿甚だ壯麗なり。又停車場より五丁許には、濱名郡内五大利の一たる龍禪寺、福江寺あり。次に此地より秋葉山への賽路ありて、町の端れに一の華表を設く（三方原、二股村を過ぎて行くにて、里數十一里許あり、二股村迄は人力車を通ず）旅館には大米屋、表屋、新川屋、高木屋、油屋、平野屋、美濃屋、淺田屋等あり。

三方ヶ原 濱松町の北一里許の原にて、敷智、引佐の二郡に跨るものを三方ヶ原と云ふ。元龜三年武田軍の爲に、徳川勢の敗られたるは此原なりと。又萬葉集に「引馬野

に匂ふ榛原入り亂れ衣にほはせ旅のしるしに」とあるは、此原の事なりと加茂眞淵翁は考證せり。

氣賀 氣賀は避暑地として名あり。濱名湖の東北岸に位して風光明媚なり。濱松より此地に至らむには、同地より御油に至る姫街道を行けば西北四里にして達す。此間乗合馬車の便あり。旅館には吉野館外數戸ありて、宿泊料は何れも六十錢位とす。又氣賀よりは舟を雇うて、濱名湖を渡り、鷺津、舞坂に行けば興味多し。舟賃は何れも八十錢位とす。

井伊谷神社 氣賀の東北凡一里なる井伊谷村には、後醍醐天皇の皇子宗良親王を祭れる官幣中社井伊谷神社あり。社殿は明治四年の建築とす。此處は宗良親王の薨じ給ひし地にて社殿の後方に御陵あり。

奥山半僧坊 井伊谷村の西一里なる奥山村には方廣寺あり。聖鑑國師（後醍醐天皇の皇子滿良親王也）の開基せる所にして、堂宇壯麗なり。寺を半僧坊と稱するは、國師入山の時、得度を受けし天狗半僧坊を祭るか故なり。

舞坂海水浴場 浴場は濱名湖口の東岸辨天島と稱する地に在りて、南は太平洋に面し、

北は湖水を隔て、青山を望み、朝暮の風景甚だ佳なり。此地舞坂停車場を去る西十町餘にて、人力車賃十錢位とす。旅館には濱名館、茗荷屋、鯛山樓、松月、中村屋、伊勢屋等ありて、何れも普通宿泊料を七十錢位とす。銷暇の娛樂としては、網舟（一艘一圓六七十錢）釣舟（全一圓三四十錢）等の遊びあり。又氣賀附近に舟行して沿岸の勝地名境を探るも可なり。



濱名湖十二勝 濱名湖は東西二里餘、南北三里の大湖にして、湖岸の風景に富み、琵琶湖と並び稱せらる。往時は其南方は湖の東北なる細江の入口なる山上に在りて、湖上を眺むるに最も適當の勝地たり。寺の後方に在る山を稱して赤巖と言ふ。猪鼻湖は湖水の北方、別に一湖をなし、小河を以て濱名湖に通す。飛磯の辨天は猪鼻湖の東南岸に在り。又新居の勝地は舞坂より鷺津に

に一河ありて、海と相通せしが、明應八年海嘯の爲に湖岸崩決して裏海となれり。故に其湖口を今切と呼ぶ。湖中には十二勝あり。辨天洲、村櫛、和田、館山寺、赤巖、飛磯、辨天洲、猪鼻湖、本興寺、濱名館、大崎、北辨天洲、新居これなり。此内館山寺

至る途中に在り。此等十二勝を探らむには、舟を雇ふを宜しとす。一艘の舟賃は一圓五六十錢位なり。

鷺津海水浴場 鷺津停車場を去る五丁許の濱名湖岸亦有名なる海水浴場にして、旅館濱名館は十二勝の一たり。同店の宿泊料は普通七十錢位とす。湖岸の風景は舞坂に優るとも劣るとなく、湖上の舟遊亦趣味多し。次に十二勝の一たる本興寺は該停車場の西九丁許に在り。沙見坂は東海道中の名所にて、鷺津を去る一里半（新居の勝地を経て行く）に在り。坂の中央には名高き沙見觀音ありしかど、堂宇何時しか廢頽し、今は目標の松の下に礎のみを存し、本尊は坂下の一寺院に遷されたり。

遠州七不思議 遠州には古より七不思議と稱せらるゝものあり。濱名の葦竹、片葉の葦は有名なる葦にて、女々浦、マイマイ浦、波の音、以上五不思議は皆な鷺津附近に在り。他の二不思議を小夜中山夜啼石、及び櫻の池とす。櫻の池は中泉及び袋井停車場の間に在り。身の吉凶禍福を占ふとき、赤飯を櫃に入れて池中に浮べ、若し沈めば福あり、浮流すれば災禍ありと稱す。



豊橋近傍

豊橋町 濱名湖の長橋を渡り、鷺津驛を過ぎ、三河國渥美郡に入り、二川驛を過ぎて達するは豊橋にて、舊時は吉田と稱し、松平伊豆守七万石の城下、維新後、豊橋町と改稱せられ、一たび額田縣廳を置かれしが、今は愛知縣に屬す。區域は東西十八町、南北八町、人口二万二千餘を有す。町の東北に舊城址ありて、今は第三師團歩兵第十八聯隊の營所に充てらる。吉田神社は兵營の表門と相對す。祭神は素盞雄尊にて、鎌倉幕府時代の鎮座なるべしと云ふ。旅店には停車場前に壺屋支店、岡田屋、相模屋等あり。札木町には小島屋、榊屋、船町に壺屋本店あり。何れも宿泊料を七十錢以上一圓位の定とす。豊橋町にて豊川鐵道分岐す。吉田、小坂井、中久保、豊川、一の宮、長山、東上、新城、川路を経て長篠に至る。其間の里程十七哩三十鎖とす。又豊川河口(停車場を去る西一里の地)には、宮口、篠島、神社、鳥羽へ通ふ汽船發着所あり。鳥羽迄の船賃を六十二錢とす。豊川は源を設樂郡神山に發し、西南に流れて有海村を過ぎ、寒狭川を合せ、豊橋の北部を通じて海に入る。豊橋には百二十間餘の板橋あり。これ有名なる豊橋なり。

なり。

窟觀音

鷺津豊橋間の二川停車場より西十五丁にあり。龜見山窟堂の觀音と稱す。堂は百尺の巖頭に在りて、眺望に富む。但し其下には鐵道あるが故に、北側の車窓より仰ぎ見るを得べし。行基菩薩の開基といふ。

伊良子崎

三河國の南方に突出する小半島を伊良子半島とす。其の盡頭に伊良子なる勝地あり。此地、戸數百戸にも満たざる漁村なれど、風光の明媚なる三保の松原にも劣らざるなり。殊に岬の盡頭なる小山の巔に登れば、西南に答志、神の二島を隔て、志摩の鳥羽燈臺を望み、其上には伊勢の朝熊山聳えて、臥牛の如し。北方には伊勢海を隔て、勢州の連山を遠望し、其前面に知多半島の海中に突出するを眺め、波心には篠島、日間賀島、佐久の島の點々基布するあり。小山を下りて海濱に出づれば、此處は戀路か浦の名ある所、其東南には牛ヶ首なる巨巖あり。其ほとりに二大石門ありて、波濤其間に怒號し、壯觀を極む。此地に至らむには、豊橋驛にて下車し、停車場前より、牟呂まで人力車を雇ひ(一里餘にて車賃十錢位)同所より汽船に乗れば、海路十里にして島村に着す(船賃三十錢)島村より伊良子迄の里數二里十町なれば、健脚家は徒歩するも

可なり。人力車ならば四十銭位にて行くべし。全地には別に旅宿あらざれども、同地の小久保惣三郎といふ人あり。訪へば、種々周旋し呉るべし。(口繪寫眞参照すべし)

前芝海水浴場 豊橋の西二里なる豊川々口北岸の前芝には、海水浴場あり(停車場よりの車賃四十銭)。旅館には豊海亭あり。宿泊料は六七十銭位とす。海岸よりは竹島、大島、小島、姫島、佐久島、日間賀島等を眺むべく、朝夕の景色甚だ佳なり。關西より來る人は、御油停車場より行くも可なり。

豊川稻荷 豊橋町の豊川鐵道吉田停車場を發し、豊川停車場にて下車すれば、三町餘にして有名なる豊川稻荷に達すべし。寺を妙嚴寺と云ひ、嘉吉元年僧義易の開基する所なり。殿宇の美麗なる、庭園の幽邃閑雅なる、本尊の吒呌尼天と共に名高し。此附近には豊川停車場前に三明寺辨財天の五重塔あり。豊川の手前なる牛久保停車場附近の田圃には、山本勘助出生地(其跡は定かならず)及び長谷寺等あり。

砥鹿神社 豊川驛の次なる一の宮にて下車すれば五丁にして、大己貴命を祀れる砥鹿神社あり。本宮山は、神社の奥院ある山にて、海拔二千五百餘尺、一宮の南方上表山より上ると一里半にして山嶺に達す。俗に峯の社と稱するは山上の本宮を言へるなり。

牛の瀧 東上驛より凡八町の坦途を行けば、直に牛の瀧の傍に至る。高さ六十餘尺。溪澗藍を瀧え、兩岸には奇石怪巖相列びて老松繁茂す。

新城町 これ南設樂郡役所々在地なる一市街なり。停車場の東南六七町なる豊川上流の沿岸には、櫻淵と稱する櫻花の名所あり。春季に至れば、碧流と櫻花と相對して美觀を呈す。其對岸には蜂の巢岩と稱する奇石あり。無數の小孔あるか故に此名あり。鳴澤瀧亦近し。次て川路停車場を下れば十町餘にして、長篠の役に、織田信長の本陣ありし茶臼山あり。

長篠古戰場 長篠驛は、現時豊川鐵道の終點にして、停車場より十町許なる岩城附近は、天正年間、織田徳川の聯合軍が、武田勢と激戦せし跡にして、荒涼なる原の中には鳥居強右衛門、馬場美濃守などの墳墓あり。

風來寺 秋葉山と並び稱せらるゝ風來寺は、長篠停車場を去る一里二十丁、南設樂郡の東北なる風來山腹に在り。該停車場よりは山麓門谷に至る間に人力車を通ず。寺は推古帝の朝の草創にして、僧利修を開山とす。昔は七堂伽藍の美を極めしかど、文久以後五回の火災のため、今は僅に二天門と東照宮とを存するのみ。停車場より門谷に至る途

は、寒狭川に沿って、一の瀧、二の瀧、三の瀧等の勝あり。又山上には、白岩権現、煙巖山、傘杉、六本杉、瑠璃山等の奇勝あり。門谷村には柏屋、新江戸屋、布袋屋等の旅館あり。

鳳來寺よりは秋葉山に廻る道あり。東行八里餘にして、大野、細川、巢山、神澤、熊村、石打を過ぎ、天龍川を渡つて、戸倉より秋葉山に登るものとす。此間元より人車を通ぜざれど、山湖の風光甚だ奇なり。殊に巢山の西南十六七町には阿寺の七瀧といふ奇勝あり。往昔、鳳來寺の盛大なりし頃は、秋葉、鳳來めぐりとて、此道を通行する者多かりしが、秋葉三尺坊の可睡齋に移され、鳳來寺の衰頹してより後は、道路亦荒廢に歸して寂寥たり。

蒲郡海水浴場 渥美灣に望める蒲郡海水浴場は、蒲郡停車場を去る南七八町に在りて、旅館には、健碧館、海月樓、海老屋、角市等あり。宿泊料は何れも普通六十錢位とす。海岸よりは、近く竹島、大島、小島等を眺む。又舟を雇うて此等を一周すれば興多し。此附近にては、蒲郡停車場の西南二里には、三州第一の名勝たる三根山觀音寺あり。風光明媚の地たり。其西一里余の海岸には宮崎村の宮崎神社あり。これ亦風色の美を以

て優り、其海岸は海水浴に適す。蒲郡は東京新橋を去る百九十九哩餘、三等汽車賃二圓六十二錢、神戸を去る百七十六哩餘、三等汽車賃二圓六十七錢なり。此所より伊勢の二見港まで日々に汽船の往復するあり。

岡 崎 附 近

岡崎町 徳川氏勃興の地にして、關ヶ原役後、維新前に至る迄は、本多氏五万石の城下なり。今は人口二万餘を有し、額田郡役所、警察署等の外に、銀行、會社、病院、三河新聞社等あり。旅館には、停車場前の鍵屋、桔梗屋の兩支店、傳馬町の各本店の外に、山田屋、丸藤等あり。舊城址は矢矧川に臨み、今は公園にして、園内には東照宮を祭る。其傍なる生湯の井は、家康誕生の際、生湯の水を汲みし跡なりとか。矢矧川は一に矢作川に作る。源を美濃國惠那郡阿賀瀧山に發し、三州に流れ來つて、足助川を合し、岡崎町の西を過ぎ、碧海郡河野、川島の東部を流れて前濱新田にて海に注ぐ。岡崎城址外の長橋は、名高き矢矧橋にして、豊太閤の少時日吉丸と呼びしとき、始めて蜂須賀小六と邂逅したる所なり。其西畔矢作村の田中に、竹林あるは、古へ矢矧の長者が住ひし跡な

りと。又三河三ヶ寺の一たる勝蓮寺は、停車場より僅に五丁なり。  
 大樹寺 家康が、今川義元に破られて、暫時隠れ居たる大樹寺は、岡崎町の北三十丁なる鴨田村に在り。浄土宗に屬し、文明七年勢譽上人の開基に係る。  
 知立神社 刈谷停車場の北一里には、東海道五十三驛の一たる知立あり。其地には縣社知立神社あり。祭神を鵜茅葺不合尊とし、碧海郡八座の一とす。  
 八橋の古跡 知立驛の東十町許なる街道の北側、八ッ橋と記せる標木より北に曲かり、行くと八町許にして八橋村あり。小流の傍に小丘あり。これ八ッ橋の古跡にして、在原業平が「唐衣さつなれにしつましあればはるく來ぬる旅をしぞ思ふ」と詠ぜしより、世に名高き名所なり。寺あり、八橋山無量寺と呼び、本堂には業平の木像ありて、堂後には燕子花を植ゑ、昔日の像を傳ふ。  
 桶狭間古戰場 知立より國道を北行すること二里、又大府停車場より行けば北一里には今川義元の墓あり。此附近は有名なる桶狭間の戦ありし地にて、風聲悲しく、鳥聲哀を訴ふ。此東一里には今川氏に縁故ある總源寺あり。又桶狭間古戰場へは、大高停車場より行けば、有松驛を過ぎて一里半餘にて達す。

知 多 半 島

尾張の南方、伊勢の海に突出する半島を知多とす。此地伊良子半島と相對して渥美灣を作り、海岸到る所風色に富む。官設鐵道武豊線は、東海道線大府驛より岐れて、渥美灣沿岸を走り、緒川、龜崎、半田を経て、武豊に至る十二哩あり。又汽船の便は、師崎より鳥羽、蒲郡に至る航路、全しく福江、篠嶋、内海、野間、常滑、大野、熱田に至る航路、大野よりは熱田、四日市、津、二見、鳥羽に至る航路あり。又半田港は横濱神戸間を往復する汽船の寄る地たり。  
 龜崎 古來著名の港なりしが、今は其南一里なる半田に勢力を奪はれて、只釀酒地として名あるのみ。全地の旅店には望州樓、加島屋、森口屋等あり。又驛内の高根山は躑躅の名所たり。  
 半田 衣ヶ浦に面せる良港にして、實に知多半島の繁榮を築めたる地たり。停車場を去る十町許なる雁宿山は、明治廿三年海陸軍大演習の行はれし時、大元帥陛下の御駐蹕あらせられし勝地たり。半田の南半里許なる成岩町には、文明年間空觀榮譽上人の

開基せる天龍山常樂寺あり。寺寶多し。

武豊町 武豊町は、武豊線の終點にして、半島の東岸知多灣に臨み、港内水深く、浪平かなれば、船舶常に輻輳す。停車場は海濱に近く、百間餘の棧橋を架して貨物を運搬す。背後の丘岡を鳳翔山と云ひ、明治廿三年、大元帥陛下の陸海軍大演習を天覽あらせられし所にして、鳳翔閣は當時の行在所とす。阜上風色に富み、空氣清涼なれば、夏季來遊する者甚だ多し。

師崎海水浴場 武豊を去る南方四里半なる師崎海岸には海水浴場あり。旅館を養春館といふ。師崎は知多郡第一の良港にして、船舶常に輻輳す。其海上一里には篠島あり。島民皆漁業に従ふ。師崎より此地に至るには、河和村まで人力車を走らせ、それより舟を仕立れば海岸の風光を眺めつゝ行くを得へし。賃金は舟車を合して六十錢位を越えず。

豊濱海水浴場 師崎を去る西一里、伊勢の海に臨める豊濱村にも亦海水浴場あり。武豊を去る五里にて、人力車賃五十錢位なり。又熱田よりは日々便船あり。旅館には大西屋、梅屋の二軒あり。土地偏鄙なれど、風景甚だ快裕なり。

野間の大師堂寺 武豊町を去る西南四里、大野海水浴場を去る南三里許なる野間には、承暦年間白河法皇の勅願によりて建立せられたる大師堂寺あり。此所は源義朝が、其臣長田忠致の爲に弑せられたる古跡として最も名高し。其の殺されし浴室の古跡は、寺の東方字田上に在りて、俗に御湯殿と稱し、今は法山寺なる禪刹あり。又大師堂前の小池は、義朝の首を洗ひし池にて、其怨念今尙留りて、國家に凶事あれば必ず涸濁するが故に、俗に血の池と稱すとぞ。義朝の墓は本堂の東に在り。頼朝の天下を一統するや、義朝の菩提を弔らふために、長田忠致を捕へ、義朝の墓前にて斬り、其屍を東南方の山に葬れり。今の長田山是なり。伽藍は頼朝の造營に係る。義朝の墓の北方には、鎌田政家の墓、同じく東方には池禪尼の墓あり。共に頼朝の建立たり。又此附近には平判官康頼と織田信孝との墓あり。但し康頼の墓は、假塚たるのみ。信孝は秀吉の爲に破られて、此寺にて自殺せるなり。今も寺寶中に信孝辭世の歌及び血染の掛物あり。辭世は母衣を襲きて書したるにて、「むかしより主をうつみの野間なればむくひをさてや羽柴ちくせん」とあり。血染の掛物は、當時床に懸り居りし物にて、信孝が腸を擲らし血痕を存す。

大野海水浴場 大野は知多半島の西岸に在りて、今を去ると五百五十餘年前、即ち光嚴天皇の御宇、此地の海水に浴して、病を治せる者ありしと云へるより以來、海水浴場として知られ、降つて明治十四年、同地の海音寺の住職か、土地の有志者と謀りて浴場を設け、且つ醫士をして海水を分析せしめしに、水質は氣管支病、神經病、皮膚病、胃弱等には特効ありと定められたるより、其名俄かに顯れ、相州大磯と匹敵する浴場となれり。海岸の風景は、伊勢の海を隔て、四日市と相對し、風光明媚遙に大磯に優れり。旅店には海濱館、恩波樓、和泉屋、信濃屋、石州屋、疊屋、加見屋、越後屋等ありて、何れも宿泊料六七十錢を普通とす。此地に至る順路を示せば、武豊線半田驛にて下車し、西方三里許を人力車にて行くべし。此賃錢六十錢位なり。又半田港に到るには横濱及び神戸よりの定期船あり。次に大高驛にて下車すれば、陸路五里にて達す。車賃一圓位とす。第三に熱田よりは鳥羽に至る汽船ありて、途中大野に寄る。汽船賃下等十五錢にて一時間半位にて達すべし。

名古屋近傍

名古屋市 三府に亞げる大都會にて、東京新橋停車場を去る二百三十五哩餘、神戸を去る百四十一哩餘に在り。舊時は徳川幕府三親藩たる尾張藩六十一万九千五百石の城下、東海道と中仙道の兩道に介する要鎮にして、東海道の宮(今の熱田)驛よりは僅に一里弱を隔るのみ。今は人口二十四万四千餘を有す。市内には愛知縣廳(南武平町)を始め、第三師團(城内三の丸)市役所(榮町)、控訴院(本町)、地方裁判所(外堀町)、警察本部(南久屋町)郵便電信局(榮町)電話交換所(極屋町)等の諸官衙の外、名古屋商業會議所(榮町)赤十字社支部(縣廳前)博物館(末廣町)第一師範學校(東二葉町)第一中學校(南外堀町)縣立醫學校(天王島町)高等女學校(臺町)工業學校(武平町)明治銀行(傳馬町)愛知銀行(玉屋町)名古屋銀行(全)尾張銀行(門前町)商業銀行(鐵砲町)百五十銀行(古渡町)尾三農工銀行(縣廳前)日本銀行支店、三井銀行支店等あり。又會社には電氣鐵道株式會社(下名古屋町)名古屋生命保險會社(傳馬町)生絲株式會社等、新聞社には金城新報、新愛知、扶桑新聞、中京新聞等あり。此他病院二、劇場四、取引所三あり。遊廓は大須觀音の西に在り、旭遊廓と稱し、花園町、常盤町、若松町、富岡町、吾妻町、音羽町、東角町等に分る、花園町最も賑ふといふ。旅館には、榮町に多波良、松宗、山田樓、春風樓、

上園町に丸文、富澤町にしな忠本店、門前町に鶴鳴館、明治館、堅三藏町に名古屋ホテル等あり。又停車場前に信忠支店、河内屋支店等數多あり。次に料理店兼旅館にて最も著名なる前津小林の東陽館は近頃焼失して再建未だ成らず。其他の料理店にては、得月樓、河文、魚半等最も著はる。また土産物には、名古屋扇、七寶焼、一閑張、漆器、富士見焼陶器、袴地等あり。次に交通機關を舉れば、東海道線は笹島町に停車場を有し、中央線は千種に停車場を有す(其間接續す)千種よりの線路は勝川、高藏寺、多治見、土岐津、端浪、釜戸、大井を経て中津に至る。(中央線附近の部参照)電氣鐵道は笹島町停車場より、廣小路を通じて縣廳前に至り、更に延長して千種停車場に至る間を往復す。其間の停車場は笹島、中ノ町、長島、吳服、久屋、西新、東田、布池、車道、千種、泥江、本社前、菊井、押切にて、笹島より千種迄の乗車賃十錢なり。次に笹島停車場より的人力車賃は若宮八幡迄九錢、東照宮迄十錢、博物館迄十錢、東別院迄十二錢、控訴院迄十錢、熱田神宮迄十八錢、大須迄十錢、西別院迄十錢、中村豐國神社迄二十錢とす。以下市内及び附近の名所を舉げむ。(名古屋市地圖参照すべし。)

名古屋城

關上一雙の金の鯨を以て名高き名古屋城は、加藤清正の設計になれる名

城にして、慶長十五年以來、維新に至るまで、徳川家康の子孫の居りし所。城内今は第三師團の兵營たり。天主閣の高さは、土基の下端より五層の棟の上端まで、七間四尺七寸五分、最下の第一層は南北十七間、東西十五間三尺、疊敷五百三十六、最上の第五層は南北七間、東西六間、百疊敷の廣さを有す、閣上の金鯨は南の方を雄とし、北の方を雌とす、頭より尾の先まで各八尺餘、之を造るには慶長小判一万七千九百七十五兩を要したりといふ。(口繪寫眞参照すべし)

東照宮 長島町に在り。社殿大ならずと雖も、裝飾の美を極む。其東隣に在るを須佐男神社とす。今は那古野神社と改稱せり。

大須觀音 門前町に在り。眞言宗にして、北野山寶生院眞福寺と號し、慶長十七年美濃國中島郡北野村より此地に遷し、ものなり。本尊は弘法大師作觀音像なりと。此附近には飲食店、小間物店、勸工場、遊戯場等櫛比して、甚だ雑踏を極む。

此地市内の佛閣には東本願寺別院(下茶屋町に在りて、其北方なる富士見町の小丘を富士見原と言ふ)西本願寺別院(門前町)長福寺(前者の北隣)總見寺(門前町浪越公園の東に在り。天正年間織田信雄の建立)萬松寺(裏門前町)大光院(門前町三丁目)極樂寺(全一丁目)阿彌陀寺(前者の西隣)政秀寺(矢場町)長久寺(城の東方東芳野町)五百羅漢

(新出来町)建中寺(筒井町)相應寺(東長塚町)等あり。神社には榮町に朝日神社、菅原町に櫻天満宮等あり。

八事山

名古屋市内の瓦屋を望み、東方に吞海峰、吐月峯を扣ふる八事山は、笹島停車場の東南二里餘に在り。熱田町よりは一里半とす。頂上には弘法大師開基の邊照院あり。又此山の南に巖、茸の名所たる天道山あり。

豊國神社

笹島停車場の西二十町の上中村は豊臣秀吉出生の地にして、今は豊國神社あり。尙ほ市の西二里餘には推古天皇の朝の創建と傳ふる古刹甚目寺あり。

小牧山

市の正北四里に在りて、停車場よりの人力車賃四十錢位とす。これ豊臣秀吉徳川家康の兩英雄が、鋒を交へたる小牧の古戦場にて、今は公園地となれり。頂上なる創垂亭より望めば、數里の風景一眸の内在りて快極りなし。

熱田神宮

伊勢の大廟に次ぐ熱田神宮は、名古屋と町續きなる熱田に在り。日本武尊を主神として天照皇大神、素盞雄尊外二神を合祀す。社殿は明治廿六年の改築にて、規模の壯嚴なる、參拜者をして自ら襟を正さしむ。正殿の東土用殿に草薙劍を祭り、神宮の南三町なる攝社八劍神社には、新造の寶劍を安置す。境内樹木繁茂して、清淨高潔、

華表をくぐるからに、神威の赫々たるを覺ゆ。

熱田町

舊時東海道五十三驛の一として宮と稱せられ、伊勢灣の北端にて、伊勢の桑名まで、海上七里は、古來渡船の往復せし所、海陸運輸の便あるか故に、頗る繁榮を極む。方今停車場より神宮迄は僅に二丁なり。名古屋より神宮迄の車賃は十八錢とす。白鳥の御陵は、宇白鳥町、法持寺の裏手に在り。丘上老樹鬱として日光を遮る。旅館には岡田屋、伊勢屋、大森竹屋、紀伊國屋、桔梗屋、神戸屋、富士林等あり。何れも高座神社(仲哀天皇を祭る)全一里なる笠寺の觀音、全十五六丁なる八丁細手等なり。



鳴海町 鳴海を以て名高き鳴海町は、熱田の東隣なる大高停車場を去る十餘丁にして、町内には千鳥塚の眺望、呼續き地藏、瑞泉寺等の名所あり。



清洲 名古屋を西に去れば、直ちに一里半にて達す。此所は織田氏勃興の地として名高く、慶長年間迄は尾張第一の都會たりしが、徳川氏の名古屋に城を築きて以來、痛く衰微して昔日の繁榮は夢となれり。されど停車場を設けられてより、稍舊觀を挽回す。信長の城址は停車場の東一丁なる五條河原の畔に在り。數株の老松風に悲み、古碑三四、草裡に往昔の傳を傳ふ。又字本町の東には素盞雄尊を祭れる山王權現あり。

眞清田神社 一の宮停車場より五丁には、神武天皇三十三年の鎮座たる眞清田神社あり。國常立尊を祭神とし、今は國幣小社に列す。例年の大祭は十月十五日なり。

木曾川 源を木曾山中に發し、尾張美濃の境を流れ、東へ佐屋川を分ち、勢州桑名郡にて揖斐川を合せ、二大流となりて桑名に至り海に注ぐ。(東濃中仙道の部参照すべし)

岐阜街道の一驛黒田村には木曾川停車場ありて、是より十四五町には、有名なる木曾川堤の櫻あり。同じく二十町には川島の桃、四季の里は同じく西北三十町に在り。犬山城址は、天正年間豊臣秀吉が小牧の徳川家康に對して陣地を敷ける地にて、木曾川停車場より木曾川の南岸を溯ると四里の犬山町に在り。尙ほ同町字内田には妙心寺派の禪刹瑞泉寺あり。應永二十二年の創建にて、禪趣味に富めるか故に特に名あり。羽栗郡比保村

の曼陀羅寺は、後醍醐天皇の勅願所にして、本堂の建築は紫宸殿に模擬したるを以て名あり。木曾川停車場よりは二里許にして達すべし。

岐阜附近

岐阜市 岐阜縣廳の所在地にして、昔は井ノ口と稱せしが、織田信長の此地を占領するや、「周文王起岐山定天下」の出所によりて、岐阜と改稱せりとぞ。後に信長の安土に移るや、嫡子信忠之に居り、其後信孝居り、天正十一年豊臣秀吉の信孝を亡ぼすや、信忠の嫡子信秀城主となり、次で徳川氏の有に歸し、尾州藩に屬しぬ。明治廿二年市制を布き、今は市内を分つて岐阜、小熊、今泉、富茂登、稻束、上加納の六區とす。人口約三万四千を有す。此地東に稲葉山を負ひ、西北に長良川を擁し、西南の一帶は田圃に連る。明治廿四年の強震は市の大半を破壊して、伊奈波山の美觀を殺ぎたれば、爾後十餘年の今日まで、未だ舊觀を恢復すると能はざるが如し。岐阜縣廳(西都賀佐町)市役所(白木町)警察署(今川町)地方裁判所(今澤町)郵便電信局(美江寺町)岐阜聯隊區司令部(大寶寺)等の諸官衙公署の外に、學校には中學校(京町)正則英語學館(端詰町)高等

女學校(鶯谷)等あり。病院には縣立病院(西都賀佐町)あり。此他物産陳列所(縣廳前)名和昆虫研究所(京町)農會(同)商業會議所(東川端町)等の外に第十六銀行(中竹屋町)濃厚銀行(中鐵屋町)縮細會社、電燈株式會社、生糸株式會社等甚だ多し。新聞には岐阜日々、濃飛日報の二あり。旅店には玉井屋、津國屋、小橋屋、住吉屋、清水屋、小見山、中島屋、信濃屋、日下部、油喜、十八樓、外數軒あり。料理店には公園内の萬松館を始め、徳文、水琴亭、旭館、松年館、十八樓、大濱屋(饅料理)行樂亭(西洋料理)大龜屋(牛肉屋)長生館等の外數軒あり。劇場には國豐座、外五箇あり。此地東京を去る百三十三町、京都へ三十一里二十九町、大阪へ四十四里三十一町、名古屋へ九里二十町、静岡へ五十七里十六町、津へ二十四里三十三町とす。鐵道停車場は市と稲葉郡加納町との間に在りて、東京新橋停車場を去る二百五十二哩餘とす。名産には長良川の鮎、岐阜縮細、相良縫、岐阜提灯、團扇、傘、金華山燒陶器等あり。(岐阜市地圖参照すべし)

稲葉山(金華山)

市の東北に在りて、舊城址あり。中納言行平が「たちわかれいなばの山の峯にあふる松とし聞かば今かへりこむ」と詠めるは此山の事にして、満山綠樹蒼鬱たり。頂上よりは岐阜市の全部を下瞰すべし。頂に上らむには、公園内の萬松館の前

より躋る。二路あり。其一を七曲口と云ひ、他を間道とす。公園内には東照宮、物品陳列場等あり。板垣退助伯が、演説中に刺客に襲はれたる公園の中教院は現今の萬松館なり。

岐阜の大佛

稲葉山麓盆屋町正法寺境内にありて、高さ四十五尺、顔十二尺、耳七尺、鼻の高さ一尺二寸あり。停車場よりは三十町にして達す。

伊奈波神社

これ岐阜の總鎮守にして、稲葉山の西麓に在り。縣社に屬し、祭神を五十瓊敷入彦命とす。景行天皇四十四年の鎮座なり。

此他市内の神社佛閣には、金神社、丸山神社、太神宮、圓徳寺、瑞泉寺、西覺寺、善光寺、美江寺、常在寺等あれど特に案内すべき程のものにも非ず。

長良川の鵜飼

岐阜に至らば、何人も先づ鵜飼を聯想すべし。此川は源を同國郡上郡大日岳に發し、金華山下を流る。天下の奇觀たる鵜飼は、此河にて行はるゝにて、毎年五月十一日より十月十日に至る間、月明の夜を除くの外、一組七艘又は五艘の漁舟、鵜を放つて鮎を捕へしむ。暗夜の篝火、清流に映じ、鵜の鮎を捕ふるさまの奇觀を、舟中より眺れば興盡くるを知らず。鵜匠は一人にて十二羽の鵜を使ひ、一羽にして七八尾

の鮎を呑みたりと見たる時は、舟中に引き上げて、之を吐き出さしむ。十二羽の鵜が交る。舟より水に、水より舟に飛び交ふさま、實に戦闘に異ならず。此奇觀を見むには、遊覽船を雇ふべし。船賃は十五人乗にて四圓以下三圓、十二三人乗なれば二圓七十錢以下二圓二十錢、五人以上八人乗位にては二圓以下一圓二十錢、二人以上五人乗にては一圓とす。されば二人以上連合せば、舟中の料理、酒、舟夫への祝儀等の代を合して、一人平均一圓五十錢許を奮發せば充分ならむ。但し旅店、料理屋にては、何處にても丁寧案内すべし。又遊船株式會社なるものもあり。(口繪寫眞参照すべし)

岐阜八景

梅林の春色(稻葉山南麓の梅林にて停車場より十三丁) 長良の鵜飼、金

華山の秋月、稻葉の紅葉、公園地の雪、圓山の晴嵐(停車場より三十町) 崇福寺の晚鐘

(同一里)中節の歸帆(同廿三町)これなり。

崇福寺

岐阜停車場より一里なる福光村には織田氏の菩提所崇福寺あり。寺に信長

父子の墓あり。堂内の血天井は岐阜城陥落の際、勇士の奮闘戦死したる形見にとて、其

大床の板もて張れるものなり。今尙血痕斑々として轉々凄然たり。

此他岐阜市に近き名所にては、加納町の加納城址は、永井氏三万二千石の舊城下なり、

大垣附近

また上加納村の瑞龍寺は停車場より十丁。應仁元年齋藤利藤入道妙椿の建立なり。其東方約一町の篠ヶ谷には梅林あり。昔な杖を曳くに足る。

大垣町

安八郡役所の所在地にて、舊時は戸田氏十万石の城下、方今人口二万餘を

有す。西濃第一の都會たり。町内にて諸官衙の外に、中學校、高等女學校、銀行、會社

等多し。旅店には玉屋、松屋、安田屋、木村屋、新玉屋、京丸屋、飯沼等、料理店には

吉岡樓、與借園、吉村屋等あり。名産には大垣縮、白柿、柿羊羹等あり。又劇場二あり。

大垣城址は字廓の大垣公園内に在り。今尙ほ三層の天守閣巍然たり。園内には招魂社あ

り。また八幡神社は應神天皇を祭る。縣社にして建武年間の鎮座なりと。又此附近には戸

田氏の菩提所圓通寺あり。次に此地より揖斐川を降つて、伊勢桑名に至る川船あり。賃

金は一艘買切九十錢、乗合一人前十二錢とす。

日吉神社

停車場より北二里なる神戸町は榎斐、赤坂、谷汲に至る要路に當る。町内

には弘仁年間の鎮座たる日吉神社あり。源頼朝の馬が、神威のために畏縮せしは此社

の前なりと云ふ。

**養老の瀧** 有名なる養老瀧は大垣の西南三里なる養老山中に在り。大垣よりは高田を経て麓まで人力車を通ず。賃錢片道四十錢位なり。瀑布の高さ七丈餘、幅は二間あり。山腹には養老寺、養老神社等ありて、景趣幽邃なり。旅店には豆馬亭、掬水樓あり。宿泊料は八十錢を上等とす。又素心庵は菊水の泉の傍に在りて、曾つて名古屋豪家の娘たりし素心といふ老尼か、淨世の塵を避けて、此處に結びし草庵にて、薄茶一服を薦む。これ養老山中第一の名物にて、雅客の必ず杖を曳く所なり。山中眺望快裕ならずと雖も、千歳樓なる郡有の公會場よりは、遠く富嶽を望み、近くは名古屋城の金鯱を眺むべし。此地の名物には養老酒、菊水酒、瀑布糖、養老館、忍石、芹菜、養老蛙、養老山椒等あり。長良の鵜飼を見たる者は、此山中に静閑の景を見ば、興更に深からむ。

**一夜城跡** 大垣停車場の東二里黒俣町には、天正年間秀吉が築とし一夜城の跡あり。長良川の岸に沿ふ。此邊にては長良川を墨俣川と稱す。町は美濃尾張國境の要衝に當る

**南宮神社** 垂井停車場より八丁に在り。國幣神社にて、美濃第一の大社たり。祭神を金山彦命とし、崇神帝の朝、美濃中山より遷座せるものなり。

**朝倉寺** 垂井停車場より七丁なる朝倉山には朝倉山眞禪院なる觀音堂あり。元は南宮神社内に在りしを、維新後此地に遷したるにて、山上の眺望甚だ佳なり。

**春王安王の墓** 垂井驛の西南四丁に櫻の大木あり。樹下には五基の墓あり。其中二基は足利持氏の遺孤春王安王の墓たり。此二人の孤兒は、結城役の時、捕はれて京師に送られ、此地にて斬られたるなり。此より二丁程停車場に近き所には金蓮寺あり、堂内には二孤兒の愛らしき姿せる木像ありて、見る者轉々斷腸の念あり。

**垂井の泉** 垂井の西三丁なる玉泉寺内前の清泉こそ古歌に名高き垂井の泉なれ。此他垂井驛附近にては、停車場の西二十町に野上長者が宅址あり。同じく北西十町には垂井頓宮の舊址等あり。

**關ヶ原古戰場** 慶長五年九月十五日、東西二十万の大軍が、鎧を削りし關ヶ原には今停車場あり。東西兩軍の陣址にして、今日明かに指摘し得るもの少なければども（今日より想像し得る所には木標を建つ）風聲自ら嘯々たり。

**不破の關址** 日本三關の一たる不破の關は、關原停車場の西十五丁許に在り。此他附近の名所舊跡には、垂井村の西州町勝山村の桃配野の陣址は家康の關原に入り

し舊蹟なり。また同村の常磐御前の墓、柏原停車場の西一里半なる森物語の里（近江美濃の國境にて兩國の人、寝ながら談じ得るか故に此名あり）伊吹山（關原より二里）等あり。西國三十三番打納めの札所たる華嚴寺の谷汲觀音は、垂井より北七里を隔つ。石細工を以て名高き赤坂村は、大垣より行くも、或は垂井より行くも、同じく一里許にて、驛内の明星輪寺境内は、奇石怪岩を以て名高し。

琵琶湖近傍

米原 關ヶ原以西、長岡、米原の二驛を經、彦根に至れば琵琶湖畔に出づ。米原は北陸道鐵道の分岐する所、北行の旅客は皆な此所にて乗替へるなり。停車場前には、旅館中村屋外敷戸あり、宿泊、休憩、飲食、入浴等の設備具さに整ふ。米原以北は、別に北陸道鐵道附近の章中に説く可ければ暫く措き、今は直ちに西方に進むべし。

彦根町 彦根町は舊時井伊氏三十五万石の城下たり。人口二万餘を有し、町内富商多し。舊城址は金龜山と稱する丘阜に在りて、今尙ほ天守閣を存す。城址今は公園となり、琵琶湖水の風景を賞するに適す。此他の名所としては、停車場より五丁なる佐和山同十五丁なる平田山、往昔厩戸皇子が守屋連と戦ひし比久和山は全じく十五丁にあり。五百羅漢を藏し且つ風光の明媚なる天寧寺は、全五丁にして達すべく、大洞辨天は井伊氏の建立にて、亦湖上の風景に富み、停車場より十丁に在り。此地旅館には公園内の樂々園を始め、鎗屋、松屋、大和屋等あり。



近江鐵道 彦根より關西鐵道草津線の貴生川驛まで、近江鐵道通じ、東近江を南北に貫ぬき、官設踏道と關西鐵道とを連絡す。沿線に、彦根、高宮、豊郷、愛知川、小幡、八日市、日野、水口、貴生川の諸驛ありて、延長二十五哩、清水（日本武尊が妖氣を掃ひし泉なり）大尾山青岸寺（米原驛に近し。近江源氏の菩提所なり）摺鉢峠（全驛より二十五丁にして琵琶湖の眺望に富む）等あり。又河瀬驛にて下車すれば、西二十丁にして、琵琶湖畔に屹立せる荒神山の眺望あり。

其の間に紅葉に名高き永源寺あり。八日市驛より赴き見るを便とす。多賀神社 官幣中社多賀神社は彦根町より二里を隔つ。諸冊二神を祭神とす。境内千歳の老杉蔚々蒼々たり。此他彦根附近の名所を舉れば、長岡米原間の醒ヶ井に在る醒ヶ井の

能登川驛より下車すれば、十六丁にして安土山に達す。頂上よりは荒神山、三上山を眺めて風色甚だ佳なり。推古帝二年の草創たる石馬寺は、全停車場より一里なる石馬寺村に在り。愛知川の上流に在りて、楓樹の名所なる永源寺へは能登川驛より六里、八幡より五里とす。

八幡附近 八幡も、湖畔の一市街にて、伴村屋、山川屋、巽屋等の旅客あり。附近の名所には、町内八幡山上の八幡神社（寛弘二年の草創、眺望に富む）長命寺（停車場の西一里半、奥の島字松ヶ崎）観音寺（全一里半に在り、西國卅二番の札所）等あり。又野州停車場より下車すれば、藤原秀郷が百足退治を以て名高き三上山は、東二十五丁にあり。又平宗盛が墓は大篠原村に在り。

草津 これ東海道、中仙道の分る、地にして、關西鐵道は此所にて東海道鐵道に接続して起り、柘植、龜山を経て、名古屋、津、宇治山田等に通ず。去れば草津は、東海東山兩道の要衝として、古來繁榮の地、今は人口一万に垂んとす。旅館には葛屋、伊勢屋あり。又名物には古より名高き姥ヶ餅を賣る。日本六玉川の一たる野路玉川の古跡は、停車場の西十五丁の地に木標を以て示す。源頼朝か「明日もこむ野路の玉川萩越えて色ある波に

月宿りけり」と詠ぜしは此處なり。此處より大津に至る湖上一里半とす、又天平年間の開基たる常善寺は、停車場より五丁に在り。巨勢金岡の筆を藏す。

近江八景 皇國第一の大湖たる琵琶の風景は、委しく脱げば此地のみにて一冊子を爲す可れば、今は唯だ其重なるものをのみ案内すべし。而して湖畔の勝區たる所謂近江八景は、唐崎夜雨、粟津晴嵐、瀬田夕照、石山秋月、三井晚鐘、堅田落雁、比良暮雪、矢橋帆帆にして、此等を巡覽せむには、陸路馬場停車場を起點とするも宜しけれど、便なるは大津市を中心とするに在り。

大津市 は滋賀縣廳所在地にして、人口三万四千餘を有す。前には湖水を擁し、後には逢阪山の山脈を負ひて、風景頗る佳なり。滋賀縣廳、歩兵第九聯隊兵營、全郡役所、地方裁判所、師範學校、商業學校、大津病院、商業會議所、第六十四銀行、第百十五銀行、三井銀行支店、太湖汽船會社、湖南汽船會社、麻絲紡績會社等ありて、新聞には近江新報、さゞ浪新聞等あり。此地旅館には八景館、竹清館、松坂屋、竹定、小林亭、中村屋、見習亭、植木屋等ありて、宿泊料は普通六七十錢とす。太湖汽船會社の船は日々五回大津の御藏町を發して、堅田、小松、大溝、今津、彦根

長瀬間を往復す。竹生島遊覧船は三月一日より十月卅一日迄毎日午前九時に、御藏町岸を出帆す。湖南汽船會社の船は、大津紺屋關より約一時間毎に發して石山、瀬田間及び唐崎、坂下間を往復す。又八景遊覧船は四月一日より七月二十日まで、毎日午前十時半に全所を出帆して約四時間半にて三保崎に歸る。其賃錢三等二十錢なり。次に疏水乗合舟は三井寺下より發して、京都、山科に行く。人力車賃は平道一里十錢位の割にて、半日雇切四十錢、一日雇切七十錢位とす。東海道鐵道枝線は馬場驛より岐れ、石場を過ぎ大津に至る。停車場前には郵便電信局及び電話交換所あり。(大津市地圖参照すべし)

矢橋 此れ八景の一にして湖水の東岸に在り。草津停車場よりは西一里に位す。相國寺林長老詩あり。

釣竿手熟白頭翁。辛苦客船西又東。幾度風帆歸去後。呂公榮達一杯中。

勢田の長橋 古歌に名高き勢田の長橋は、勢田川に架せらる。川は湖水の南より流れ宇治川の上流を爲す。橋上には石山、三上、四明、比良の諸山を眺み、脚下に清流の浴々たるを見る。林長老詩あり。

沙島風帆帶夕陽。夕陽人影與橋長。勢田曝網東山月。一色江天兩景光。

石山寺 湖南の勢田川の上に聳ゆる山上にあり。脚下は湖水に對し、最も月を賞するに適す。寺は天平年中の創建なり。西國第十三番の札所たるのみならず、紫式部が、參詣して源氏物語を草したりと言ふか故に其名高し。林長老詩あり。

秋風蕭颯一天涯。霜滿四山不帶霞。古木回崖寒月影。吟殘葉々霧中花。

堂内には源氏の間あり。これ紫式部の居りし室なり。又觀月亭の後には紫女の墓あり。

栗津の原 勢田の長橋の西 雨似相狂。山花片々一盞海。湖岸に面する膳所町の背後にて、木曾義仲の討死せる古戰場なり。林長老詩あり。

嵐度栗津春興長。吹霞吹會殿と背中合せの寒かなの句は塚上に刻されたり。傍の祠を芭蕉堂と云ひ、芭蕉の木像を置く。芭蕉は全國を遊歴し、終に此地にて物故せるなり。

膳所 馬場より三丁許に在り。本多氏六万石の舊城下にして、茶臼山には維新の際國事に死せる舊藩士の招魂碑あり。



上関鷗夢亦香。

義仲寺

字馬場に在り。木

曾義仲を葬りし跡にて、其墓と相列んで俳聖芭蕉の墓あり。木

四の宮 膳所より大津市に入り、縣廳前に行き、其より四の宮町の四の宮神社に行くべし。これ彦火々出見尊、外三神を合祀せる神社にて、延暦年間の鎮座なり。毎年十月十日を大祭とす。

高観音 四の宮より長等山公園に登れば、脚下に湖水を見る。此處の近松寺に高観音あり。

三井寺 大津の西方に在り。西國三十三番札所の一にして、天安二年僧圓珍の開基、天台宗に屬す。寺域甚だ廣く、境内の眺望亦絶佳なり。此門前には大津繪を賣る家多し。

有名なる辨慶の曳鐘は裏坂の中腹に在り。又寺寶には元信、探幽合作の猛虎抱兒の圖あり。三井の晚鐘は八景の一にして林長老詩あり。

湖面朦朧畫不成。昏鯨高響出園城。霞間好是客船月。十倍楓橋半夜聲。

三井寺の善法院、金堂、圓滿院等を見終らば、門を出て、疏水、物産陳列場、第九聯隊兵營、弘文帝御陵等、順次に見つゝ行けば、天智帝の定められし滋賀の宮址に至る。

唐崎 志賀の宮址より唐崎(大津より一里半餘)に行くべし。湖岸には唐崎神社あり。

有名なる老松は其傍に在り。此地亦八景の一にして唐崎の夜雨に題して林長老詩あり。

激瀝湖光朝露晴。玲瓏山色暮雲橫。唐崎一夜換稜手。半作松風半雨聲。

日吉神社 比叡山麓に在り。大津を去る二里餘にして、神社は官幣大社に列す。毎年四月十四日を大祭とし、祭神は大山咋命外七神にして、七社十二攝社あり。本宮の建築壯嚴にして神々し。唐崎又は堅田に遊びし者は歩を轉じて參拜すべし。

堅田 落雁は八景の一にして浮見堂を以て名あり。堂は湖中に突出する十四五間にして、惠心僧都の草創に係る。林長老詩あり。

鴻雁幾行更不孤。晚風帶月落東湖。囊沙背水堅田浦。猶見孔明八陣圖。

比良山 暮雪を以て八景の一となる。比叡山の北に聳ゆる名山にして、海拔二千八百八十尺あり。山麓八尾戸村より登り一里十五丁とす。現存六帖に信實の歌あり

都にてさむさを見ゆる峯越の比良の遠山雪降りけり

湖西の勝區 湖南湖區の案内は此所に停め、更に湖西に廻れば高島、大津市より今津、海津の兩村を過ぎ、越前の敦賀郡に通ずる越前街道と、今津より若狭の遠敷郡熊川に至る若狭街道とありて、其の沿道に近江聖人と稱せられたる中江藤樹の藤樹書院の遺跡は



青柳村字上小川にあり。また禪宗の有名なる尼寺禪智院は、高島村字上科戸にあり。海津には湖上に突出する大崎の、巖巖重疊して怪石起伏し、老松の其の上に掩蔽して、古刹の松間より隠見し、近く竹生島と相對し、比良四明の諸峯、また影を湖面に落し來るの景、人をして戀々去るに忍びざらしむ。更に湖岸を西北に廻れば、西淺井郡は、越前の敦賀郡と接し、湖岸の鹽津村は、古來敦賀より運び來る貨物を再び船に積みて湖上に運ぶ所、今も船舶輻輳し、湖南の大津、長濱に對する湖北の要津なり。  
湖岸の名所既に略ぼ案内し終りぬ。更に歩を旋し、大津より馬場に歸り、逢坂山を踰ゆれば、山城國に入る。汽車は三百六十間の隧道を通過して、伏見を經、京都に入るべく、逢坂山には關所跡、關所明神、蟬丸祠、關の清水、關寺等の名所あり。之を過ぎ、蹴上ヶの里を經て、山紫水明の平安故都と爲る。其の案内は、本書の下卷に於て、詳かに説かんと欲す。



### 北陸鐵道附近

#### 長濱町近傍

東海道鐵道の米原停車場にて、北陸鐵道に乗り替へ、江州より北陸道に向つて走れば、名所舊蹟の案内すべきもの甚だ多し。中にも先づ第一に到着するは長濱町なり。  
長濱町 琵琶湖の東岸に臨み、陸上は北陸東海往來の咽喉を扼し、湖上の漁船を以て、南は、大津、彦根より、北は鹽津、海津等の各地に往來すべく、曾て豊臣秀吉未だ織田氏の臣として羽柴筑前守と稱せし頃、此地に封せられて城を築き、越前の朝倉、近江の淺井の二氏と對抗し、後終に兩氏を亡ぼしたる所、故に附近に古城址古戰場多し。  
古來濱縮緬の産地にて、また蚊帳、伊吹艾、生糸、蠶卵紙、源五郎鮎、鮎の鮎、等を特産とし、東淺井郡役所、區裁判所、警察署等の諸官衙あり。戸數約一千五百、人口約七千、井筒屋、碓屋、今津屋、升屋、港屋等の旅館あり。船を湖上に浮べて竹生島に遊び、若くは車を駈て賤ヶ岳、姉川等の古戰場を弔はんとする者は、此地に一宿するを便とす。

宿料は四十錢乃至五十錢を普通とす。

竹生島

長濱より湖上六里、有名なる辨才天女の祠あり。島の周回約二十六町、最高所は水面より高さこと六十尺、周囲の岸は、斷崖削立して攀ぶ可らず、唯だ東方に一の入江ありて舟を入るべきのみ。老樹森然、蟠生して、遠く望めば湖上に浮ぶが如く、絶景言ふ可らず。(口繪寫眞参照すべし)

姉川の古戰場

長濱停車場より凡二里三十丁、元龜元年六月二十八日淺井朝倉兩氏の軍と織田徳川兩氏の軍の激戦したる所、太閤記または講談などにて何人も知る有名な古戰場なり。

小谷城址

長濱の北隣なる高月停車場より東南二十五丁、東淺井郡小谷村にあり。元と淺井長政の居城にて、長政姉川の戦ひに敗れ、城陥りて淺井氏亡び、久しく廢墟と爲り、今は唯だ松茸の産地として名高し。

賤ヶ岳の古戰場

また高月停車場の西北約一里木ノ本停車場より三十丁にあり。此邊は北陸に通ずる唯一の道路にして、東は亂山重疊して雲に連なり、西は湖水漫々として數里の浪を湛へ、道を扼すれば以て北軍の進路を斷つに足る。故に北國の猛將柴田勝

家が、佐久間盛政を先鋒として、岐阜の織田信孝を救はんとて、越前より木ノ芽峠を越へ、近江に出て來るを、羽柴秀吉豫め數多の砦を木ノ本、柳ヶ瀬の間に構へて之を防ぎ、北軍は、先づ大岩山の砦を攻めて之を陥れ、守將中川清秀を戦死せしめしも、秀吉報を聞て、美濃の大垣より駆けつけ、終に大に北軍を賤ヶ岳に破り、加藤清正、福島正則、片桐且元、等七人の勇士が、各槍を揮ふて奇功を奏し、世に賤ヶ岳の七本槍と稱するは乃ち此地なり。

柳ヶ瀬の隧道

高月より木ノ本、中ノ郷、柳ヶ瀬の各停車場を過ぎ、近江と越前の二國を境する延長四千四百三十六呎の柳ヶ瀬大隧道を過れば、越前の匹田驛にて、更に走りて日本海の岸に出れば敦賀港なり。

愛發(あらち)の古關址

また柳ヶ瀬と匹田の間にある。伊勢の鈴鹿の關、美濃の不破の關とともに、古代に日本の三關と稱せらる。京都より北國の往來を取締りたる所なり。

敦賀港及其附近

本日漫遊案内

敦賀港は、越前國敦賀郡の北端、日本海の深く灣入せる敦賀灣の南岸に連なる市街なり。榮螺嶽の山脈西に連なり、木ノ芽峠と野阪山は東南に峙ち、三面高山を繞らし、恰かも屏風を立てたるが如く、港内常に風浪の險なく、また海水深くして大船舶の碇泊に適す。故に上古神功皇后の三韓を征し給ふときにも、先づ舟師を此地に準備し給ひしより、其後外國の往來は久しく此地を經たり。中世桓武帝の都を平安に奠め給ひしより、北國の貢物を京都に輸送するには、敦賀は益ます必要の港と爲り、北陸山陰兩道のは其地に於てするに及び、敦賀は漸く衰へたるも、露西亞領の浦潮斯德港へは、最も近き位地に在る爲に、今は同港へ定期航路開け、且つ西は宮津、境、濱田等の諸港を經て馬關より神戸大阪に達し、東は七尾、伏木、新潟より北海道諸港に通ずる定期汽船往來し、陸上の鐵道と相俟て、水陸交通の要衝と爲れり。其の市街は東西十六丁、南北八丁、



北陸鐵道附近

戸數三千餘、人口一万八千餘、敦賀郡役所、警察署、區裁判所、税關支署、敦賀銀行、大和田銀行、商品取引所、倉庫會社、等あり。また敦賀町を距る西南一里の金杉には、歩兵第十八旅團及第十九聯隊兵營あり。雲丹、海鼠、鮎鮓、鹽蟹、等を特産とし、市民の公會堂に萬象閣あり。旅舎には米七、具足屋、長岡屋、阪本屋、熊谷屋、大黒屋、出雲屋、等あり。料理店には、近清樓、小西樓、正福樓、釘正樓、藤村樓あり。町の東南手筒山下に遊廓あり、松月、井上、鮮清、等の諸樓最も名あり。當港より丹州汽船會社の汽船は毎日二回發着して、小濱、舞鶴、宮津の間を往來し、海上の交通甚だ便利なり。

本比神宮 敦賀停車場の傍にあり。仲哀、應神の二帝と神功皇后とを祭る官幣大社にて、祠前の大華表は、高三丈五尺、柱の圍り七尺八寸、海内有數の古建築といふ。境内の梅樹は、一花に實を結ぶこと七八なりとぞ、八房の梅とも云ふ。

金ヶ崎宮 敦賀町の東北端、海面を抜くこと百五十尺の山上にあり。延元元年後醍醐帝一たび北朝と和睦し給ふとき、新田義貞兄弟は、皇太子恒良親王及第一の皇子尊良親王を奉じて北に走り、金ヶ崎の城に據り、杣山の守將瓜生保と互に聲息を通じ、義徒

を集めて回復を圖り、足利氏の大軍來り攻るに及び、衆寡敵せず、力盡きて城陥り、親王は自盡し、皇太子は捕へられて後に害せられ、新田氏の主従多く此所に戦死し、最も悼まじき事蹟を歴史の上に留めたる所。今は官幣中社として、皇太子及親王を祀り、傍らに金ヶ崎古城址の石碑を樹て、詳かに當時の顛末を記し、讀む者をして慷慨禁する能はざらしむ。宮の背後なる山肩に出れば、敦賀全市街を下瞰して、港内を去來する汽帆船は、指願の間に在り、眺望最も快濶なり。

松原神社 市街の西端を離るゝこと二丁、海に沿ふて松林長く連なるもの八丁餘、敦賀灣に臨みて蒼翠滴たるが如き間に在り。是れ近世史上に著名なる水戸藩の名士武田耕雲齋、藤田小四郎等が、勸王攘夷の説を唱へて幕府の容るゝ所と爲らず、却て兵を發して討せらるゝに及び、其の衷情を朝廷に訴へんと欲し、上京の途中、幕軍の爲に沮まりしも、風雪の爲に困められ、力盡きて加賀藩の軍門に降り、後に其徒三百餘人は皆な死を賜ひ、慶應元年二月此の松原中に自盡したるなり。豎一丈幅三尺の寒水石の大石碑、今は其の事蹟を録し、諸士の英魂は神社として之を祀る。祠は停車場より十八丁に在り。

(口繪寫眞参照すべし)

常宮(じやうぐう)神社 敦賀の市街を距ること海路約二裡、敦賀灣の西北端、立石岬燈臺の陰にあり。縣所にして天八百万比咩神、氣長足姬命、足中彦命の三神を祭り。大寶三年の創建なり。山に倚り海に臨み、老樹鬱蒼境内を掩ひ、洞内に古鐘を藏す、豊太閤征韓役の分捕品にて、高さ三尺八寸、周り六尺九寸、形状怪奇、古色蒼然掬すべし。

若狹地方

小濱町 越前の敦賀を西に去て榮螺岳の半島を横ぎり、野阪峠を越へて若狹に入り、一たび海岸に出て、また三方湖の東方を南に走り、三十三間堂山を越て北川を渡り、更に西に走て北川と南川との東西より來り會して共に海に注ぐ所の西岸に在る一市街を小濱町と爲す。町は若狹第一の都會、舊時酒井氏十一万二千五百餘石の城下にて、若狹中更に小濱の小灣を爲し、東は久須夜ヶ岳の半島、西は和田山の半島と相對して恰かも雙手を展るが如く小濱灣を擁す。北川は、東南方近江の武奈岳より來り、南川は西南方丹

波に境する諸山より來り、ともに小濱に會して海に注ぐ所、小濱港を爲すなり。此地北陸道と山陰道とを連絡する要衝に當り、敦賀へは十二里二十六丁、舞鶴へも約十三里の中間に在り。また武奈岳を越て琵琶湖の西岸に沿ひ、大津に至るまでも約二十三里、然れども三面盡く山岳を繞らし、一面は海岸犬牙錯出し、平野少く人口稀に、若狭全國、三方、遠敷、大飯の三郡を通じて、一万七千戸、九万人許に過ぎずして、而かも戸口は年々減少の傾向あり。是れ土地に著名の物産無く、また交通の利便備はらざるに由る。近年に至り、丹州汽船會社は舞鶴より小濱を経て敦賀まで日々二回汽船を往復し、海路の便なるが爲に、陸上の往來は益々稀にして、大門小門、三方湖等の勝地あるも、多し世に知られざるなり。小濱の市街は東西五丁半、南北七町餘、戸數約二千二百、人口約八千、町の北端南川を隔て、雲濱村の字、竹原、西津と接続し、宛も一市街の觀を爲す。舊城は、南北兩川の會流して海に注ぐ岸にあり。樓櫓は盡く毀たれたるも、城壁は尙存し、町に遠敷郡役所、警察署、區裁判所等あり。維新前に名高き勤王の志士梅田源次郎が、妻臥病、床一兒泣、飢と歌ふて家を辭したるは此地にて、其の號を雲濱と呼ぶは生地に因むなり。方今雲濱の墓は小濱の隣りなる今宮村字青井にあり。また天

保の頃小濱藩出身にして有名なる國學者伴信友の碑は、近頃今宮村字伏原に建てらる。小濱は若狭塗の漆品を特産とし、旅館兼料理店には青濱館(八原屋)伊瀬あり、旅館專業には鶴田屋あり、宿泊料は普通七十錢、料理店には吉龜あり、鰻と鳥との割烹を以て稱せらる。

●大門小門 小濱の東北約三里、小濱灣に沿ひ、遠敷郡内外海村の海岸に奇景あり。巨巖海中に屹立して巖腹に洞門を開くもの二あり。大さ樓門の如く、扁舟に乗じ、橋を立て、過ぐべし。俗呼びて大なるを大門、小なるを小門といふ。怒濤風に激して巖を打ち、巖は笑ふが如く頽瀾を吐吞するの状は、殊に壯觀といふ。(口繪寫眞參照すべし)

●三方湖 は小濱と敦賀との間、三十三間堂山と野阪山との間に在り。水月湖、久々子湖と連なり、連山の影を湖面に映じ、風景甚だ愛すべしと雖も、地の僻なるが爲に遊人稀に、唯だ湖中の鰻の美味を以て鳴るあるのみ。

●若狭彦神社 小濱の東南約一里半、遠敷村大字龍前に在り。國幣中社にして、彦火々出見尊を祭る。靈龜元年元正天皇の勅願を以て創建せらる。遠敷の若狭姫神社を下ノ宮と稱するに對して上ノ宮と稱す。

若狹姫神社 遠敷村大字遠敷にあり。若狹彦神社と相距ること十五町、また國幣中社にて、豊玉姫命を祭り、養老五年の創建にて、上ノ宮より創建年代の後ること六年なり。故に上下兩宮相並びて若狹第一の大社たり。

福井市近傍

武生町 敦賀港を北に去て、木芽峠を越れば、鐵道は國道と合し、今庄驛を過て武生町に達す。町は越前國中福井に次ぐ繁昌地にて、南條郡の東北端、北陸道國道の要衝に當り、往時國府を置きたる所、故に舊時は府中といふ。天正三年前田利家此地を領するや、城を築きて居り、後年福井の藩臣本多内義なる者其城を守る。今は南條郡役所の所在地にて、警察署、區裁判所等あり。戸數三千六百餘、人口約一萬五千、鍛冶を業とする者多く、農具を特産とす。福井まで五里五丁、敦賀へ十里十一丁といふ。旅店に疊屋、米庄、柳屋、東屋あり。宿料は七十錢乃至四十錢。  
國分寺 武生町字曙にあり、天平十一年の創建、聖武天皇の勅願所なりしも、天正年間羽柴秀吉柴田勝家を攻むるとき、兵燹に罹り、今は僅に本堂、庫裡の二字と、僧

府縣地圖

本紙の毎月附録府縣地圖は其回数既に四十二回に及び全國完成の期漸く近く(月極購讀者の外一府毎に金五錢)

定 價

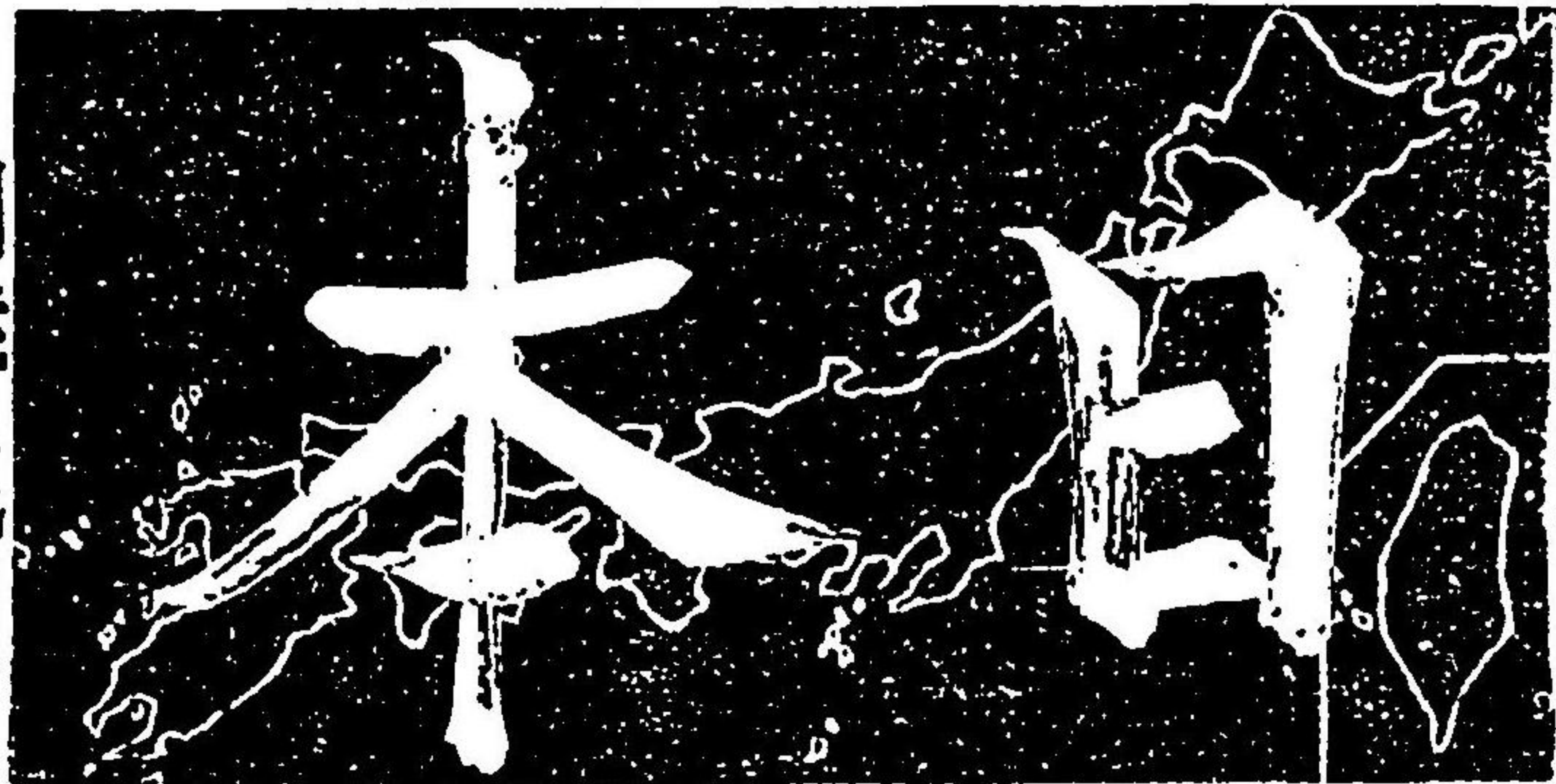
壹枚 金 貳 錢 壹箇月 前金 四 十 錢  
三箇月 前金壹圓拾五錢 半箇年 前金貳圓貳拾五錢  
壹箇年 前金四圓四拾五錢

(市外は別に郵税壹箇月金拾五錢宛)

本紙見本御入用の方は此廣告封入の上直接本社へ御申込み被下候得ば本社より直に毎日一葉宛三日間引續き無料にて發送致し候此廣告の有効期限は廿六年九月三十日限とす

東京神田雉子町

發行所 日本新聞社



朝鮮地圖

最近の材料に由りて編纂したるものにして精巧無比、滿韓問題を研究せんと欲するの士は必らず座右に備へざるべからず(郵部郵税共拾四錢)

# 各宗本山

石倉重繼君著 (寫真銅版廿四葉挿入)  
**本願寺名所圖會** 全壹冊 正價六十錢 郵税十錢  
 本派本願寺は古くは淨土の大本山として古來に於て厚く崇敬され有し其信者亦多衆を擁する所は全寺の沿革及變遷を古記録によりて之を詳説し尙是らざる所は寫真にて補ひ以て世に公せしむるもの

石倉重繼君著 (石版密書及寫真銅版十八葉挿入)  
**大本願寺名所圖會** 全壹冊 正價四十錢 郵税十錢  
 東本願寺は原如上人の創設に據る西本願寺に對し古來に於ての優り本書は著者が周到なる用意と流暢なる筆致を以て其寫真を以て全寺の百餘に關する事項の名稱沿革を詳説するもの

石倉重繼君著 (寫真銅版十八葉挿入)  
**佛光寺名所圖會** 全壹冊 正價二十五錢 郵税十錢  
 本書は佛光寺派の本山たる東本願寺の寺蹟を編纂したるもので現見せる史蹟を精密に考證し連したれば

石倉重繼君著 (寫真銅版廿四葉挿入)  
**日光名所圖會** 全壹冊 正價六十五錢 郵税十二錢  
 日光の偉觀は世界の嘆賞する所其輪奐の美殿宇の壯殊に其地の山紫水明韓柳の篳も委曲を盡し得ざるべし本書は著者周到の川意により文を補ふに寫真を以てし日光の眞景を寫せるもの

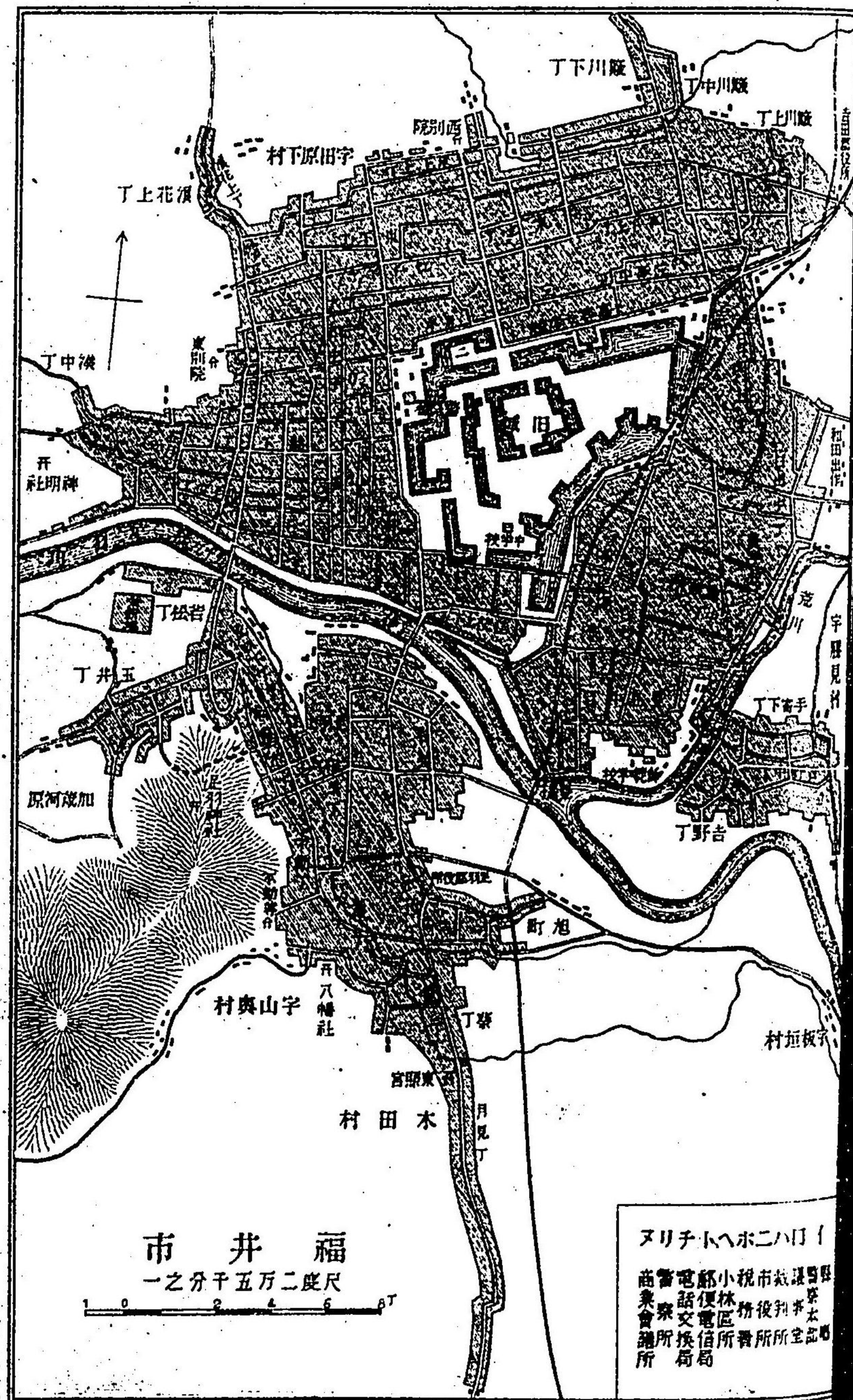
石倉重繼君著 (寫真銅版廿二葉挿入)  
**日蓮宗名所圖會** 全壹冊 正價五十錢 郵税十錢  
 本書は日蓮宗各本山の名所傳蹟靈場等を詳述せるものにして小は一片の墓標より大は各寺の山絡沿革に至るまで委曲洩すなし殊に數十面の口繪は行文を補ふて餘りあるもの

石倉重繼君著 (寫真銅版廿三葉挿入)  
**成田山名所圖會** 全壹冊 正價三十錢 郵税六錢  
 成田山新勝寺は今を距る千年前の建立にして京北唯一の靈境なり著者例の靈筆を呵して其沿革山緒を叙する詳にして精一讀して幽邃なる絶景に入り再讀して其皇をしき高德を仰ぐに至る

# 名所圖繪

發兌元 東京市日本橋

區本町三丁目 博文館



第二十圖

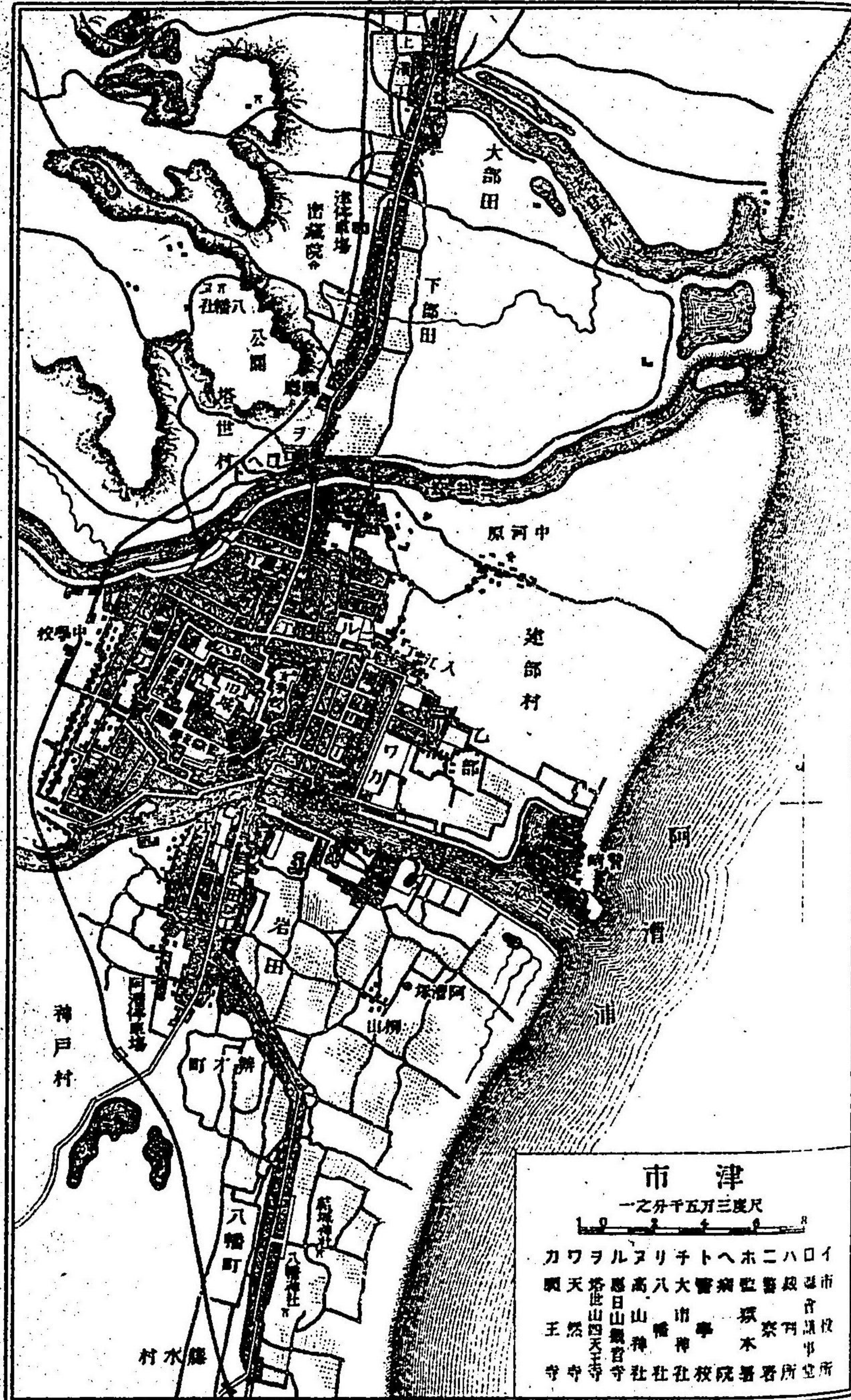
米國名産  
近時一級の改良 歩み早く味は濃厚  
精撰良葉

トッペンビ

スキッア  
東京新橋  
江副商店







俳諧の流行は近事たる處其盛を極む而して本書の如きは斯界の嗜好者  
是非所持せざるべからざる者必ず一見落すとなく買ひ玉へ買玉へ

雪中庵雀志宗匠序及校閱  
不白軒梅年宗匠跋 五乳人鈞雪編

(製本既成)

# 俳諧提要

全壹册洋裝  
正價五拾錢  
郵稅八錢

懷を物外に述べ、心を風月に養ふもの、詩歌あり、俳諧あり而して平民一般  
に、適して鄙都至る處に、吟賞するもの、實に俳諧にあらずや、五乳人鈞雪氏  
は、最も熱心なる人、本書を編輯する爲め斯道に丹誠を盡すと二十有餘年遂  
に此提要を大成せり、其掲ぐる處明心居士の御筆、親重入道のはなび草、等  
を始め故人大家の垂戒示教せしもの多々之を納む皆是れ斯道の奥義に關す  
る珍書なれば世間亦容易に得かたし請ふ一部を机上に備へて清賞の伴侶と  
せらよ。

發兌元

東京日本橋區本町

博

文

館

之旅之行

<p>● 巖谷小波君著 洋行土産</p> <p>● 大橋乙羽君著 歐米山水</p> <p>● 大橋乙羽君著 歐米小觀</p> <p>● 鎌田榮吉君著 歐米漫遊雜記</p> <p>● 水田榮雄君著 大英國漫遊實記</p> <p>● 松井廣吉君著 米國漫遊雜記</p> <p>● 飯島榮太郎君著 米國渡航案内</p>	<p>● 全一冊 洋布上綴 正價四十二錢</p> <p>● 全一冊 特別上綴 郵稅壹圓五十錢</p> <p>● 全一冊 洋布上綴 正價四十四錢</p> <p>● 全一冊 紙皮上綴 郵稅四十五錢</p> <p>● 全一冊 紙皮上綴 郵稅七十一錢</p> <p>● 全一冊 紙皮上綴 正價三十八錢</p> <p>● 全一冊 紙皮上綴 正價四十六錢</p>
--	---

發兌元 東京日本橋區

好伴侶

<p>● 石澤文學士著 山黑水</p> <p>● 渡邊燕山著 山楚水</p> <p>● 村井秋庭君著 道樂</p> <p>● 依藤計士君著 文明の大破壊</p> <p>● 大橋乙羽君著 花鳥集</p> <p>● 大橋乙羽君著 初子集</p> <p>● 大橋乙羽君著 風月集</p>	<p>● 全一冊 紙皮上綴 郵稅二十七錢</p> <p>● 全一冊 紙皮上綴 郵稅六十七錢</p> <p>● 全一冊 洋布上綴 郵稅各五十五錢</p> <p>● 全一冊 洋裝並綴 正價四十一錢</p> <p>● 全一冊 洋布上綴 郵稅壹十八錢</p> <p>● 全一冊 正布上綴 郵稅四十六錢</p> <p>● 全一冊 洋布上綴 正價三十五錢</p>
--	---

東京日本橋區 博文館

記事も意見も穩健にして而も綿密なれば、何の事件に關しても最も信頼して讀む可き新聞紙なり

定價 一枚一錢 郵稅 一枚二厘  
百枚八十錢 百枚二十錢

# 日刊新聞 萬朝報

本局 東京京橋弓町廿一 朝報社

一年三百六十餘日。日々味いて飽きる事無し。新聞紙中の米の飯也。人は一日も此新聞に離る可からず



(江邊) 岸の湖名濱



(豆伊) 望味の斥富リ上浦の丸



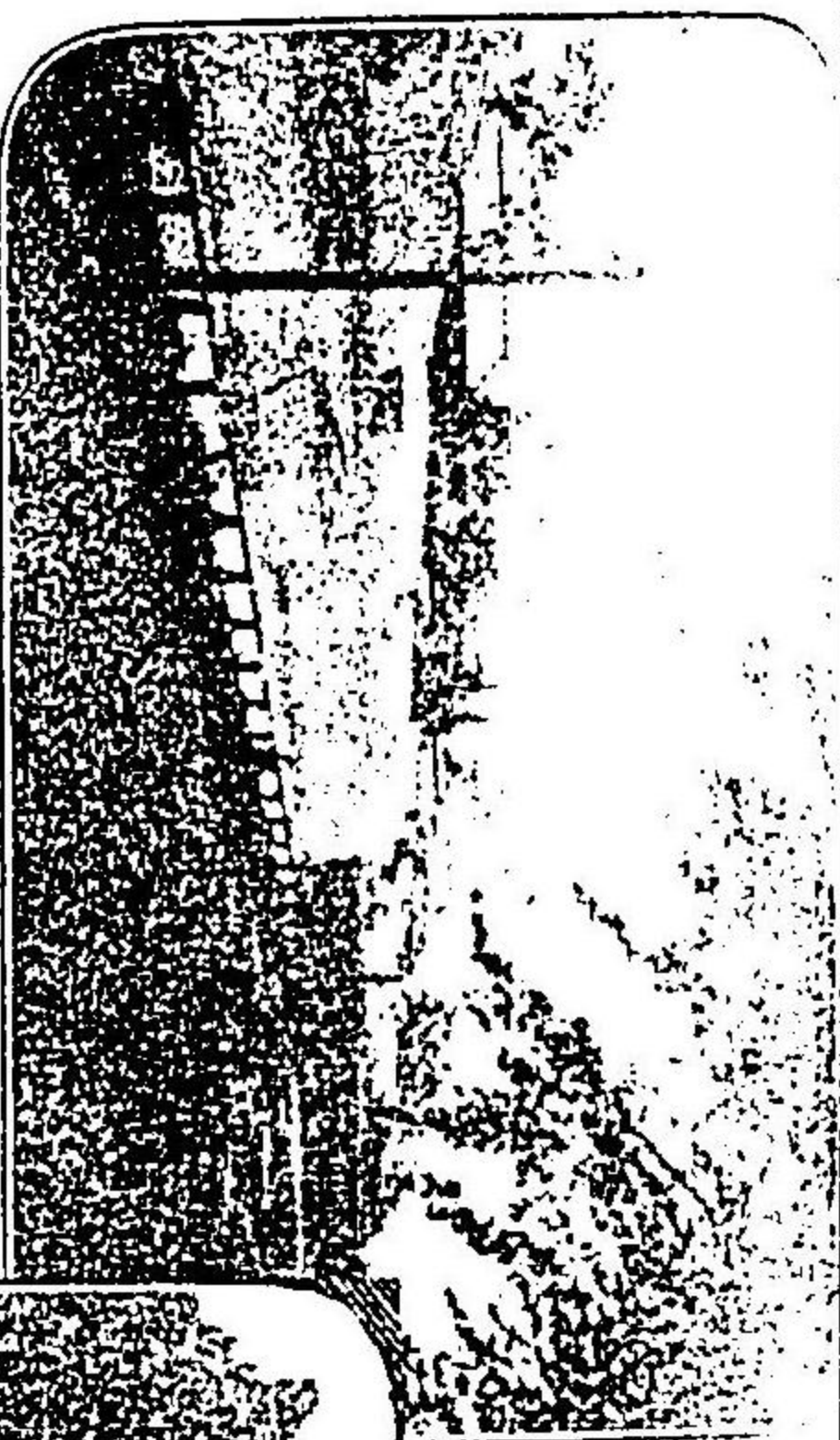
土宮の口三井 (張甲)



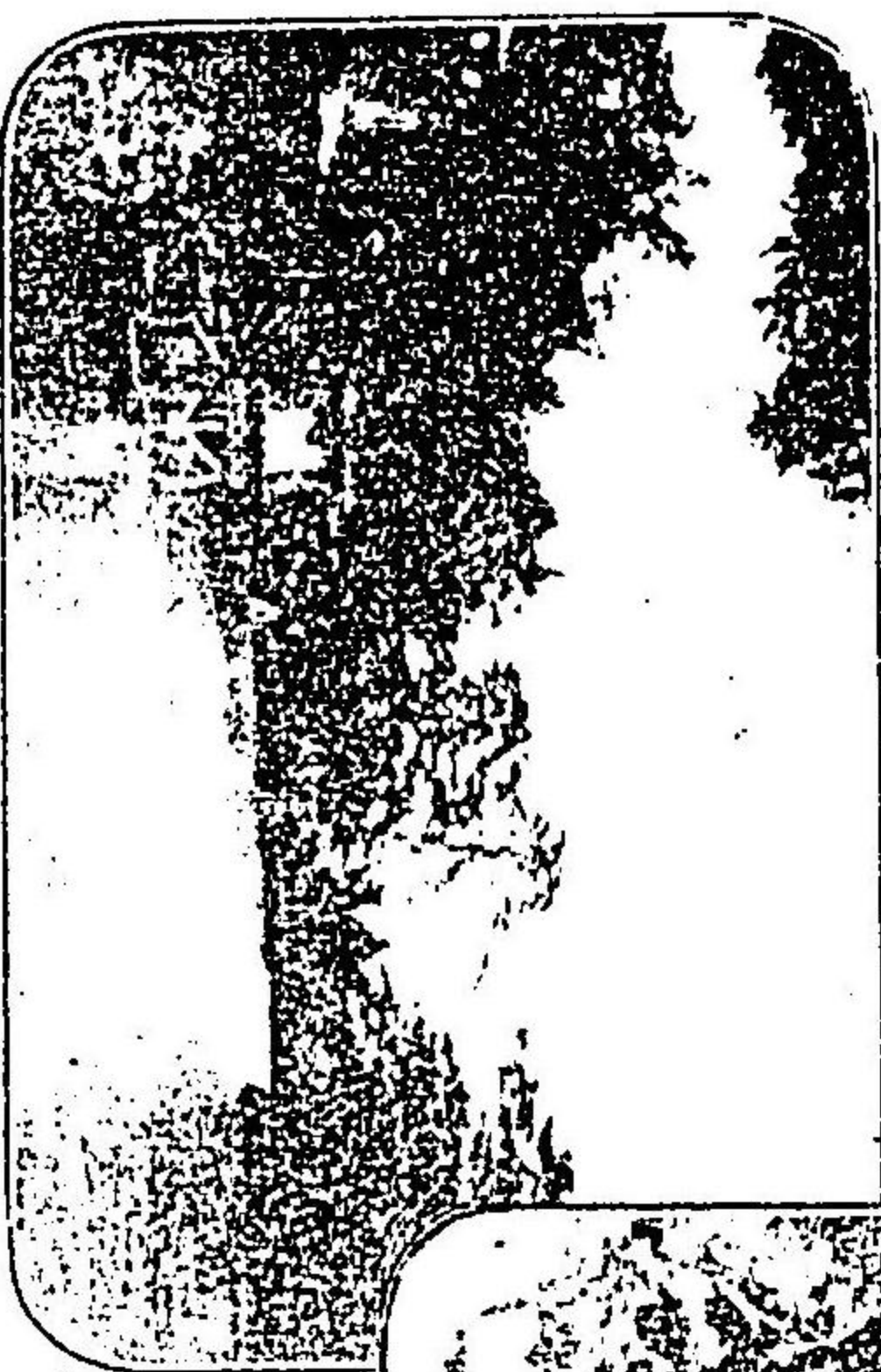
(張尾) 城 歴 古 名



(河三) 岸海の近附湖風伊

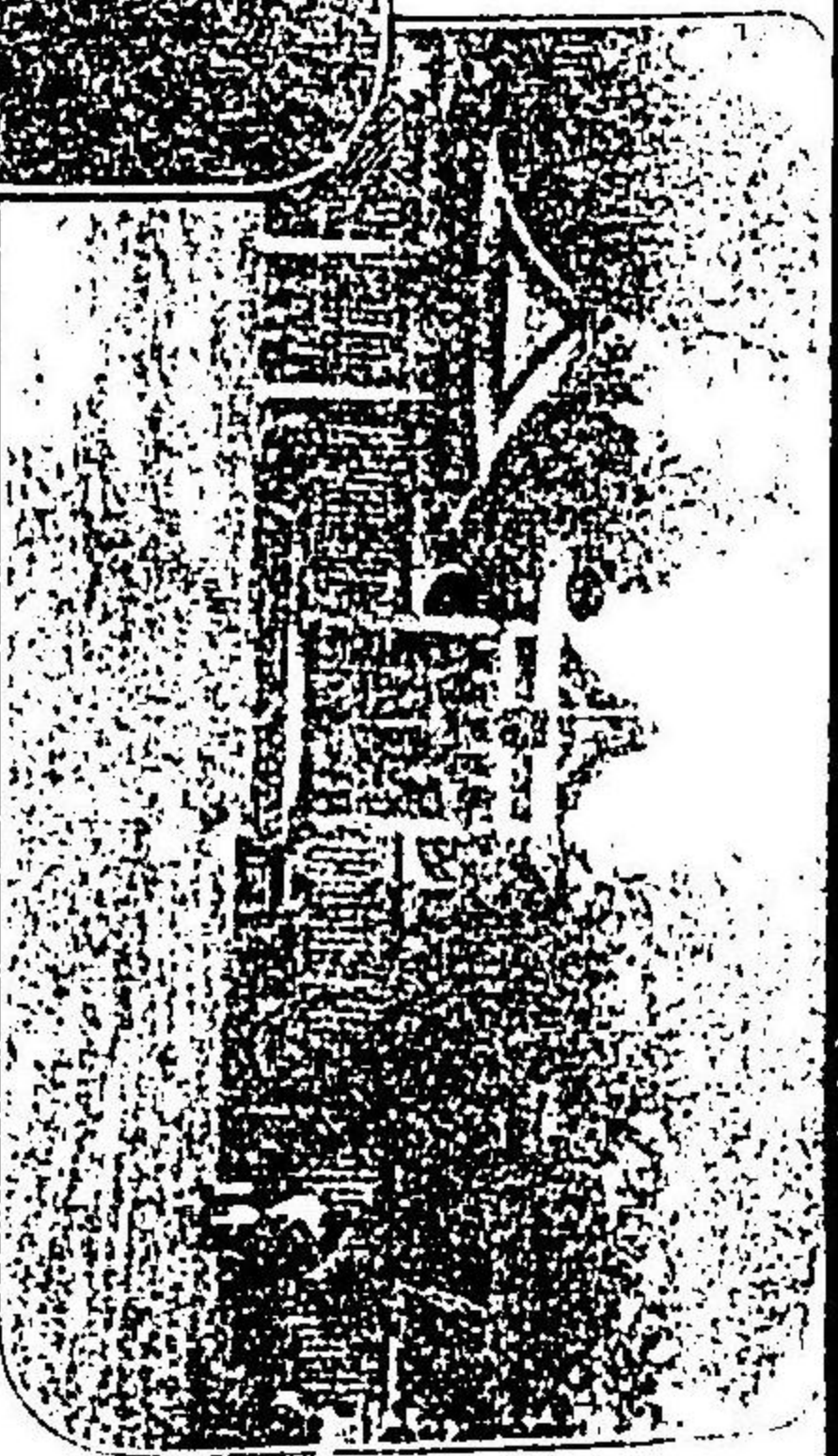


(賀加) 湊岡百の址城古澤金

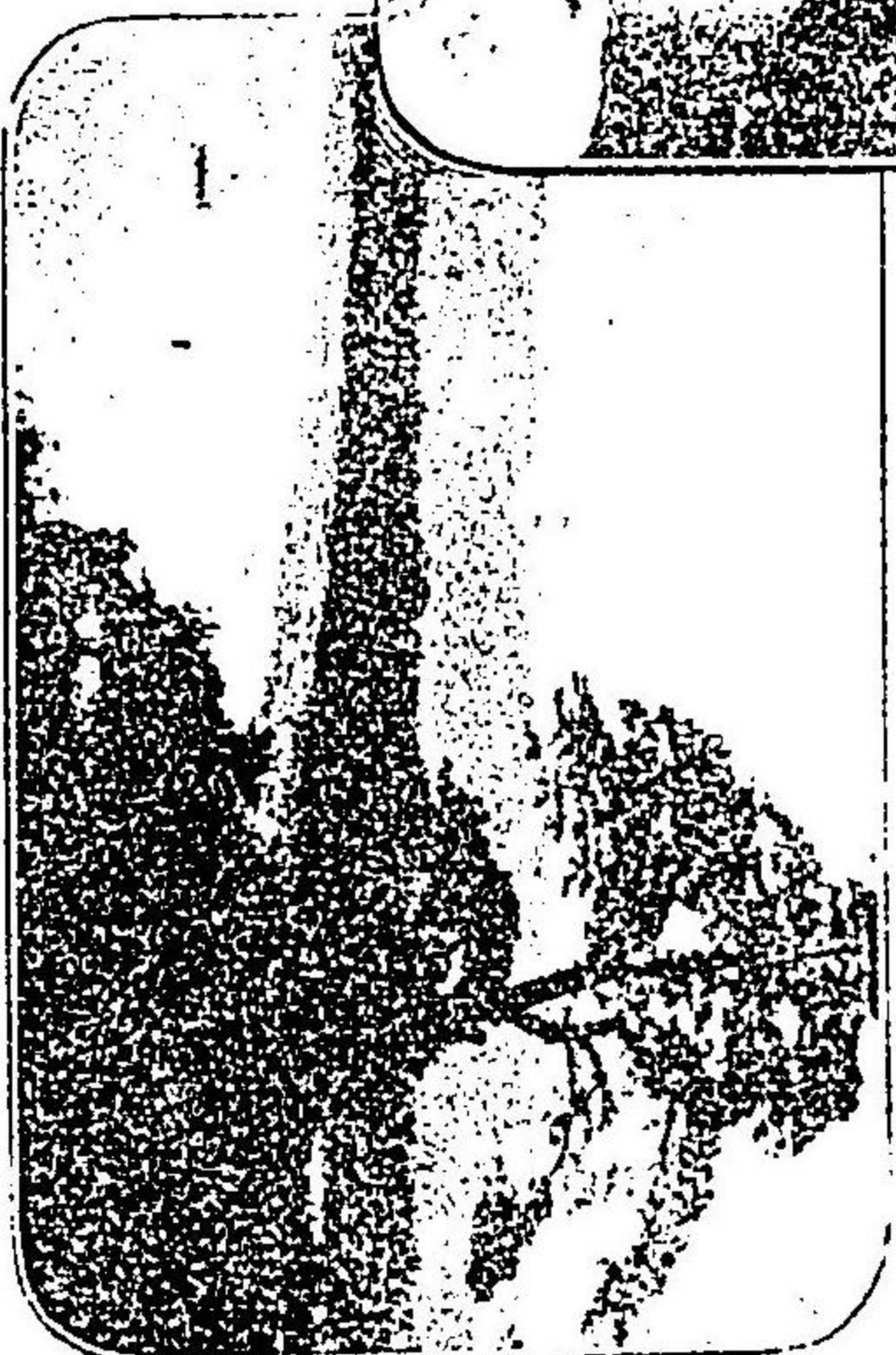


(賀加) 岡公六兼澤金

門小門大  
(狹若)



(前越) 社神島藤の時菫

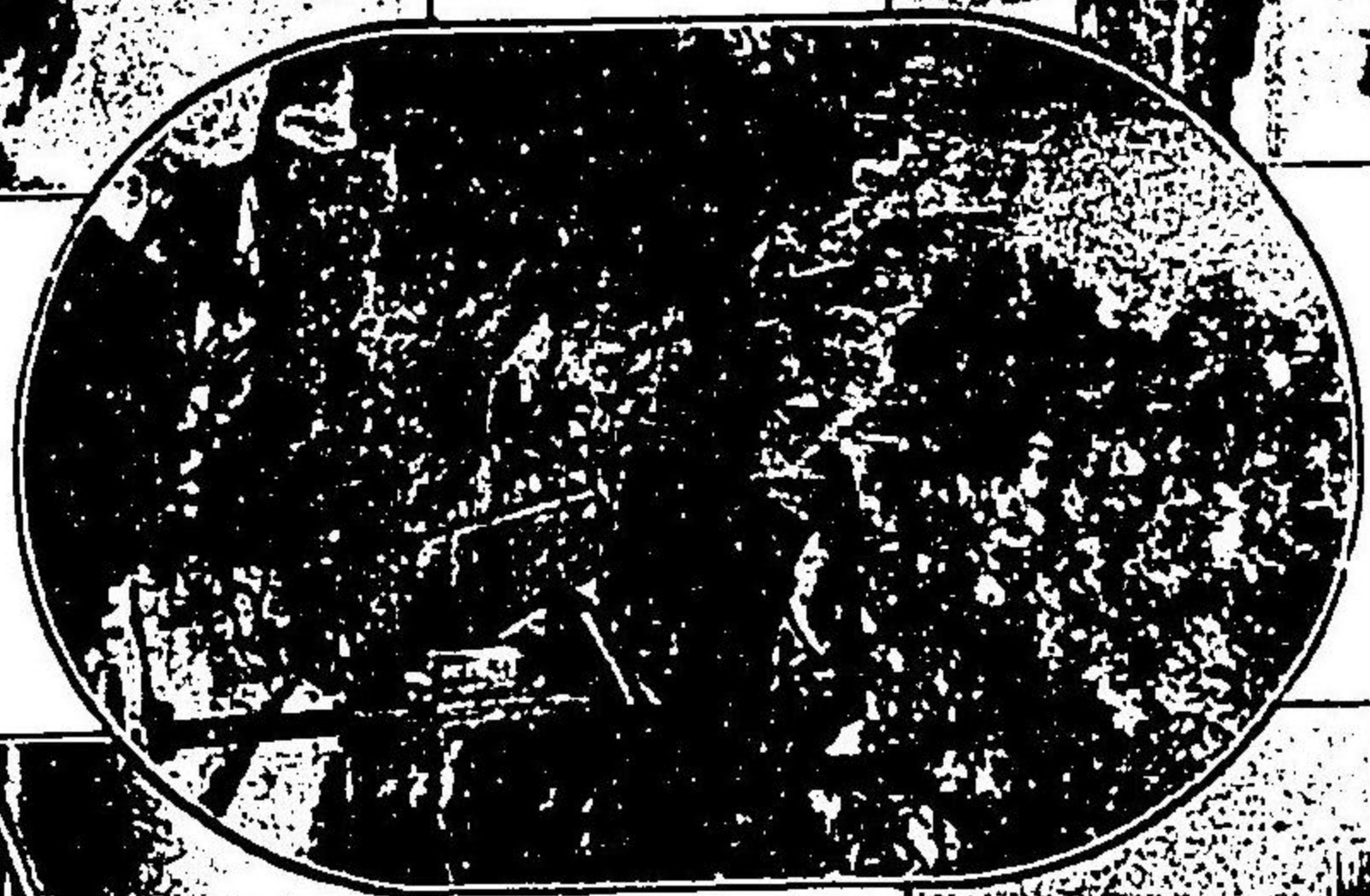


(前越) 岡公原松賀敦

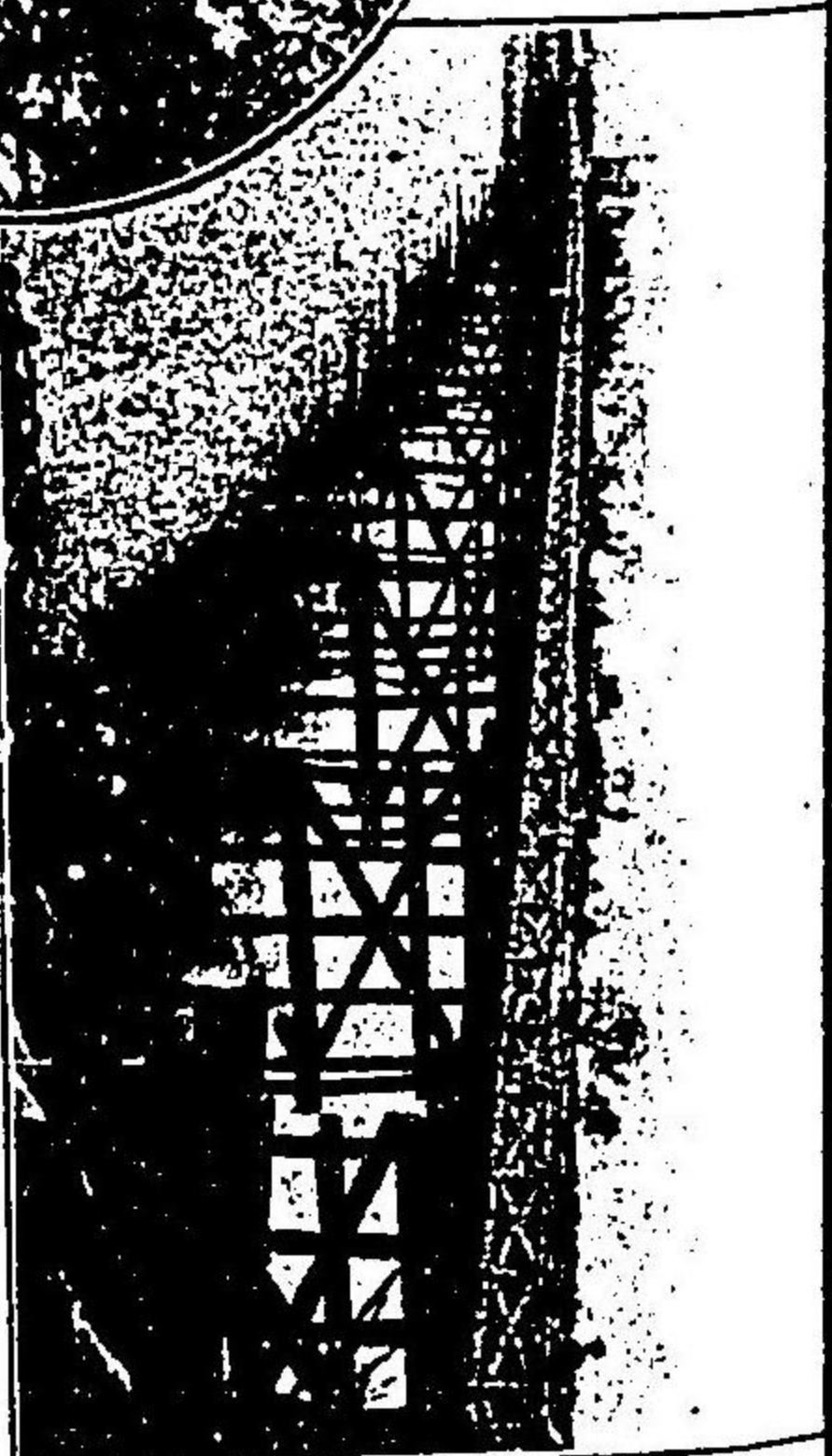


(登能) 島天辨泉 溫倉和

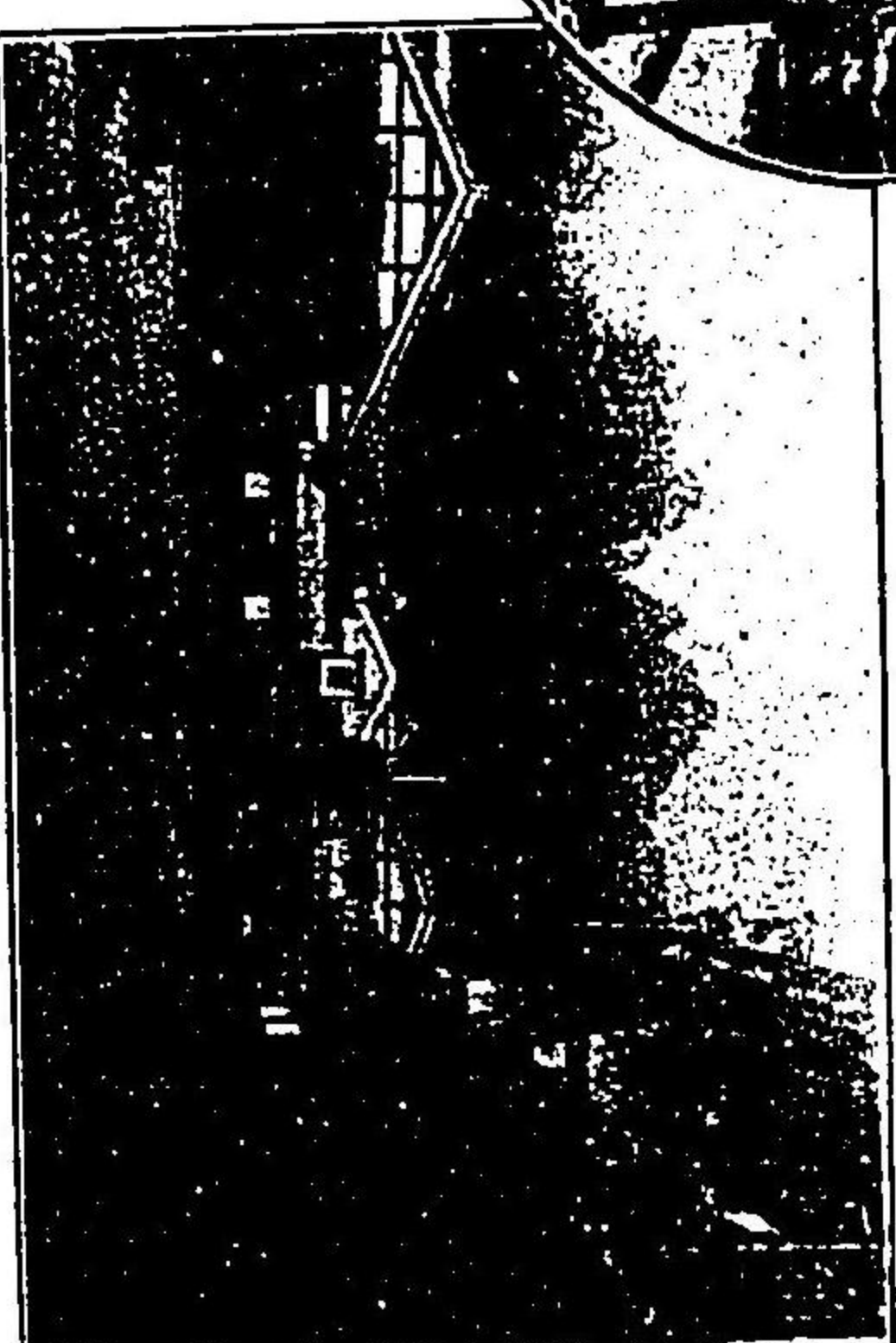
寺 谷 那  
(賀 加)



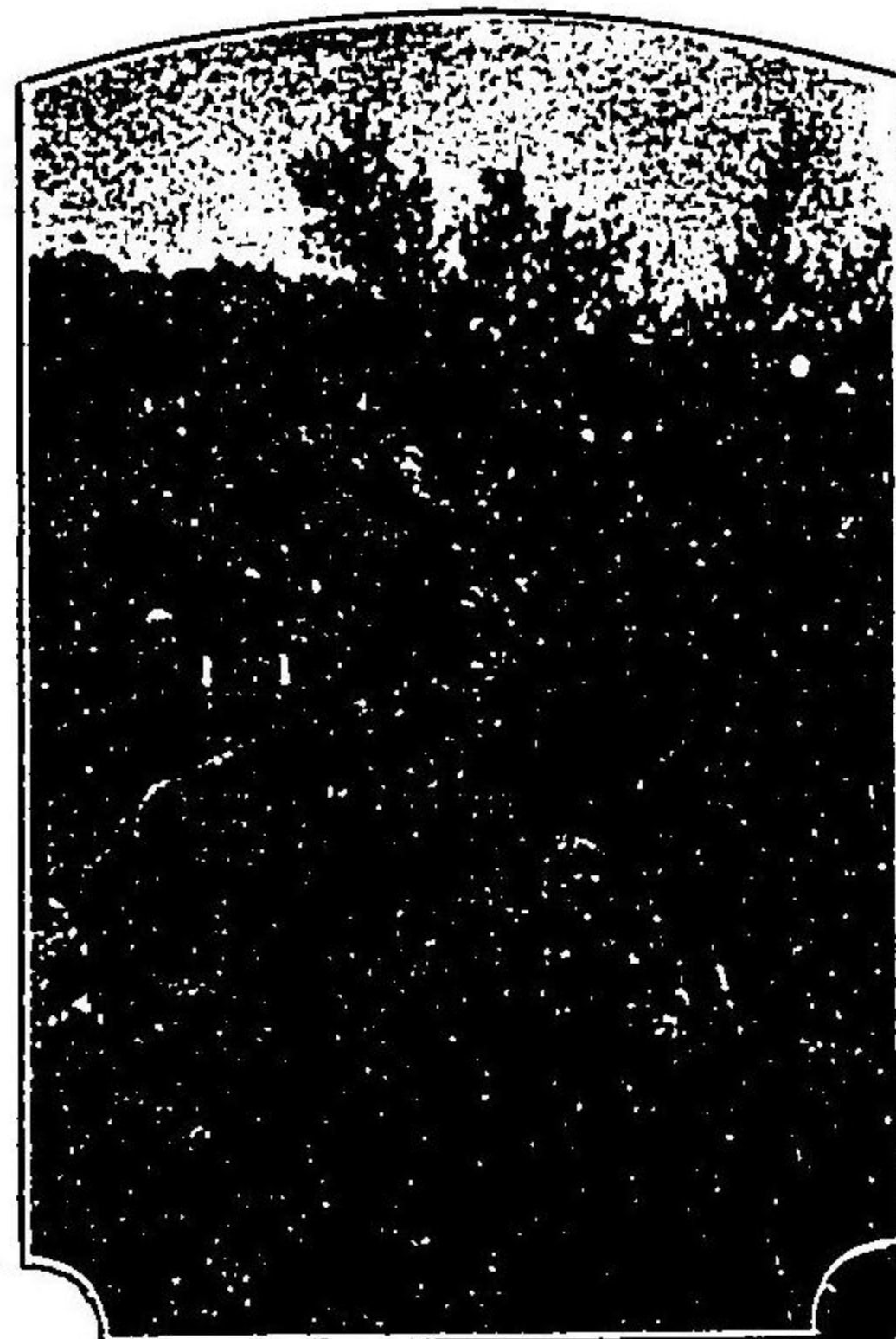
(賀加) 橋谷黑泉 溫中山



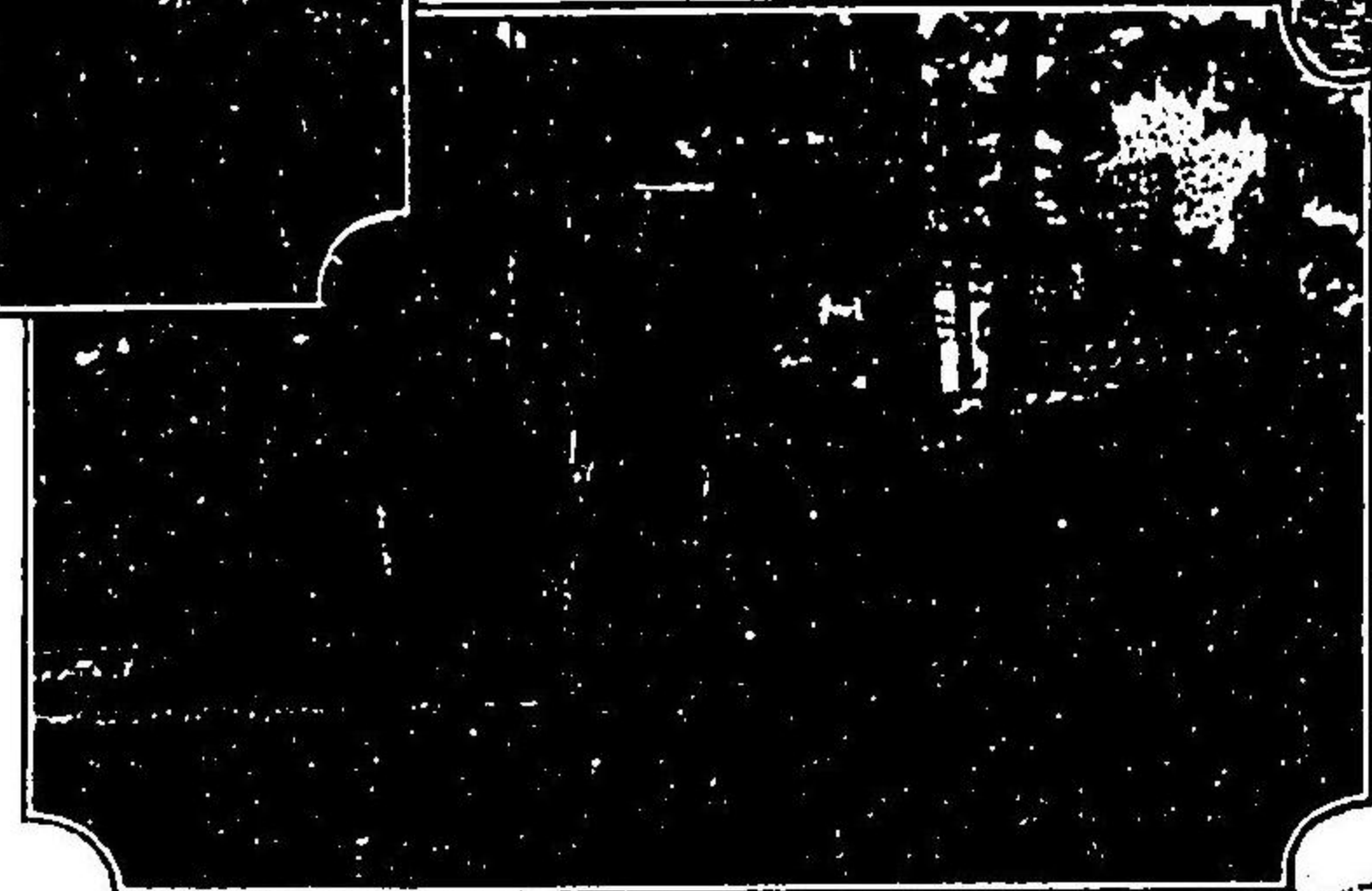
(中越) 橋通神外市山富



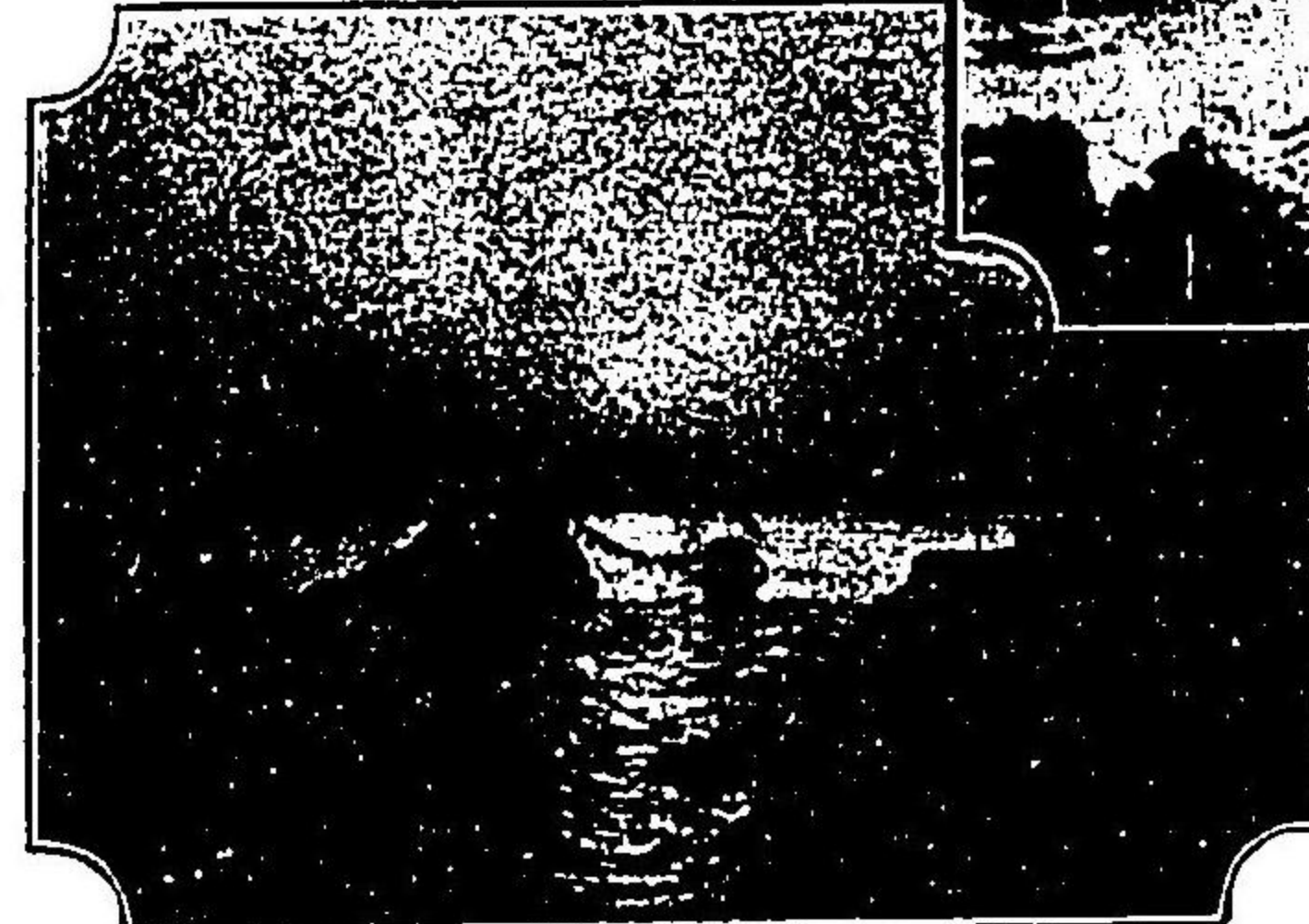
(賀加) 泉 溫代山



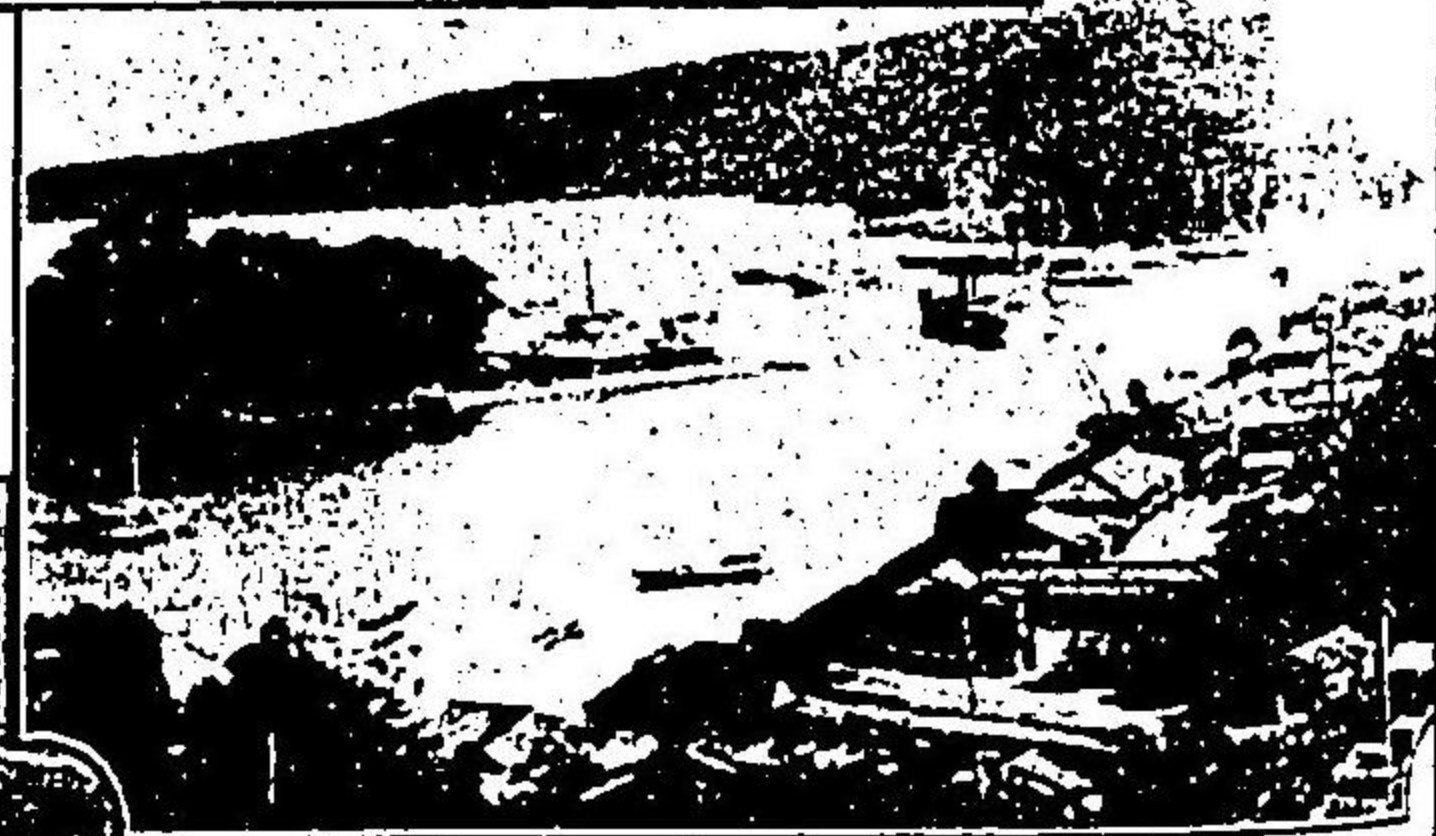
赤目四十八瀧の中  
鯉蛇瀧(伊賀)  
月ヶ瀬梅溪の中  
一丁目千本(伊賀)



皇大神宮  
外宮(伊勢)



(伊勢) 出の日の浦見ニ



望眺山和日港羽鳥  
(摩志)



北陸鐵道附近

行基作の藥師如來等を存するのみ。

●**柿山城址** 武生の西隣、波停車場より一里餘、是れ曾て南朝の忠臣瓜生保が、金ヶ崎の新田義貞と相援け、寡兵を以て足利の大兵を引き受け、更に兵を出して金ヶ崎城を救はんと欲して、大に苦戰したる有名の地なり。

●**福井市** 武生より鯖江、大土呂の二驛を過れば、越前の首府福井市に入る。福井は元と北ノ庄と呼び、天正中織田氏の將柴田勝家此地に封せられ、賤ヶ岳の激戰に敗れて城に籠り、同十一年四月二十四日城陥りて夫人と共に自盡したる所、後年徳川氏に至り、家康の子、結城宰相秀康を封じ、紀、尾、水之三親藩に次て、世々幕府の親藩にして、維新の前、外交多時の時、幕府内外の政務を總裁したる松平慶永、世に越前の春嶽公と呼べるは、此所の藩主なり。また當時有名の勤王家橋本左内も此藩出身なり。三十三萬石の舊城下、古來金澤、新潟に次ぎて、北陸道中有數の大都會、今も福井縣廳、地方裁判所、區裁判所、警察署、等の諸官衙あり。また九十一及九十二銀行、穀物會社、桑蔦會社等あり。足羽川市内を貫流し、九十九、幸の二橋を架し、市街を橋南と橋北とに分つ。戸數約一萬、人口約四萬二千、近年羽二重の産出多く、海外輸出の主要品と爲り、

商業ともに殷賑なり。明治三十五年春、大火あり、全市概ね焼失したるも、幾ばくも無くして舊形に復す。市内の最も繁華なる部分を大和上町、同下町、照手上町、九十九橋南通りと爲し、市の南端の丘陵を足羽山と稱し、市の公園なり。橋南の石場町と清水町とに登り口あり。路の左右には酒樓軒を連ね、山上には縣社足羽神社あり。山は高からざるも、登臨すれば全市を下瞰す。此地古來奉書袖、雲丹、油團、等を産し、近世に至り更に羽二重の産出多く、盛に海外に輸出せらる。旅館には足羽上町の五嶽樓、繩屋、菓子屋、照手上町の風月樓、烟草屋、佐佳枝中町の月見亭支店、佐久良中町の雀屋、幾代、矢尾作等を著名とし、宿料は一圓以下三十五錢許まであり。

藤島神社 新田左中將義貞を祀り、別格官幣社たり。祠は元と福井市の北端四丁の地にありしが、明治三十四年、足羽山の南方なる半腹に遷坐せらる。洪水の災を避けたるなり。元弘の役、義貞義兵を起して鎌倉を陥れ、北條氏を亡ぼして建武中興の功を奏す。既にして足利尊氏叛き、北朝の天子を擁立するに及び、官軍振はず、義貞は後醍醐帝の皇太子及皇子を奉じて北國に下り、義兵を集め、金ヶ崎に籠城す。足利の大軍來り攻め、防戦久しくして、竟に支ふる能はず。更に北に走り、正平四年七月足利高經の

兵と藤島に戦ひ、勝たず、流矢に中りて薨す。戦死の地は福井市を距ること北方約二十丁、西藤島村にあり。明治の朝に及び、正二位を贈られ、明治九年十一月新たに本社を創建せられ、後に今の地に遷坐せられたるなり。(口繪寫眞は遷坐前の藤島神社なり)

永平寺 禪宗曹洞派の總本山なり。福井市より四里、吉田郡の東南志比谷村大字志比、永平寺山の麓に在り、道元禪師の創建、寛元二年七月の開基にして、當初大佛寺と稱し、尋て寛元四年永平寺と改めたるは、後漢明帝の世、佛法始めて支那に入りたること年の年號に取るといふ。境内六千二百八十餘坪、正面勅使門の左右には高さ十丈餘の老杉茂り、抱圍二丈餘あり。境内の堂塔伽藍九十餘棟、其の建築坪數二千七百八十餘といふ。開基の禪師は明治十二年中承陽大師の諡號を賜はる。

大聖寺附近の温泉地

大聖寺町 越前より北陸道の國道を北に進み、熊坂峠を越て加賀國江沼町に入れば、大聖寺川は南方より流れ、大聖寺の市街を過ぎ、西に轉じ、加越の國境に至りて海に注ぐ。加能越三國の太守前田氏支封十万石の舊城下にて、市街は國道の衝に當り、東は金

澤市まで十三里半、西は福井市まで九里十三丁、兩市間の最も繁昌なる地なり。戸數二千五百餘、人口約一万、江沼郡役所、區裁判所、警察署、八十四銀行、九谷陶器會社等あり。九谷焼陶器と山中の漆器とを特産とし、旅館には、やた屋、はをり屋、桂花樓、等あり。宿料は四十錢乃至五十錢とす。此地より山中温泉まで三里、馬車鐵道あり。山代温泉へは一里二十丁といふ。

山中温泉 大聖寺川の上流、兩岸の山岳峭立して相迫る所に在り。温泉場の上流五丁の地、川に危橋を架し、蟋蟀橋と名け、橋下は巨巖の水中に横はる所、潭を爲して紺碧の水を湛へ、崖上茶店數戸あり。就て小酌し、潭中の魚を捕へて調理せしむるを得。温泉宿には、吉野屋、三谷屋、扇屋、龜屋、俵屋、泉屋、大藏屋、越中屋、等總て二十四戸あり。湯は中央に總湯槽ありて、何れの家も、皆な總湯に就て浴し、内湯無し。宿料は四十錢乃至一圓、大聖寺町にて販賣する山中漆器は、皆な此地の産なり。(口繪寫眞參照すべし)

山代温泉 山中温泉より西南一里十餘丁、動橋停車場よりは一里にして達す。故に金澤の方より來るものは、動橋にて下車するを利とす。温泉宿は、あら屋、くら屋の

二戸を巨壁とし、白銀屋、高谷、大野、吉野屋、等總て十八戸、浴舎の建築は山中よりも壯麗に、總湯の外、大なる浴舎は皆な自邸に浴槽あり。宿料は山代と大差なし。此地には九谷陶器の窯元あり、各地にて鬻ぐ九谷焼陶器は、概ね此所より産するなり。(口繪寫眞參照すべし)

片山津温泉 動橋驛の西北約一里、作見村大字片山津にあり。柴山湖の畔にある故風光佳なるも、浴舎の構造は山代山中に比して一籌を輸す。森本、湯出、辻、西野等六戸あり。宿料も前二所に比すれば廉に、三十五錢乃至七十錢許とす。二週日以上の滯泊には、浴客自ら米菜鹽噌を求めて自炊するを諾し、浴舎へは、唯だ室料と浴費を拂ふのみにて足るを得、故に眞に療養の爲にする者の爲には便利多し。

那谷寺(なたてら) 動橋驛より一里餘、江沼郡那谷村にあり、眞言宗の古刹にて、山の半腹なる巖石を穿ちて觀音堂を設け、境内には奇巖怪石多く、春は櫻花の雲を起し秋は紅葉の錦を織り、風景甚だ奇なり。寺を自生山巖谷寺と稱す。往昔花山法皇北陸に巡遊して、此地に詣て給ひ、西國三十三番の札所中、第一番の紀州那智と、第三十三番なる美濃の谷汲寺との腰を繋ぐるものと賞て、兩寺の一字づゝを取りて那谷寺と名け給

ふとぞ。(口繪寫真参照すべし)

小松町及其近傍

小松町 大聖寺と金澤の中間、國道の衝に當り、能美郡役所、警察署、區裁判所等の所在地にて、三千五百戸、一万五千許の人口ある市街、九谷焼、羽二重、蘭蓆、茶、生糸、銅等を産し、伊勢久、朝井屋、釜屋、待興樓、下徳、本折屋、圓屋、野田屋、駒屋、月津屋、松島、山二等の旅館あり。宿料は上等を一回とし、以下三十錢より七十錢までの間にあり。

安宅の古關址 文治年中、源義經、其兄頼朝の嫌疑を受け、装を變じて北國より奥州へ下るとき、之を物色する爲に關所を設けしめたる古蹟にて、世に武藏坊辨慶勸進帳を朗讀したりと傳ふるは乃ち此地なり。然ども古關址は後年海に没し、今は二三里の沖と爲るといふ。方今安宅の小市街は、小松驛より西北一里の海岸にあり。

三湖臺 小松町の西、約一里にある高丘なり。登臨すれば、今江瀉、木場瀉、及柴山瀉を一所に望み見るべく、眺望甚だ快濶なり。

白山の登臨

手取川 小松驛の北、鐵道は國道と、もに美川驛に至りて海岸を走る。時に一水東より流れて美川に至り、海に注ぐあり、之を手取川と爲す。水清くして水底の砂礫を數ふべく、白山々中より發し、延長二十餘里にして此に來る。川に長橋を架す、遠山の眺望、河中の垂綸、橋上の納涼、海邊の水浴、皆な可ならざる無し。地は美川驛より二三丁、驛に二三の旅舎あり。宿料は五十錢以上一圓五十錢までといふ。他の福井金澤等に比して不廉なるが如し。未だ同業の多からざるが爲なるべし。

白山は富士山に次て内國第二の高山なり。加賀、飛驒の二國に跨り、山脈は南方越前美濃に連なり、北方は遙かに能登に走る。旅客の越前加賀の國道を通過すると、東北群峯の上に傑出し、四時多く雪を戴くを見るは乃ち是。大御前岳を中央とし、北に大汝、劍ヶ峰、南に別山、三の峯の五峰を總稱す。大御前の絶頂には白山嶺山神社あり。大汝嶽には大己貴命、別山には大山祇命を祭る。舊時は何れも阿彌陀如來、觀世音等を安置したりしも、維新の後、神佛混淆を禁じて佛像を移し、神社と爲せるなり。一年の内

七月十八日より山を開き、九月一日を以て閉づ。其の前後は氣候寒冷にして登山する能はず。

白山に登るの路 四條あり。加賀の能美郡尾添村より尾添川に添ふて登るもの其一、同郡白峰村、市瀬温泉より登るもの其二、越前國大野郡石徹白川に添ふて廻り、石徹白村より登るもの其三、飛騨國大野郡平瀬村より登るもの其四なり。然れども白峰より登るを最も順路とす。白峰は、金澤より鶴來町を經、吉ノ谷、尾口、白峰、を通過し、加越の國境谷峠を越へ、越前の勝山町に通ずる縣道にて、金澤より白峰まで十三里三十一町なり。白峰より登ること十丁許にして市瀬温泉あり。此より登ること約三里にして室堂と名くる休泊所に達す。室堂の上は、山に草木無く、唯だ焦石の崔嵬たるのみ。之を攀ること八丁にして大御前の絶頂に達す。白山連峰中の最高所にて、海拔八千六百八十一尺、社殿の傍に、明治十五年内務省地理局建る所の測量標あり。大御前より下り、一たび室堂に歸り、更に別山に登るには、三里にして達す。中に六兵衛室と名くる休泊所あり。別山より市瀬温泉に下るには、絶頂より下方十丁許の平地に室の平の休泊所あり、之を別山の室堂と爲す。此所より左に向へば越前の石徹白に出て、右方に三の峯を

左として下れば、二里十丁にして市瀬に出づ。

白山々中の瀑布 白山々中より北方に流るものは、手取川と爲りて美川に注ぎ、西北越前に流るものは當初は石徹白川と爲り、油阪川を合せて九頭龍川と爲り、福井の北に至り日野川と合し、安居川と爲りて阪井港に注ぐ。而して手取川の水源は、深山中に數多の細流を合せ、各川の泉源瀑布多く、中にも丸石川の水、雄谷の千仞瀧は、高さ十五丈、幅一丈八尺、目附谷川の水、雌谷の二重瀧は、高さ十丈、幅一丈二尺、別山の龜瀧は二層となりて落ち、上層は高さ十八丈、下層は三十丈、幅各々二丈四尺、赤谷川の布引瀧は、高さ三百丈、幅一丈、正に銀河の九天より落ちるの觀あり。

金澤市

舊時前田氏百万石の大藩の城下、今は石川縣廳、第九師團司令部、地方裁判所、警察本署、第四高等學校、師範學校、中學校等の所在地として、北國第一の大都會、市街は東西約一里一丁、南北一里十三丁、戸數約一万八千六百、人口約九万七千、淺野川は市の西部を貫流し、東北に流れて河北湖に注ぎ、犀川は市の東部を貫流し、西北に流れて上

日 本 漫 遊 案 内

金石港に注ぎ、支流また市中に散布し、全市を通じて大小百四十餘の橋梁を架す。北陸道の國道は、舊城址の北方を繞りて市中を東西に貫き、沿道には西方有松町より泉新町、野町、片町、石浦町、南町、上堤町、下堤町、十間町、博勞町、尾張町、橋場町、森下町、金屋町、高道町、山ノ上町、春日町を経て大樋町まで、延長一里二十餘丁に及び、支道には南方に鶴來往還あり。北方に金石往還あり、全市を通じて町數五百三十餘、舊城址を中心として之を圍む。物産には羽二重、漆器、蒔繪、綿織物、九谷陶器、銅器、等にて、旅館には片町の大浦谷、十間町の淺田、毛利、住吉、上堤町の雨夜、瀉部、石浦町の白山屋、西町の一又、仙石町の高島、上松原町の源圓、十三間町の三由、殿町の竹田、上今町の森長、博勞町の堀部、梅本町の塚本等を著名と爲す。宿料は上等二圓五十錢より八十錢まで、並等六十錢より四十五錢まで、晝食一飯五十錢より十五錢までに分つ。また料理店には、殿町の殿待樓、野町の田舎樓、梅本町の一關亭、御歩町の花月庵、八幡町の山の尾、公園の三芳庵、古寺町の北間樓、鹽川町の白山樓、里見町の大野屋、味噌藏町の金城樓、野町の池龜、等を著名と爲す。遊廓は市内に三所あり、淺野川の東、愛宕町にあるを東廓、犀川の西、石坂町にあるを西廓、及北廓と稱す。東廓最も

北 陸 鐵 道 附 近

賑ふ。北陸鐵道は、市の西北を走り、停車場は市の北端に在り。金澤城址 當初尾山城と稱し、藩祖前田利家天正十一年に豊太閤より此の城を賜はり、舊居城能登の七尾より移り住み、其子利長に命じて大いに城池を擴張せしめ、始めて金澤城と改稱す。慶長三年利家致仕し、翌年利長封を嗣て以來、明治二年朝廷に奉還するまで、曾て敵の攻撃を受けたること無く、石垣高く濶深く、加能越の三國を領し、日本第一の大藩として、久しく北國の雄鎮たりし所、明治十四年火災あり、舊城は盡く焼け、今は僅に石川門のみ存するも、其の城内は、第九師團司令部と歩兵第七聯隊の兵營として、依然北陸の鎮臺たり。兼六公園 金澤城の東南、百間瀨を隔て、對岸に在り。水戸の借樂園、岡山の後樂園と共に、本邦の三大公園と稱せられ、東西四丁四十間、南北四丁十八間、面積二万三千五百九十八坪、茂林脩竹巧みに配置せられて、泉石亭榭其の間に散在し、能く人工を施して天然の景趣を失はず。春花、秋楓、納涼、觀雪、四時眺望の佳ならざる無し。是れ寛永年間、當時の藩主前田齊廣の改築したる庭園の跡にて、之を兼六と名けたるは、洛陽名園記に所謂宏大、幽邃、人力、蒼古、水泉、眺望の六勝を兼ねるとて、白河樂翁

公の命名するものと云ふ。

尾山神社 市内西町の高丘にある別格官幣社にて、藩祖前田利家及二世利長、三世利常三人の靈を祀る。此地は舊藩主齊泰の別邸ありし所、明治六年加能越三州の舊領地人民相謀りて神社を創建したるにて、境内の庭苑頗る美、山水竹樹の布置巧妙を極め、三層の神門は建築甚だ奇に、其の上層に登れば、市の中の一半は眼下に在り、神社と並びて金谷館あり、官民の倶楽部たり。建築は和洋兩風を兼ね。

河北瀨(かほくかた) 市の北端七ツ屋町より、粟ヶ崎街道を行けば一里半にして達す、蓮湖、粟崎湖、大瀨湖等の稱あり。周回約七里、下流は大野港に注ぐ。一面は田圃を隔て、蜿蜒たる連山に對し、一面は白砂青松の間、漁村點在し、風色太はだ佳、また湖中の白魚美味を以て名あり。

能登半島

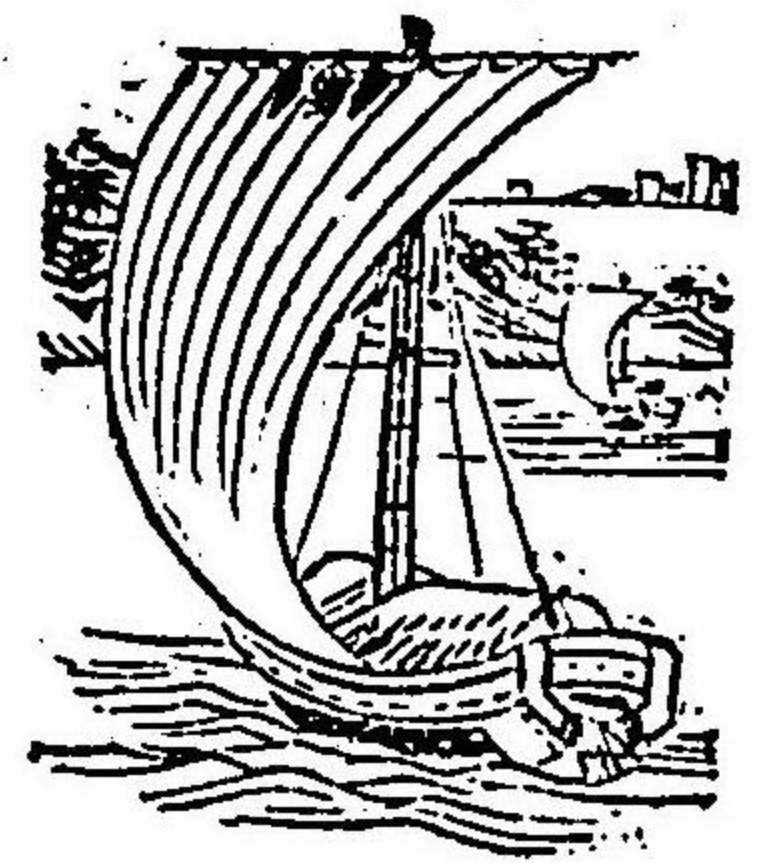
霜滿二軍營秋氣清、越山併得能州景と上杉謙信の咏したる能登は、加賀越中の兩國を根柢として、遙かに日本海中に斗出したる半島國にて、戸數約五万五千、人口約三十万

其の國の形は風折鳥帽子の如く、半島の東方能登灣内に能登島を擁し、大島小嶼散在して海灣出入する所、殊に奇勝多しと稱せらる。此國は北陸鐵道金澤驛の隣りなる津幡驛より、七尾鐵道接続し、初め半島の西岸を走り、中ごろより半島を斜めに横きり、東岸に出で、能登灣の南岸七尾港に達す。故に其地は僻なりと雖も往來は容易なり。また七尾より東方海岸に沿ふ縣道により、越中の氷見町を経て、伏木港にも通ずるを得べく、七尾より北は同國穴水村宇津津町を経て、飯田町に達し、南東は伏木、富山、より越後の直江津まで、日々二回發船する定期汽船あり。故に水陸ともに交通の便多し。

七尾町 能登國第一の都會にて、陸に七尾鐵道は北陸鐵道と連なり、海に共同汽船會社汽船は越中伏木に赴き、越中汽船會社と連絡して、直江津まで往來するあり。戸數約三千、人口一万二千餘、鹿島郡役所、警察署、區裁判所、中學校、商業學校、等の所在地に於て、明治三十二年以降開港場と爲り、露領浦潮斯德とは最も近く、僅に四百五十丸海里、二晝夜にして達す。故に、日露貿易の上に重視せられて、日本海線の定期航路發着所たり。町に能登銀行、七尾銀行、鹿島銀行、第十二銀行、等あり。旅館には、米田、宮木、輪島屋、阪上、小山屋、野崎、等あり。料理店に、松葉樓、館基樓、米五樓、

青梅櫻、紅葉軒、等あり。常盤町の遊廓は、青樓二十餘戸、藝妓を合せて二百餘名あり。此地明治二十八年四月二十九日大火あり、全町過半焼失し、數年を経て未だ舊形に復する能はざるは、土地に著大の物産無く、商工業の殷賑ならざるに由るべきも、海山の風景は遊賞すべきもの多し。氣候は冬季寒冷なるも、夏時は最も避暑に適す。

和倉温泉 七尾町の西北  
二里十五丁の海岸に在り。其地元と海中より温泉涌出せる故、涌浦と呼びしを、後に今の名に改めたるなりとぞ。巖谷一六翁會て此地に遊び、其高樓橋を連ね、海を隔て、能登島と相對し、其の東端の辨天島なる天女祠は、老松の間を圍まれ、殊に風景の美を加ふ。和倉と七尾の間、屏風崎は、海岸の巖岨峭立して恰かも屏風を立てたるが如く、其の前面の海中には、衝立島、机島、猿島、等、大島小嶼基布して、宛然陸前の松島の如く、島に戴く松は短くして松嶋の奇なきも、能登島の海波風



山園仍水抱、別開一乾坤、  
靈泉可延壽、何必問源  
と詠じたるは、能く其の景勝を盡せり。温泉宿二十八戸、

に激して、嶋嶼を吐吞する壯觀は、遙に松島の上にある。温泉は熱鍬泉にて、華氏百八十度、無色清澄にして異臭無く之を味へば鹽からさのみ。明治十三年獨逸の万国博覽會に出品して世界第三等の位地に推され、爾來名聲頓に擧がり、近來日々の浴客平均二百人を下ること無しといふ。温泉宿は、和歌崎、小泉、多田、小橋、等を領袖とす。(口繪寫真參照すべし)

總持寺 越前の永平寺と並びて曹洞宗本山の一なり、開山は圓明國師、元亨元年の創建にして、地は鳳至郡櫛比村大字門前にあり。寺域五千四百餘坪、總門を入り寶珠橋を渡れば、正面に勅使門あり。左右に練塀を繞らし、右に通用門、左に無常門あり。勅使門の次に樓門あり。佛殿はまた其の内の正面に峙ち、右に法堂、紫雲閣、接賓館、祥雲閣、茶所、大庫裡等あり。左に衆寮、東司、西堂寮等あり。背後に祠堂あり。傍らの峻阪を登れば傳燈院あり。首山、高雄山等は後に登え、堂宇の壯麗國內に冠たり。

九十九灣(つくもわん) 半島の最南端、珠洲郡の東南海岸小木村大字小木より同村大字越阪に至る間の海岸を云ふ。巖崖峭立して海灣屈曲し、水陸の出入、犬牙相錯り、小木に至りて僅に一小港を爲す。灣中に鶴落島あり。全島巖石より成り、上に桂樹叢生



し、其狀恰かも蓬萊山の畫の如く、風景最も奇なり。惜むべし地僻にして人の之を訪ふもの稀なりと云ふ。

高岡近傍

高岡市 加賀より俱利迦羅峠の國境を越へて越中に入れば、石動、福岡の兩町を経て、高岡市に達す。此地は官設鐵道の金澤より富山まで、市の東西に通ずる上に、中越鐵道は、北方伏木港より、高岡を経て南方城端町に達し、恰かも鐵道を以て十字形を爲す中央にあり。また小矢部川は、市の北端を流れて伏木港に注ぎ、水陸ともに運輸の便多く、戸數七千五百、人口三万二千餘、地方裁判所支部、高岡區裁判所、稅務署、警察署、市役所、射水郡役所等の諸官衙と、富山工藝學校、中學校、商業學校等あり。また中越鐵道會社、高岡米穀外四品取引所、中越漁船會社、高岡銀行、同立銀行、商業會議所等ありて、富山市に次て越中の大都會、商賈の旺盛は富山を凌駕す。物産には銅器を最とし、木綿染地、綿織物等を産し、旅館兼料理店には、大昌樓、梅松園、中清樓、木津樓、景望樓、春熙亭等あり。此地は慶長十四年前田利長加能越三州に主たること築

きて居る所、城址今は市の公園と爲る。此地より富山市まで五里二十八丁なり。中越鐵道 高岡市を起點とし、北は、能町驛を経て、伏木港まで四哩六鎮、南は戸出、油田、出町、高儀、福野、福光の諸驛を経て、城端町まで、十八哩五鎮の鐵道にて、越中の平野を貫通し、其間幾多の小市街を連珠の如くに接続す。

高岡公園 市の東隅の舊城址にて、一堆の高丘、松杉森然として茂り、周圍の城遺は依然たり。中に國幣中社射水神社あり。境内三千五百坪、園の内外に十勝あり、二上朝霞、公園盛花、深田採苗、中川杜月、小松原秋艸、古城地水鳥、立山晴雪、射水港運帆、高岡炊烟、社頭松風といふ。

瑞龍寺 高岡市の南八丁、射水郡下關村にあり。曹洞宗の巨刹にて、高岡山瑞龍寺と號す。加賀の大守前田利常、其の先世利長の爲に建立し、寺域四万歩、七堂完備し、建築の制は支那の臨安府万壽寺に模し、維新前までは毎歲前田家より吏を派して修繕せしめたる所なり。山門に登れば、北は庄川、小矢部川の二水蜿蜒として廣野を貫流して伏木港に注ぎ、港の東、有磯海には、漁舟の去來する眞帆片帆、白鷗の如くに浮び、東方には立山、劔ヶ峯の峻嶺、四時白雪を戴いて蒼穹を摩す。眺望雄偉、稀に見るの景な

本日漫遊案内

り。什寶には、前田利常寄附の十三佛の木像、後陽成帝の御宸翰、兆殿司筆達磨の圖、探幽筆観音の像、趙子昂書十三幅、其他織田信長、豊臣秀吉の手翰あり。  
伏木港 小矢部川と庄川の合流して海に注ぐ所。川の兩岸に市街あり。東岸を新湊町と爲し、西岸を伏木港と爲す。港は富山灣内の西端にて、西北方には能登半島屏風の如くに斗出し、東方は越中生地の岬に擁せられ、港内廣く、海底深く、日本海沿岸有数の良港なり。灣の海岸に沿ふて小市街多く、伏木以東には、新湊、四方、東岩瀬、西水橋、東水橋、滑川、魚津、生地の各町あり。伏木の西には、氷見、阿尾、宇波、女良の各町を経て、能登の七尾港に連なる。其中にて伏木港最も盛んに、港口に不動白色の燈臺あり。河岸に倉庫多く、實に越中の産米を輸出する唯一の咽喉にて、戸數一千七百餘、人口七千四百餘、日々に二回、東は直江津、西は七尾に汽船の往來するあり。其の貨錢は、伏木直江津間、中等一圓八十錢、下等一圓、伏木七尾間は、中等五十錢、下等三十錢、また日本郵船會社は、此地に支店を置き、西廻りの定期船は、往復ともに寄港す。其の海上の距離は、七尾へ七海里、東岩瀬へ八海里、直江津へ六十三海里、新湊へは百二十六海里、敦賀へも百二十海里なり。瓦、煉瓦、羽二重等を特産とし、旅館には井上

北陸鐵道附近

才忠、白池金次郎、家塚三右衛門、柴野平右衛門、料理には柳太樓、松木亭、大賀樓、高砂亭を著名と爲す。  
勝興寺 伏木町の中に在り。開山は、順德天皇第三の皇子彦成王にて、當初佐渡國雜太郡竹田村に創建せしを、後に此所に移したるにて、堂宇總て四十餘棟、境内八千四百餘坪、地は高丘を占め、西に二上山を負ひ、東南遙に立山を望み、北方伏木港に對して滄海に面す。國內稀に見るの巨刹、また稀に見るの景勝なり。  
有磯海 伏木町より西北一里半、太田、宮田の二村に亘れる近海の名にて、古歌に『いはして思ふ心ありその浪風に立つ白浪のよるぞわびし』と詠じたるは此所の謂なり。海岸には奇巖起伏し、中にも岩崎と稱する所、山脚海中に斗出し、風景甚だ佳なり。其の西北太田村の海濱に一の岩洞あり。巨石其上を蔽ふて、自ら屋を爲し、洞中數人を容るゝに足る。但俗之を義經雨ばらしの窟と稱し、義經主從奥州へ遁れ下るとき、暫らく雨を此の洞中に避けたりと傳ふ。  
二上山 伏木町の西、二上、守山、宮田、太田の四村に跨がる山にて、古來紅葉と月とを以て賞せられ、登臨すれば遙に佐渡に對し、伏木新湊の諸街脚下にあり。大伴家

持の「玉匣ふたかみ山に鳴く鳥の聲のこひしき時は來にけり」と詠したるは此地なり。

富 山 市

越中第一の都會、富山縣廳及び之に伴ふ諸官衙の所在地にて、戸數一万四千、人口六万と稱す。神通川遙かに飛驒山中より流れ來りて市の西端を流れ、東岩瀬に至りて海に注ぐ。此地は天正中神保某の城を築き、後に佐々成政の越中を領するに及びて大に修築したる所なり。後に成政豊臣氏に抗して克たず、終に亡ぶるに及び、加賀能登と共に、前田利家此地に封ぜられ、利家其孫利次をして居らしめ、爾來明治年間に至るまで、二百三十年間、前田氏世々に之に居る。十万石の城下なり。城址は、市の西北、神通川の岸に在り、四方に濠渠を繞らし、壘壁尙ほ存す。縣廳、縣會議事堂等は舊城址の内にあり。官設北陸鐵道は、市の西方二十七町、神通川を隔て、且つ近來新たに開鑿したる馳越川の西にあり。故に市より停車場に至るには神通、馳越の二大橋を渡らざる可らず。神通橋は、舊時六十四艘の舟を連ねたる舟橋なりしを、明治十五年に木橋と爲したるにて、馳越橋は、明治三十六年、新たに川を開鑿して架設したるなり。市は明治三十二年八月

十二日大火あり、全市殆ど焼け、數年を経るも未だ舊觀を復する能はざるも、電燈は全市に耀やき、外觀甚だ美なり。此地の物産は、古來賣藥を以て著はれ、反魂丹、熊膽圓、威應丸等、行商人を全國に派遣して廣く販賣す、一年の販賣額八十万圓に近しといふ。また漆器、建具、生糸、神通川の鮭、鱒、鮎等を特産とし、第十二、第四十七等の銀行あり。旅館には櫻木町の富山ホテル、旅籠町の木屋、高松屋、下條屋、平井屋、熊野屋、西四十物町の堀佐、總曲輪の守川、富山館、向川原町の伊原屋等あり。料理\*



商店は、櫻木町の古今樓、日新樓、水月樓、總曲輪の越川樓、万里軒(西洋料理)田舎庵、東新地の手枕庵、白石樓、梅月亭、北新町の八清樓、山王町の秋山亭、殿町の烏菊支店等あり。遊廓は、櫻木町と東新地とにあり。今富山市より各地への里程を擧れば、東京へ百八里二丁、加賀の金澤へ七十七里七丁、越後の新潟へ六十四里八丁、同國の直江津町へ三十二里四丁、越後の國境へ十四里七丁、魚津町へ六里七丁、高岡市へ五里二十八丁、東岩瀬町へ二里十二丁なり。(富山市地圖及口繪寫眞參照すべし)

立山の登臨

加賀越中の境に於て、白山々脈の俱利迦羅峠を越へ、越中に入てより、更に連峯の東南に重疊するを望む。而して其の群峯中に卓絶し、巍然として雲表に聳へ、四時白雪を戴くものを立山と爲す。其の山脈は、南は藥師岳、上ノ岳、高辻山に連なりて、更に信濃飛驒を境する諸山に接續し、北は大日岳に連なり、黒部川と片貝川兩流域の間に聳へ、下新川郡の海邊近き所まで走る。而して立山は、淨土山、雄山、大汝山、別山、劍岳の五峯より成り、此等連山の最高所にて、海拔九千三百尺、白山に次て北國屈指の高山なり。山上に縣社、雄山神社あり。舊時は多くの僧坊ありしも、維新後神佛混淆を禁じて以來盡く之を除きたり。此山も夏時參詣多し。

登山の順路 二路あり。其一是、越中の常願寺川に沿ひ、富山市の方より登るを表口とし、其二是、信濃の大町より、針の木峠を踰へ、黒部川に沿ふて登るを裏口と爲す。普通は表口よりす。今表口を案内せば、富山市の東南四里許にして常願寺川を渡り、上瀧村に至り、此れより川に沿ふて遡れば、東岸に布倉村大字岩藏寺あり。立山神社の

攝社を鎮坐す。之を立山の登り口とし、一の華表あり、雄山神社の扁額を掲ぐ、岩藏寺より常願寺川に沿ふてまた遡ること三里にして蘆藏寺に達す。古祠あり、俗に麓の宮と稱し、伊弉諾尊を祭る。此所は、登山者の宿泊して神祇を行ひ、中語と名くる常置案内者を雇ふ所、數多の寺坊あり。舊時立山は寺領なりしも、今は神佛の混淆を禁じ、雄山神社と定りて、寺領を離れたれば、寺坊は皆な旅舎を業とし、其の建築は壯大なり。中語は、米、味噌、鹽、途中の飲料水、提燈、小道具等まで、一切を準備して隨ふ。蘆藏寺より立山の室堂まで八里と稱す。途中に一里許り行き稱名川といふを渡れば小屋あり、茶と餅とを賣る。之を過れば材木阪とて玄武岩の恰も材木を倒したるが如きを見る。坂を登りて平地に出れば、熊玉權現の小祠あり。此邊の路は、常願寺川と稱名川の中間、馬背の如き山嶺を往く。而かも密樹路を挟みて天日を蔽ひ、道路に泥濘多し。行くこと二三里にして山毛樺阪、高野阪の二阪を攀ぢ、更に幅延二三里の廣野に出づ。彌陀ヶ原と稱し、海拔既に六千尺に近し。原野に珍奇なる艸花多く、恰も毛氈を敷くが如し。原を行くこと半ばを過ぎ、追分の岐路あり。一は立山温泉に、一は直ちに立山に、また一は一の谷巡りと云ふに通ず。一の谷、二の谷、ともに山間の溪谷、残雪堆積して、七月

未だ樹の芽を發せず。其他沿道の名所、稱名の瀧、鏡石など唯だ里程の目標のみ、目を樂しましむるもの無し。是より上、所々に雪あり。雪の消間には矮艸稍やく綠芽を發するあり。更に登ること二里許にして前面に室堂を望み見る。蘆藏寺より室堂まで約十二時間を要す。

地獄谷附近

室堂は海拔八千尺、粗末なる木造の小屋にて、周圍に岩塊を積み、長十五間、幅五間許なり。床ありと雖も障子建具無く、床の一方に爐を設くるのみ。夏時節官一人蘆藏寺より出張して在り。就て一宿を請ふなり。炊専用の水は、雪を溶かして用ふるに富士、御嶽と同一なり。四面多くは雪あり。夜間は寒氣肌を冒し、雨の日は、殆ど堪へ難き思ひあり。寒暖計は華氏の三十七八度を上下す。堂より八丁を隔て、地獄谷あり。早く室堂に着けば、日暮前に行て見るを得。其所に至るには、路の左右に翠ヶ池、御厨ヶ池の二池あり。水は碧にして藍の如し。附近は硫黄の真氣鼻を衝き、地上に穴あり。斷へず烟を噴き、地下には沸々沸騰の聲を聞く。湯屋地獄、鍛冶屋地獄、團子屋地獄、染物屋地獄などの名あり。或は湯の沸くが如く、或は鍛冶の吹子を吹くが如く、各其の聲または形によりて名く。眺望甚だ奇なるも、人をして震慄して近くを怖れしむ。

室堂の一宿、冷たき夢を荒屋の中に結び、翌早朝、前夜炊きたる半熟の冷飯に腹を充たし、中語に導かれて發し、急阪を攀ぢ、殘雪を踏み、半里許の急阪、一時間許にて淨土山の絶頂に達す。

山嶺の眺望

淨土山の山嶺に至れば、小洞あり。先づ之を拜し、微しく下りて雄山に移る。淨土山より約半里、傾斜更に急に、一ノ越より五ノ越まで、岩を削りて成せる階段を攀ぢ、頂上に至れば本社にて、木造の小洞、周圍に石を繞らし、中に手力雄命大己貴命を祭る。是れ立山の最高所なり。境内神聖にして、參詣者は皆な五ノ越にて草鞋を脱ぎ、帽を脱して近づく。參拜の後、山頂に立ち、眸を放てば、前面に大蓮華、小蓮華、劔ヶ峯、白馬嶽、南に藥師嶽、槍ヶ嶽、乗鞍嶽、明神嶽を望み、遙に木曾の御嶽、駒ヶ岳に對し、東に戸隠山、妙高山、燒山、淺間山、白根山、東南に信濃の八ヶ岳、立科山、甲斐の明石岳、駒ヶ岳、國師嶽、西には白山を望み、富士もまた雲際に見ゆ。太平洋より日本海に通じ、日本中部に於ける高山は、盡く眼界に入る。壯快言ふ可らず。雄山より横に曲りて、峰の巔を頻りに北方に行けば、大汝山と別山と連なり、崎嶇凸凹なる巖角を踏むこと一里半許にして別山に達す。また木造の小洞あり。劔ヶ峰は谷を隔

て、相對し、溪間には、千秋不滅の積雪を存し、毫も塵に汚れず、雪を踏んで行けば、下方の地に接する所、溶解して洞窟を爲し、歩行危険なる所多し。故に行く者稀なり。  
立山温泉 歸路は、別山より雪上を歩し、地獄谷の傍へ下り、室堂に歸り、更に下れば其日の中に立山温泉に達すべし。温泉は常願寺川の水源、淨土山の西南なる谷底にあり。室堂より來路を下ること二里、追分に達し、彌陀ヶ原を南へ往き、立山本道なる馬背の如き嶺上を歩し、下り盡せば乃ち温泉にして、硫化水素の氣は、山間に充滿す。温泉宿は僅に一軒、浴客は皆な米と味噌とを携へ、浴舎の販ぐ所、駄菓子、草鞋等の外に一物も無きなり。地は海拔五千尺、山間には積雪存し、人は盛暑も綿入の羽織を着る。  
歸路 立山温泉より富山まで歸路十一里、上瀧まで約八里、其間五里は常願寺川に沿ひ、仰いて前日登りたる山毛樺阪、高野阪などを見れば、屏風の上を行きしかと疑はる。下流に至れば、本宮、松ノ木、原などの小村落を過ぎ、岩倉、上瀧邊まで歸れば、逢ふ人ごとく無事に御登山を済まして目出度しと賀す。豪家の少年にして登山する者あるときは、家人は馬を曳き、祝酒を携へ、岩倉まで出て、迎ひ、少年は赤旗を翻し、意氣揚々として歸郷するを例とす。此時後方に立山を顧みれば、深く前山の爲に蔽はれ、

峰頭をも見出す能はざるなり。

越中越後間の交通

越中の富山まで、官設北陸鐵道西より通じ、越後の直江津までは、南より官設信越鐵道通じ、東より私設北越鐵道通ずるも、富山直江津間の三十二里八丁は、中斷せられて未だ鐵道の便無く、僅に海路日々二回直江津より神通河口の東岩瀬町を経て、伏木七尾の各港に往來する汽船ありて、旅客を運送するのみ、晩秋より首夏に至るまで、北海の風浪險惡にして、一年の中、一半は航行を停む。故に其間富直間の往來は、陸路に由るの外無し。而して此間の國道は、往昔前田侯の江戸に參觀したる往還なるも、封建の世には、往來の不便を以て要害と爲し、之を改修せざりし爲めに、有名なる親不知の險も、久しく之を存し、維新後新道を開きて、僅に往來の危険を免るゝに至りしも、未だ沿道に著大の都會無し。富山より以北、越中にては新庄、水橋、滑川、魚津、三日市、入臈、泊の小市街あり。越後に入りては、市振、糸魚川、能生、名立の各町ありて、直江津に達するも、魚津と糸魚川を除けば、特に記すべきもの少なし。其間また河流多く、富山

市の神通川以北、常願寺川、早月川、片貝川、黒部川等は、平時は帯の如き細流なるも、一たび猛雨あれば、激浪沿々田野に横流し、咆吼怒吼、巨巖大石を轉ばし、河幅數丁に及ぶ。故に川ごとに長橋を架し、早月、片貝、黒部の各川、及越後の姫川は、橋の長さ各三百間乃至四百間に及ぶ。是れ富山直江津間鐵道の、當然敷設せざる可らずして、未だ敷設せられざる所以なるべし。

魚津町 越中國下新川郡役所、警察署、區裁判所の所在地、戸數三千四百、人口一万四千餘の大市街、漆器と珊瑚蝦とを産し、其地日本海に濱し、毎年春夏の候、水蒸汽の多き頃には、海上に屋氣樓の生ずるを見るといふ。日夕伏木直江津間を往來する汽船の寄港する所なり。

親不知の險 越中越後の國境、境村にて橋を渡り、半里にして市振驛あり。海岸の漁村、之を過れば青海驛まで四里八丁の間、山勢海に迫りて所々懸崖を爲し、北海の狂濤山腹を打て、雪山を頽すが如き所を親不知といふ。古來國道は海濱に沿ふて通じ、旅客は海波の退くときを覗みて走り、海波來れば逃れて山腹の巖穴に避るなり。故に其の走るや親子互に救ふ能はず、是れ親不知、子不知の名ある所以、然とも明治十六年以

降、國道は山の半腹を穿ちて通じ、昔日の危険は山上より望み見て過ぐ。往時最も危険なりし所には、頭上の山腹なる崖を磨して、如砥如矢の四大文字を刻す。當時の縣知事が、新道成るの日、來り臨みて書したるものといふ。(口繪寫眞参照すべし)

糸魚川町 越中國境より直江津まで十八里の間、第一の都會、戸數千二百、人口約六千、西頸城郡役所、警察署等あり。陸には能生、名立、直江津まで乗合馬車あり。海には直江津、伏木間を往來する汽船の發着するあり。また此地より信州松本まで二十八里、縣道通じ、姫川の水源に沿ふて廻り、七里にして國境を越へ、大町を経て松本に達す。人力車を通ずべし。此地より長野市へも直江津を経て二十八里なり。町の西端の姫川は源を信州より發し、此に至りて海に注ぐ。平時細流なるも、一旦暴漲するときは、怒濤東山より西山の間に氾濫す。故に川に架する姫川橋は、其長さ四百間、遠く望めば蛟龍の水を渡るが如し。旅館は數戸あるも、早川屋を巨擘とす、宿料は上等一圓二十五錢以下數種あり。

糸魚川以東 直江津までの十三里は、山を南にして日本海の岸を走り、途中に早川と能生川とを渡れば能生町に達す。此間三里。町の東端に權現祠あり。海に面し、祠前

の海中に數個の巨巖横はり、巖上小祠あり、權現岩と稱し、海岸數株の松は、海風に壓せられて姿跡怪奇、其の景愛すべし。能生より三里にして名立川を渡れば名立町。また瀬海の一驛、之を過れば島首崎の山腹を攀ぢ、國道は隧道の中を通ず。岬を廻りて東方三里に、郷津の小灣あり。曾て直江津に代へて築港せんと企てられたる所、灣内の狭きと、陸岸の環繞少き爲に、良港たるの望無きが如し。此所より直江津まで僅に一里。

五智の國分寺 郷津の東十數町にして、國府村に國分寺あり。また天平年間聖武帝阿彌陀、藥師、五如來の大佛像を安置し、日々參詣者群集する所なり。此地より高田町へ二里、直江津へ三十町なり。

の勅を奉じて、僧行基の創建する所、往時は堂宇壯麗を極め、中世廢頽し、今は舊觀無しと雖も、尙ほ本堂、三重塔、經藏、二王門、親鸞堂等あり。本堂には、大日、寶生、釋迦、



三重近傍

名古屋城の金の鯨を後ろにし、官設東海道鐵道と直角形に岐れ、關西鐵道に依て西南に走り、庄内川、揖斐川、木曾川等の長橋を渡り、桑名、四日市を経て龜山に至れば、鐵道は、更に三叉形を爲し、西に走るものは伊賀を越へて奈良、京都、大阪に通じ、南に走るものは津を経て、參宮鐵道に接続し、兩大神宮に至る。伊勢、伊賀二州の勝區は、略ぼ此等の鐵道を以て貫通せらる。兩大神宮以南、志摩の沿岸は、また兩宮參拜の序を以て巡覽するを便と爲す。故に今は名古屋より舊東海道を案内し、次に伊賀越、次に參宮街道を案内し、最後に志摩沿岸に及ぼさんと欲す。

舊東海道

東海道鐵道と稱するも、熱田以西は舊時の所謂東海道往還と離れ、岐阜に至りて中仙道と合するなり。舊時の東海道は、宮(熱田)より海上七里を船にて渡り桑名に上陸し、四日市より追分を経て、龜山、關(以上伊勢)土山、水口、三雲、石部を過ぎ、艸津(以



上近江)に至り、中仙道と合するにて、今は關西鐵道は之に沿ふて通ず。また古來の參宮街道は、追分より東海道に分れ、神戸、白子の兩驛を経て、津に至り、更に松阪を経て山田、宇治に至るなり。今は關西參宮兩鐵道ありて、宮、桑名間は、舟行七里の心配も無く、神戸、白子は捷徑ながら、四日市より龜山を迂回して、津に赴くを普通とす。故に以下主として鐵道に沿ふて案内すべし。

桑名近傍 官設鐵道の名古屋驛に隣りして、關西鐵道の愛知驛あり。名古屋大阪間は官設關西兩鐵道併行し、互に競争しつつある故、關西は官設の停車場を使用せず、別に停車場を設けて愛知驛と名け、官設の名古屋と相接す。此所を去て庄内川鐵橋を渡れば、五哩餘にして蟹江驛を經、更に五哩許にして彌富驛に達す。此の兩驛は尾張に屬し、彌富の西、木曾川を渡れば伊勢に入る。

彌富驛 は、木曾川の東岸にあり。川の中心を尾勢兩國の境と爲し、驛は戸數約六百の一村落ながら、此所より同國一ノ宮まで、尾西鐵道の短距離線あり。其の一驛なる津島町より八丁許に

津島神社 ありて、弘仁九年嵯峨天皇の勅によりて創建し、素戔嗚尊外十神を祀れ

る縣社にて、毎年陰曆六月十四十五兩日の祭禮は、大船に山車を乗せ、之を天王川に浮べ、數百の小舟之を圍み、十四日の夜には無數の大提灯を掲げて河中を漕ぎ上り、十五日には船上に大人形を飾り、宮殿様の屋臺を据へ、錦繡を以て満船を装ひ、笛鼓相和し、頗る壯觀を極め、日本有數の祭禮と稱せらる。

桑名町 彌富の西、延長二千八百四十八呎(約八丁)の木曾川大鐵橋を渡り、伊勢國桑名郡に入て、長島驛に立寄り、更に西に去ること約十丁にして、また延長三千二百六十二呎(約九丁)の大鐵橋を渡れば、即ち桑名町にて、舊時松平氏十一万石の城下、現今四千の戸數と一万八千五百の人口を有し、古來米穀取引の盛んなる全國有數たり。町は大河に沿ふて伊勢の海に臨み、水運の便多く、商業甚だ隆昌なり。舊城址は揖斐川に沿ひ、三面市街を繞らし、東海道の雄鎮たり。徳川氏の老中として賢宰相の名高き樂翁公は、此所の藩主なりき。今は桑名郡役所、警察署、第四區土木監督公營所、商業會議所、桑名商業銀行、桑名銀行、紡績會社、倉庫會社、米穀株式取引所等あり。名物は時雨蛤、白魚、桑名盆等にて、旅館兼料理店には、船津屋(眺景樓)あり。專業の旅館は、京屋、丸一、鍵治、料理店は柿八、吞景樓等あり。

四日市市 桑名より伊勢の海の西岸に沿ひ、鐵道は南に走りて富田驛を經、四日市市に達す。四日市は、伊勢は津で有つと言はれたる津市をも凌ぐほど、今は北伊勢第一の都會、戸數約四千五百、人口約三万、港灣水深く、海運頗る盛んに、日本郵船會社汽船は、横濱より此所まで隔日に一回、大阪商船會社汽船は、大阪より紀州沿岸を經て此所より熱田まで、毎日一回の定期航海ある外に、社外線の出入も甚だ多く、明治廿二年特別輸出港と爲り、次で特別輸出入港に編入せられ、卅二年には開港場と爲り、日本郵船會社も支店を此所に置き、商工業の盛なる三重縣第一たり。汽船賃は、横濱へ上等六圓、中等四圓、並等二圓、熱田へ中等二十五錢、津へ二十錢、神社へ參拾五錢、鳥羽へ四十五錢、尾鷲へ一圓六十五錢、木の本へ二圓五錢なり。四日市區裁判所、大阪税關出張所、稅務署、警察署、燈臺局、市役所、商業會議所、市立商業學校、同高等女學校等の外、四日市銀行、關西鐵道會社、三重紡績會社、四日市電燈會社、四日市製紙會社、四日市米油株式取引所等ありて、万古燒、種油、綿糸、洋紙等を物産とし、旅館には料理を兼ねる松茂樓、吉高屋、十九村屋、山田屋、東京亭、料理店には、八百茂、茂竹庵、佐野屋等あり。

河原田驛 四日市以西、舊東海道は海岸を離れ、内部川を渡りて河原田に至れば、道路は參宮街道と東海道の兩岐と爲る。而して參宮街道は、また海に沿ふて、神戸、白子の兩市街を經、津市に達するも、關西鐵道は、河原田より舊東海道により加佐登(舊稱高宮)を經て龜山に至り、津線を分岐して津に至るが爲に、旅客は多く鐵道により、今は神戸、白子とも參宮旅客稀なるに至れり。河原田より神戸まで約一里、白子まで約二里なり。

龜山町 是れ乃ち關西鐵道の名古屋大阪(湊町)線と、津線との分岐する所にて、舊時東海道五十三驛中の一驛、石川氏六万石の舊城下、現時戸數一千六百餘、人口七千八百餘にて、方今舊城址は公園と爲り、鈴鹿川の流れを眼下に囑み、風景甚だ佳なり。龜山より約一里に能褒野神社あり。日本武尊の御陵にして鈴鹿郡川崎村大字田村字名越に在り。老松古杉森然境内を掩ひ、社殿の結構頗る莊嚴なり。尊の御陵墓は、白鳥の陵と稱へ、神社の傍にあり。尊東國を裁定して、凱旋し給ふの歸途、此所に薨じ給へる事蹟は正史に詳かなり。龜山より一里半の

關町 是往昔鈴鹿の關の在りし所。美濃の不破關、越前の愛知關ともにも、日本の

三關と稱せらる。實に上古東北より京都に入るには、必ず此等三關の何れか一を過ぎざれば能はざりしなり。また此所は、古來東海道と伊賀街道及西國よりの參宮街道の會して三叉形を爲す所にて、舊東海道は、此所より阪ノ下、木山、水口、三雲、石部を経て艸津に至り、中仙道に合し、伊賀街道は、此所より加太、柘植を経て、上野より大和に入り、笠置、奈良に通ずるなり。町は七百餘の戸數と四千餘の人口あり。關西鐵道は、鈴鹿峠の險路を避け、西方柘植に至りて始めて艸津線と大阪線を分岐す。關停車場より四丁の大字新所に、有名なる地藏院あり。寺は天平十三年僧行基の艸創にて、本尊の地藏は、一休和尚の開眼なり。參宮の途次參詣する者多し。

柘植驛

關驛より加太驛を経て、柘植に至れば、乃ち鐵道は三叉形を爲し、艸津線は此所より分岐す。此地は俳聖芭蕉の出生地にて、碑は驛より約十丁の地にあり。此所にて艸津線に乗り替へ、數多の隧道を潜りて近江に入り、山間を走ること約七哩にして深川を經、更に一哩許にして貴生川驛に達す。

貴生川驛

山間の一小驛、特記すべきこと少なきも、近江鐵道は此所より起りて彦根の間に通じ、沿道に水口、日野の兩市街を貫通す。爲に旅客の昇降する者多し。

三雲及石部 貴生川以西、舊東海道には三雲、石部の二驛を経て、艸津に達す。各舊時五十三驛の一にて、今に關西鐵道の停車場あるも、特記すべきもの稀なり。斯くして柘植より二十二哩四十九鎖にして、艸津に達し、此所に東海東山兩道を合す。艸津以西は、既に東海道の下に説きたれば贅せず。

上野近傍

上野町 柘植驛より直ちに西方に汽車は伊賀川に沿ふて走れば、佐那具驛を経て上野に達す。是れ伊賀國第一の都會、舊時津藩主藤堂氏の分城ありし所、方今戸數三千五百、人口一万八千を有し、演劇講談等に有名なる伊賀越の復讐とて、寛永十一年中、渡邊數馬が荒木又右衛門の助けを假り、父の仇河合又五郎を討ちたる鍵屋の辻は、上野町より西方二十丁の伊賀街道にあり。舊城址の天守臺は、今は公園と爲り、園内櫻樹多く、花時の眺望頗る佳なり。町に阿山郡役所、區裁判所、警察署、稅務署等あり。伊賀焼の陶器、松茸、砂糖漬、菓子等を特産とし、旅館には曾我忠、八百新、西澤、三田清等あり。料理店に榮樂亭、伊勢の家、東雲、喜樂亭等あり。劇場には、旭座、大江座あり。

伊賀國第二の都會たる名張町へは、南方五里、乗合馬車往復す。

名張町と赤目の瀧

名張は大和地方より伊勢參詣の要路にして、名張川に臨める一都會なるも、近來殊に赤目の四十八瀧を以て著はる。瀧は名張より二里、瀧川村大字長阪の山中にあり。山麓の延壽院まで人力車を通ず。院より溪澗に沿ひ、紆餘曲折して登ること二丁にして、行者瀧に達す。是より奥、飛瀑甚だ多く、靈蛇ヶ瀧、不動瀑、千手の瀧、布引瀧、瀧壺の潭、毘盧遮那瀧、延壽ヶ瀧、藤釣瀧、弁瀧、伶人瀧行者反瀧、



張町に到り、此所に一泊し、翌日早天に宿を出て、案内者を雇ふて山に登らば、終日全溪を跋渉し、飽まで飛瀑の奇景と満山の蒼翠とを賞して、其日の中に名張町に歸るを得べし。(口繪寫眞參照すべし)

月ヶ瀧梅溪 上野の西四里、島ヶ原驛より二里にして、日本第一の梅林月ヶ瀧に到る可し。其所に赴く者、東よりするには上野より赴き、西よりするには、島ヶ原より赴くを便とす。ともに馬車人力車の便あり。地は伊賀大和の國境、尾山、石打、長引、桃香野、月ヶ瀧、遅瀧、廣瀧、嵩、白樫、治田の諸村に跨り、境域二里に亘る。世人總稱して月ヶ瀧といふ。名張川を挾さむ兩岸は、山上も、溪澗も、盡く梅樹ならざる無く、満山總て是れ銀世界、其の最も眺望の廣き所を一目千本と稱す。若し小舟を清流に浮べ、兩岸の花影を水上に映しつゝ、棹させば、身は銀世界の清香中に入て、羅浮の仙と化し去るかと思ふ。梅の最も多きを月ヶ瀧、尾山、桃香野の三村と爲し、三地とも旅館、料理店各數戸あり、中にも月ヶ瀧の騎鶴樓、吟香館、香雲亭、桃香野の百香館、雲中庵等最も賑ふ。(口繪寫眞參照すべし)

月ヶ瀧梅溪 上野の西四里、島ヶ原驛より二里にして、日本第一の梅林月ヶ瀧に到る可し。其所に赴く者、東よりするには上野より赴き、西よりするには、島ヶ原より赴くを便とす。ともに馬車人力車の便あり。地は伊賀大和の國境、尾山、石打、長引、桃香野、月ヶ瀧、遅瀧、廣瀧、嵩、白樫、治田の諸村に跨り、境域二里に亘る。世人總稱して月ヶ瀧といふ。名張川を挾さむ兩岸は、山上も、溪澗も、盡く梅樹ならざる無く、満山總て是れ銀世界、其の最も眺望の廣き所を一目千本と稱す。若し小舟を清流に浮べ、兩岸の花影を水上に映しつゝ、棹させば、身は銀世界の清香中に入て、羅浮の仙と化し去るかと思ふ。梅の最も多きを月ヶ瀧、尾山、桃香野の三村と爲し、三地とも旅館、料理店各數戸あり、中にも月ヶ瀧の騎鶴樓、吟香館、香雲亭、桃香野の百香館、雲中庵等最も賑ふ。(口繪寫眞參照すべし)

月ヶ瀧以西、名張川は山城に流れ、伊賀川を合せ、木津川と爲て大阪に注ぐ。また島ヶ原停車場より汽車は西に走り、大川原の大隧道(一千二百九十六呎)を過れば、忽ち山城に入り、笠置山の古戰場を経て、奈良に至る。然とも笠置以西の勝區は、本書の下巻に於て之を案内すべければ、今は更に轉じて津市より宇治山田に向ひ、參宮街道を案内すべし。

津市近傍

津市 關西鐵道龜山驛にて、津線に乗り替へ、南に走り、下ノ庄、一身田の二驛を過れば、津に着す。津は關西參宮兩鐵道の接続する所、龜山より津を経て兩大神宮の鎮座まします宇治山田町までは、兩會社の流車直通し、其間に乗替を要せず。津は藤堂氏三十五万石の舊城下にて、岩田川は市を横ぎりて西より東に流れ河口阿漕浦に臨みて贊岐港を擁し、安濃川は市の北を流れ、三重縣廳、地方裁判所、同區裁判所、小林區署、稅務署、警察署、郵便電信局、測候所、市役所、商業會議所等を初とし、師範學校、中學校、高等女學校、三重農行銀行、津電燈會社、津米穀株式取引所等の外、銀行會社多く、新聞紙は伊勢新聞、三重新聞の二あり。阿漕燒陶磁器、茄子團扇、津縹子等を特産とし、戸數六千五百、人口三万五千を有する一都會、街衢整然、富商薈を列ね、眞に是れ古來「伊勢の津か、津の伊勢か」と歌はれるは故無きにあらず。舊城址は本丸と西丸との石壘を存し、東丸は老樹繁茂して、舊濠依然之を圍む。濠中蓮多く、花候の眺め甚だ美なり。城門の北を京口門、西を伊賀口門、南を中島門と稱し、東は海に面す。各門

の内を丸ノ内と稱し、中に高山神社あり、瀧祖藤堂高虎を祭る。また舊時藤堂氏の別業、安濃川に臨むものを公園と爲す。津停車場の西三丁に在り。天然の丘陵に園藝の妙工を加へ、泉水を瀦し、櫻楓、躑躅を雜へ植ゑ、花時の眺望頗る佳、頂上傘の臺に上れば伊勢海を下瞰して、遙に知多半島と相對す。旅館には料理を兼ねる大觀亭、聽潮館、魚爲の外、林屋、國分屋、若六、松阪屋、鍋屋、櫻水樓等あり。多くは停車場の前に支店を設け、其の設備略ぼ遺憾なし。停車場より東方約十五丁許の海濱は、一帯の白砂青松相連り、海水清くして遠淺に、甚だ海水浴に適す。千鳥館、魚庄、朝日館、ことぶき等の旅館兼料理店ありて、海水浴の客を待つ。また遊廓は贊崎と藤枝との兩所に在り。(津市地圖參照すべし)

觀音寺 津市の中央大門町にあり。眞言宗にて、藤堂氏累世の菩提所なり。本尊は如意輪觀音の石像にて、縁起によれば、和銅二年、阿漕浦にて漁夫の網に入りて得たるものといふ。本堂、仁王門等の結構頗る宏大にて、境内には各種の興行物、茶店等軒を連ね、遊客日夜群集し、市内最も賑ふ所と爲す。劇場階座、寄席花園座、境座、勸工場の商榮館、津商品陳列所等皆な此所にあり。

一身田 津市の北方二哩許の一驛にて、眞宗高田派の本山、高田専修寺は、停車場の前に在り。全國に末寺六百二十五ヶ寺を有し、見眞大師の開基にて、慈覺大師自作一刀三禮の阿彌陀佛を本尊とし、報恩講、千部會、讚佛會、彼岸會等には、信徒の參詣夥多しきなり。

參宮鐵道 津市にて關西鐵道と接続して起り、終端の山田まで二十六哩十鎖の間、伊勢の海の西岸に沿ひ、其間、阿漕、高茶屋、六軒、松阪、徳和、相可、田丸、宮川、筋向の各驛を経て、兩宮鎮座の山田町に達す。其間松阪町には説く可きことあり。

松阪町 は參宮街道中最も繁華なる市街、現今戸數三千餘、人口一万三千餘あり。北は伊勢の海の要津を控へ、南は紀伊大和の二國に通ずる要衝に當り、古來松阪木綿の産地として名高く、日本の金穴三井家の祖先も此地の出身なり。公園あり舊城址にて、城は元龜年間北畠氏の築きたるもの、後年蒲生氏郷之に居り、徳川氏の世、紀州藩の所領に屬す。故に公園の最高所には、紀藩祖頼宣を祭る南龍神社あり。公園の下には、本居神社あり。是れ近世國學家の泰斗贈正四位本居宣長を祀るなり。宣長は、松阪の人、享保十五年に生れ、享和元年に卒し、享年七十二歳、其の「敷島の大神心を人とは朝日

に句ふやまさくらはな』の歌最も廣く人口に膾炙す。墓は松阪町の西南山室山の巔に在り、此地の旅館には、山川ホテル、回春樓、棒屋等あり。料理店には廣月樓、菜花樓、滿喜樓等あり。此地を去て南に走り、宮川の長橋(千四百三十五呎)を渡り、筋向橋を過ぎ、山田驛に下車すれば、宇治山田町の北端に入る。

兩宮參拜

宇治山田町 懸け巻くも綾に忍こき天照皇太神、豊受大神の二柱の大神の鎮座まします宇治山田町は、神風の伊勢の國度會郡、宮川の南、五十鈴川の北なる間に長く連なり、戸數六千六百、人口三万一千四百餘の大市街、舊時は内宮領に屬する宇治郷と、外宮領に屬する山田郷と、全たく區別せられ、中間の間の山を以て境界と爲したりしも、明治二十三年兩市街を合併して、宇治山田町と改稱し、今は市坊の數三十許あり。神宮司廳、度會郡役所、區裁判所、警察署等もあるも、市街は主として參宮旅客を以て存立し、旅館、料理店、妓樓等最も多く、旅館の有名なるは、古市の油屋、麻吉、尾上町の藤屋、十文字屋、松島館、八日市場の與可樓、外宮前の神風館、宇仁館、高千穂館、一志久保

本日漫遊案内

の吸震園等あり。また虎尾山頂の五二會館は、内外紳士の宴會と旅館とを兼ねる一大ホテルにて、登臨すれば近くは宇治山田町の全景より、神社港、大湊港を下瞰し、遠くは伊勢灣に枕み、眺望甚だ快濶なり。料理は、與可樓、麻吉、吸震の三旅館之を兼ねる外に、新道の戸田屋、古市の芳村等あり。妓樓には、備前屋、杉本屋を巨擘とし、伊勢音頭の踊りにて名高く、福岡貢の十人斬りにて芝居に有名なる油屋は、其盛を此等の諸樓に凌駕したるも、今は旅館を専業とす。此地の土産として、參宮者の購ひ歸るは、稻木の壺屋擬草紙製烟草入れ、朝熊山野間氏製の万金丹なり。何れも數戸の贖物店あり。名は同じきも本店の品に比すれば劣ること數等なれば、購ふ人は注意すべし。

●外宮 宇治山田町に到着したる後、急かぬ旅人は、一泊して翌朝兩宮の參拜に赴くを普通とし、急ぐ者は山田停車場の前に軒を列ぬる各旅館の支店を選び、行李を托して直ちに參拜に向ふも可なり。順路は内宮外宮何れを先にするも隨意ながら、道順は外宮を先とするを便とす。是れ外宮は停車場より五丁許にて、内宮は更に一里餘なればなり。今は外宮より案内せんに、停車場より外宮の表見張所前までは人力車に乗るを得。此所より車馬の通行禁止なれば、車を下りて一ノ華表橋を渡り、右方に樟の老樹を見て、數

度七十三百

度八十三百

度九十三百

度十四百

度一十四百

度二十四百

度三十四百

# 新撰日本

島大

島

渡

日

高

島小

津

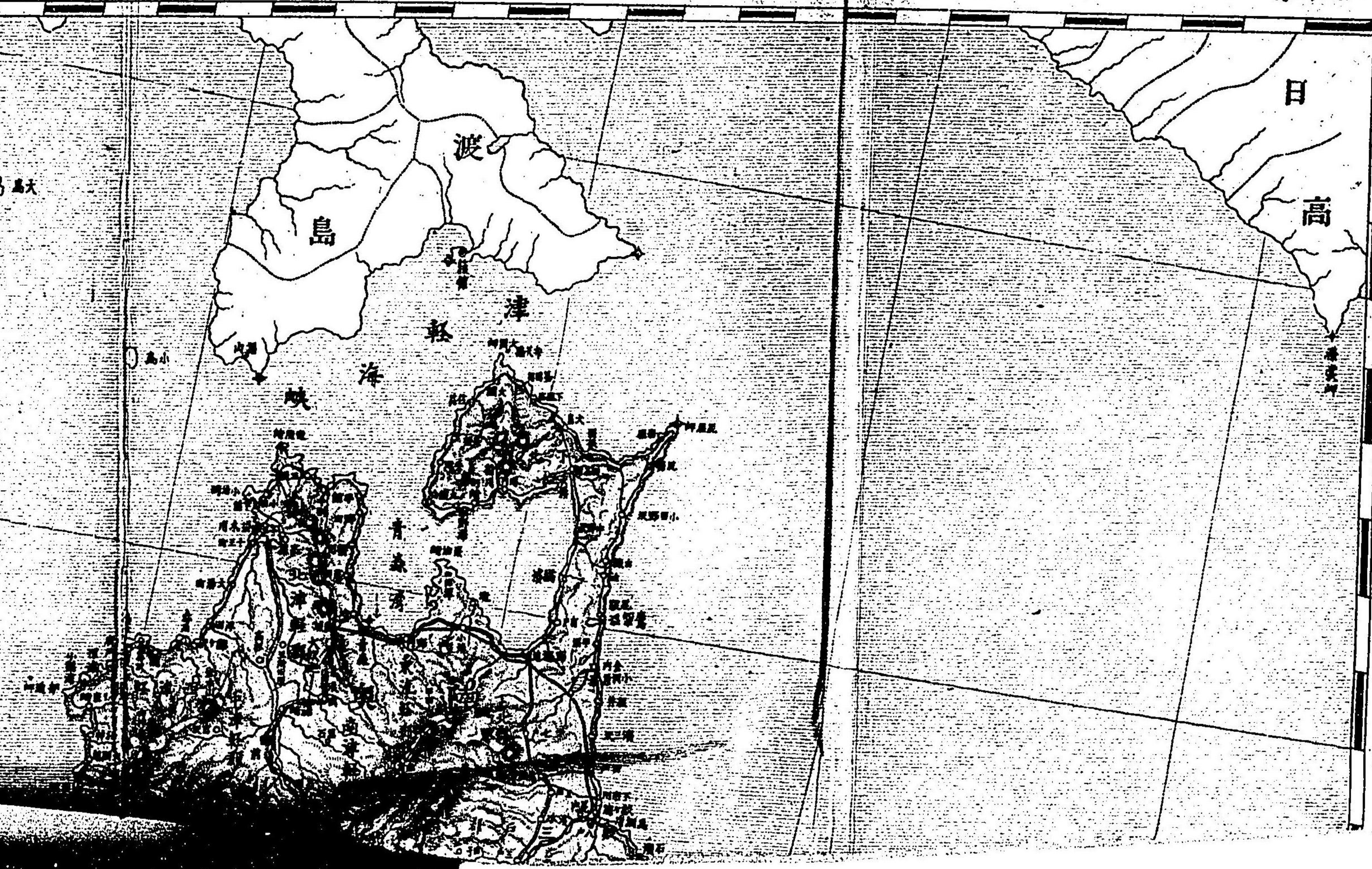
松

峽

青

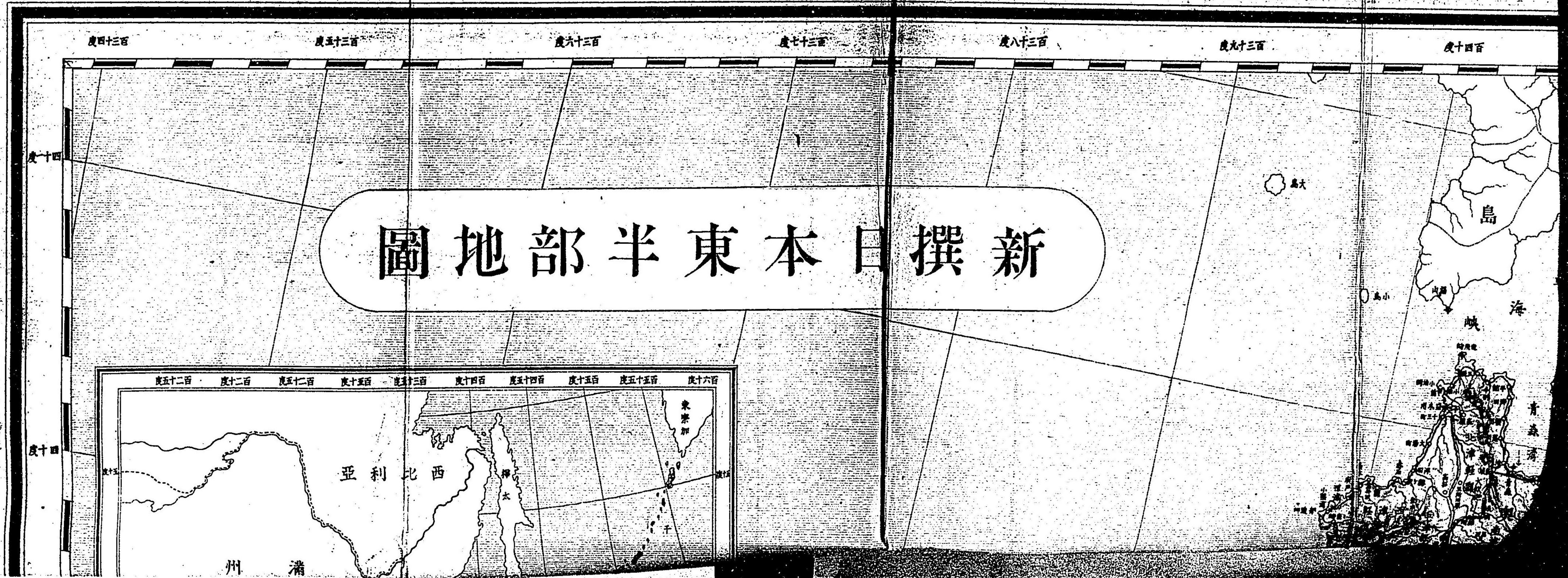
度十四

度十四

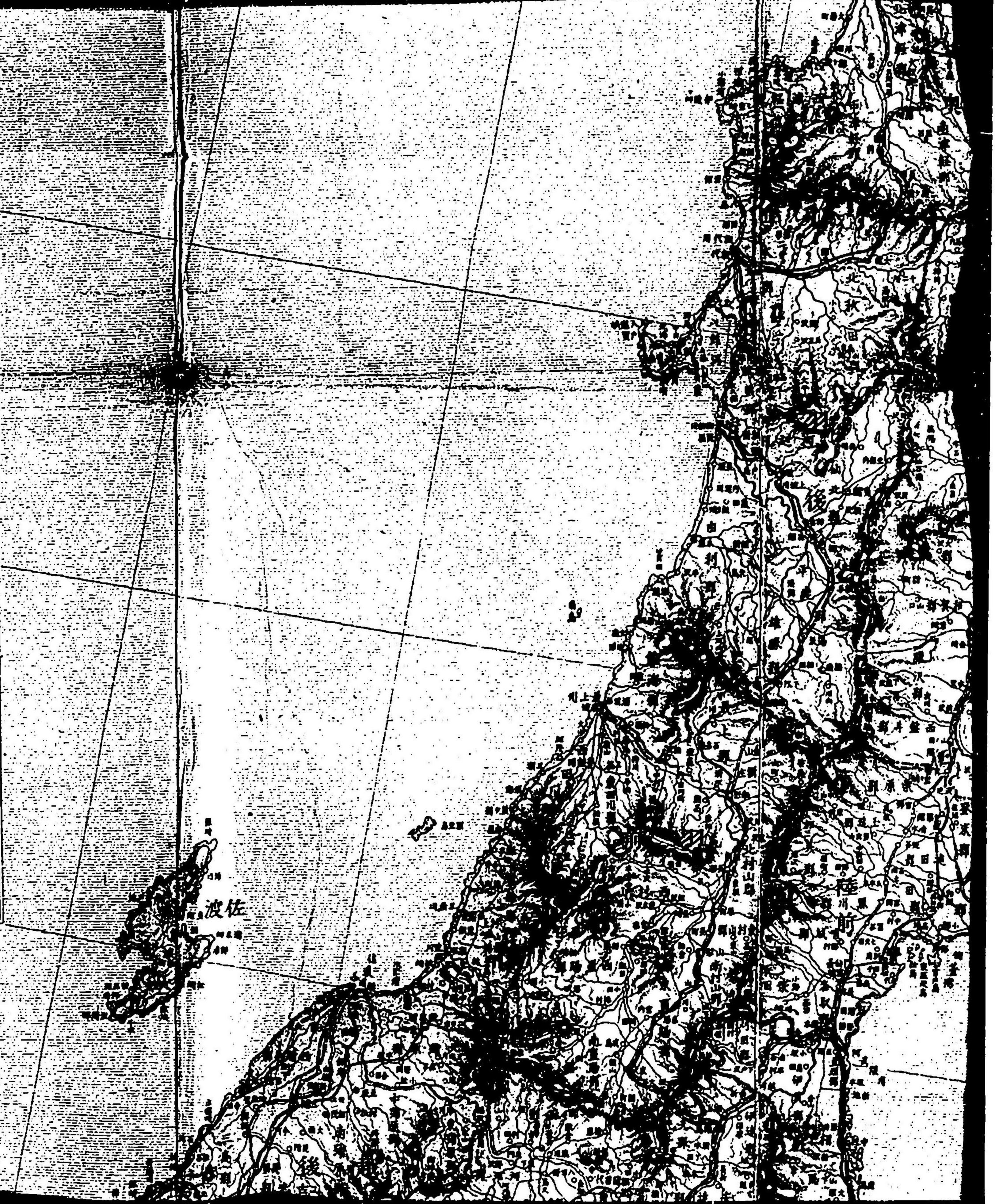
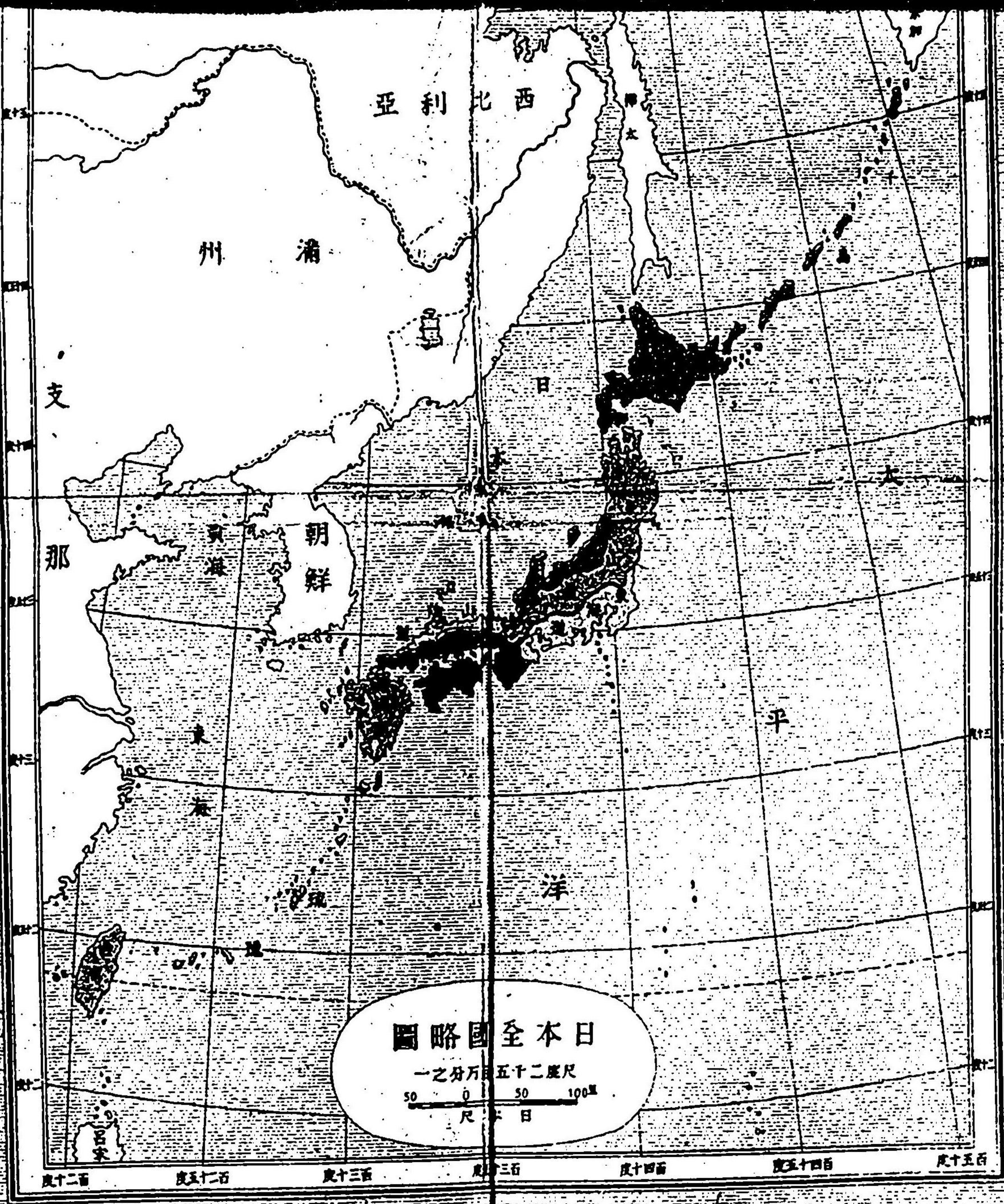


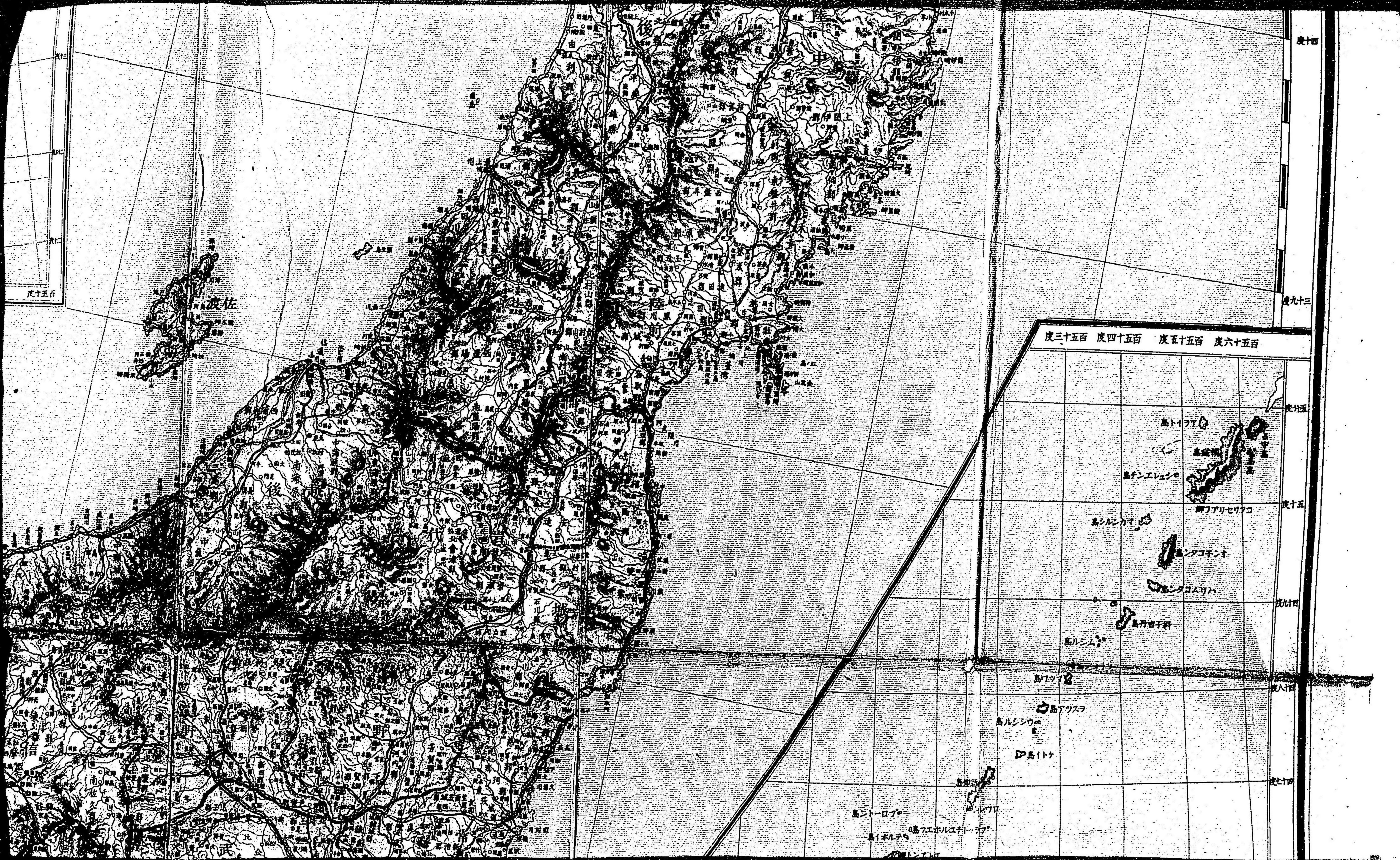


# 新撰日本東半部地圖









度十四

度九十三

度三十五百 度四十五百 度五十五百 度六十五百

度十五

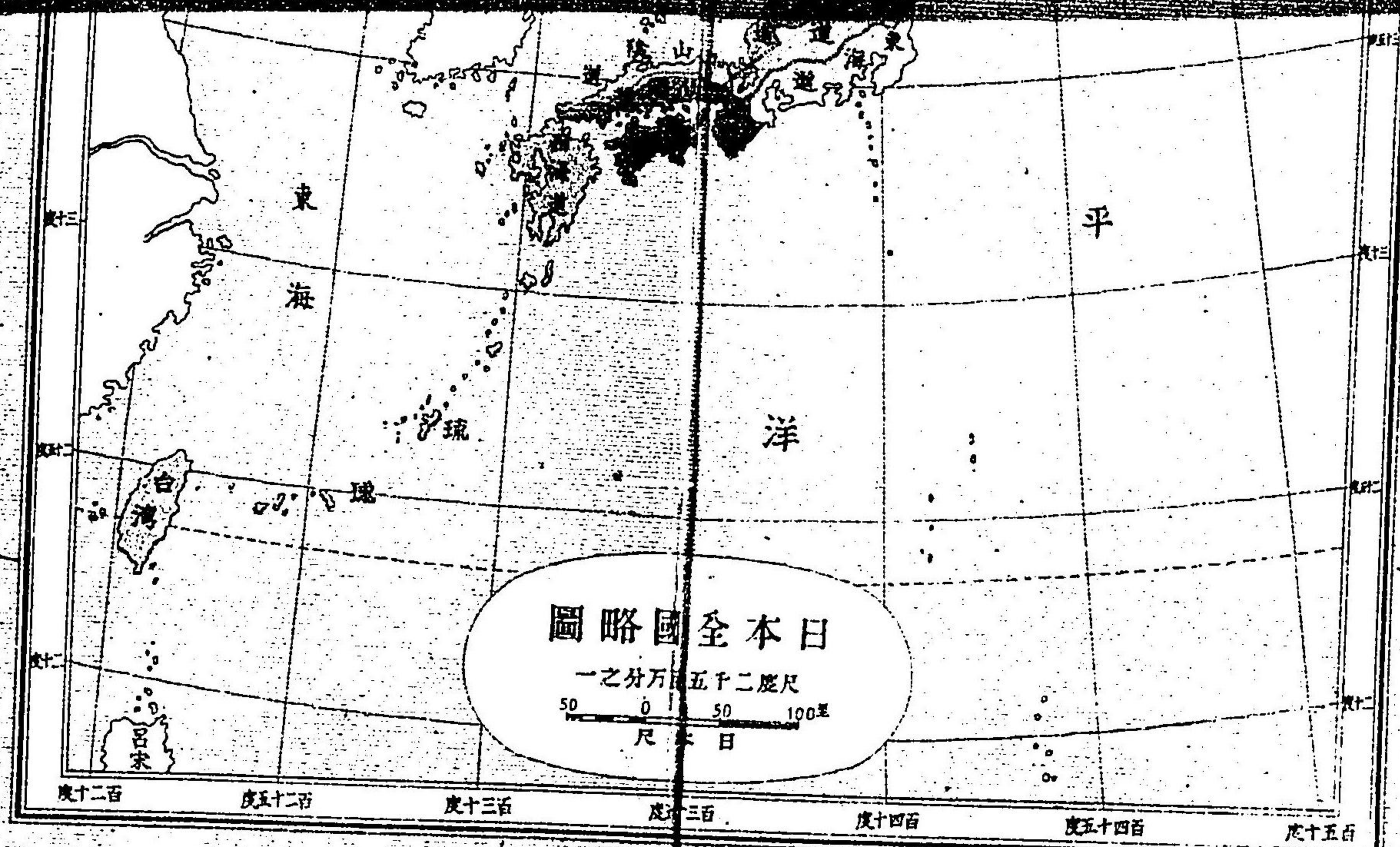
度十五

度十四

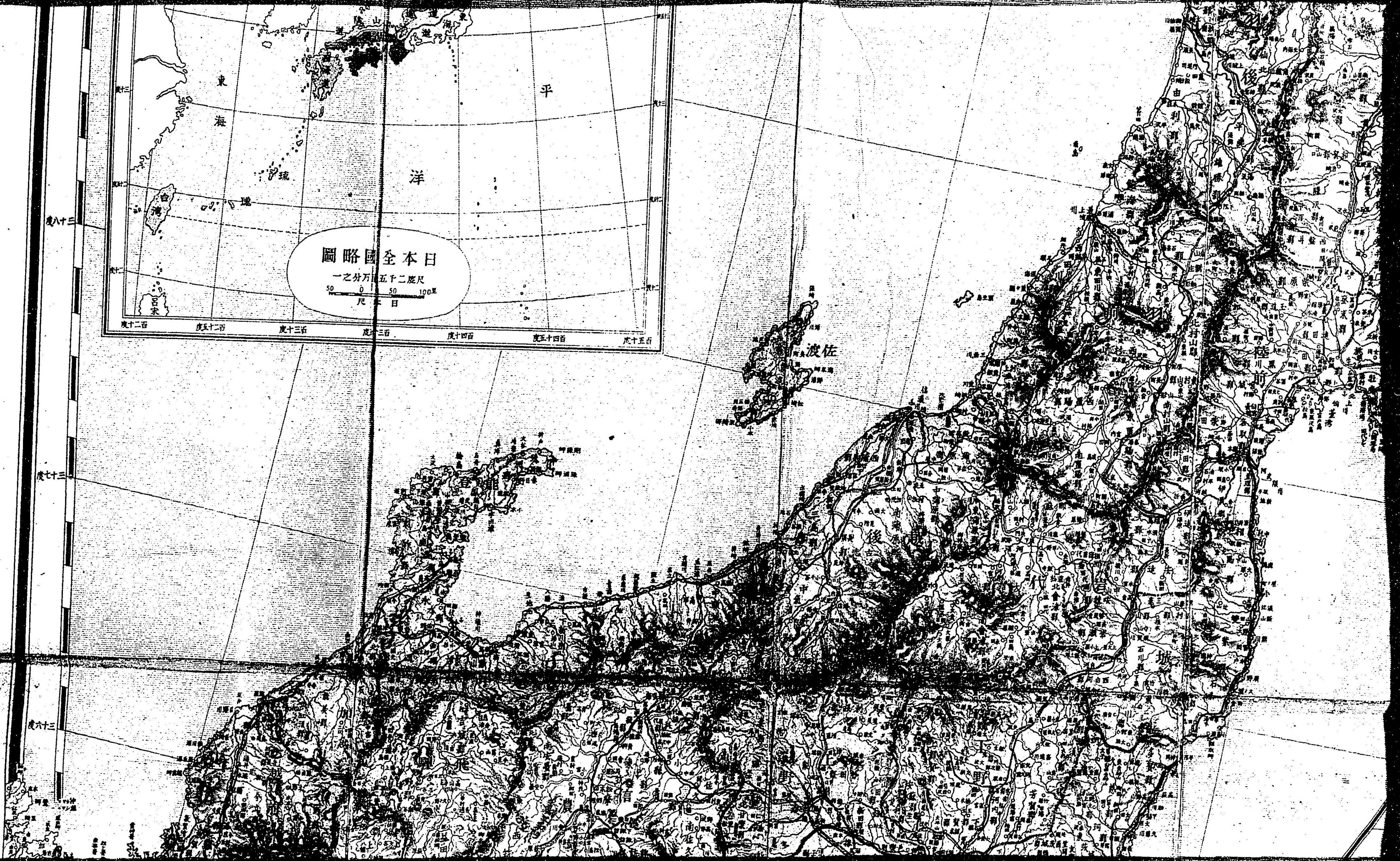
度十四

度十四

- 島トイラア
- 島チンエレス
- 島シリシマ
- 島アフリセワカ
- 島クゴキ
- 島クゴム
- 島カサ
- 島シム
- 島アツ
- 島アツ
- 島シマ
- 島トケ
- 島トロー
- 島ホル
- 島ホル
- 島ホル



日本全國略圖  
一之分万五千二百尺  
尺本日

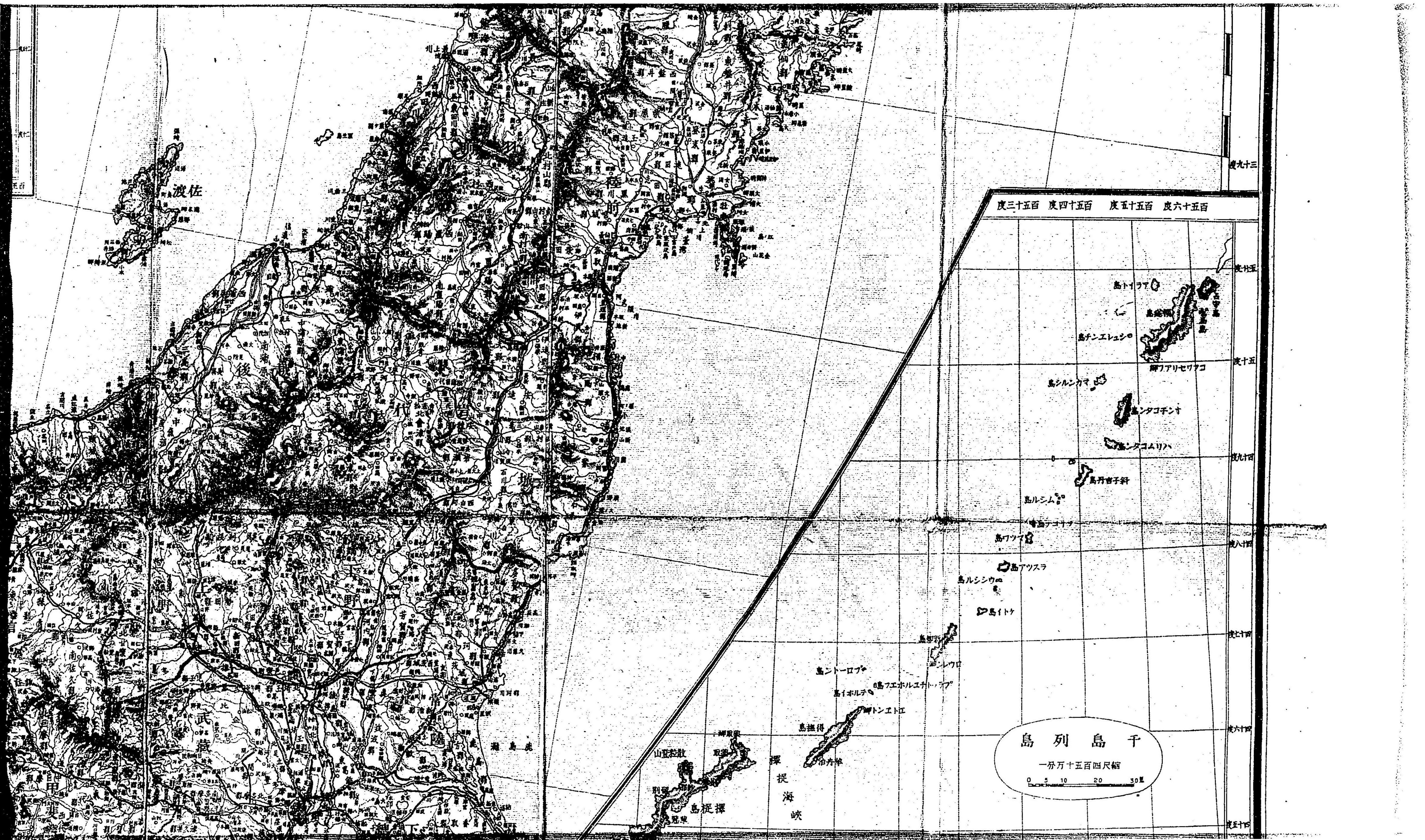


度八十三

度七十三

度六十三

波佐



度九十三

度三十五百 度四十五百 度五十五百 度六十五百

度十五

度十五

度十四

度十四

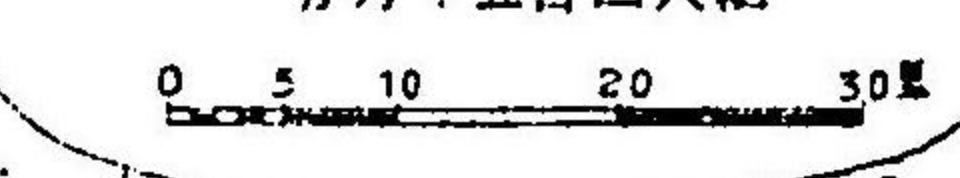
度十四

度十四

度十四

千島列島

一分万十五百四尺縮



海峽

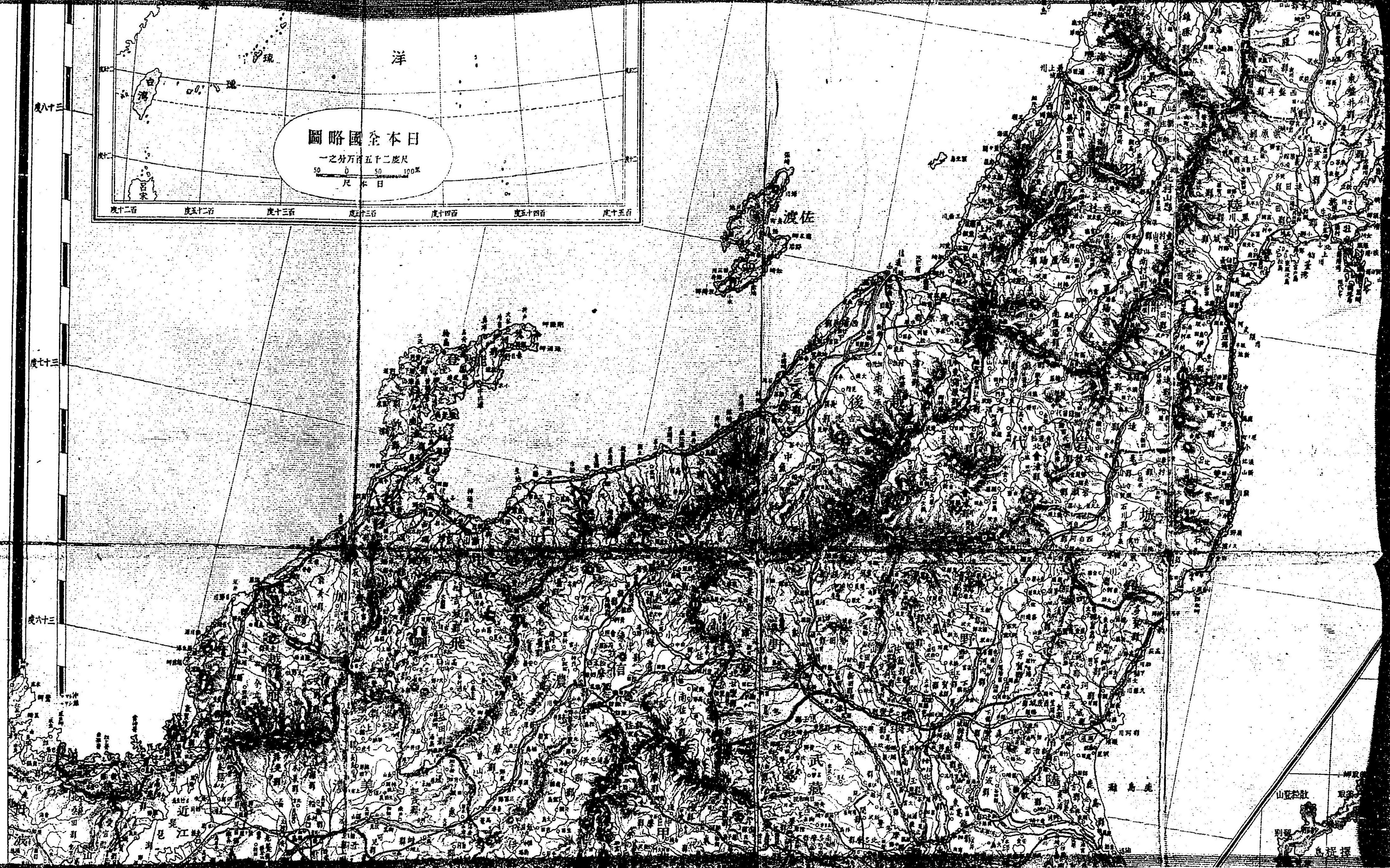
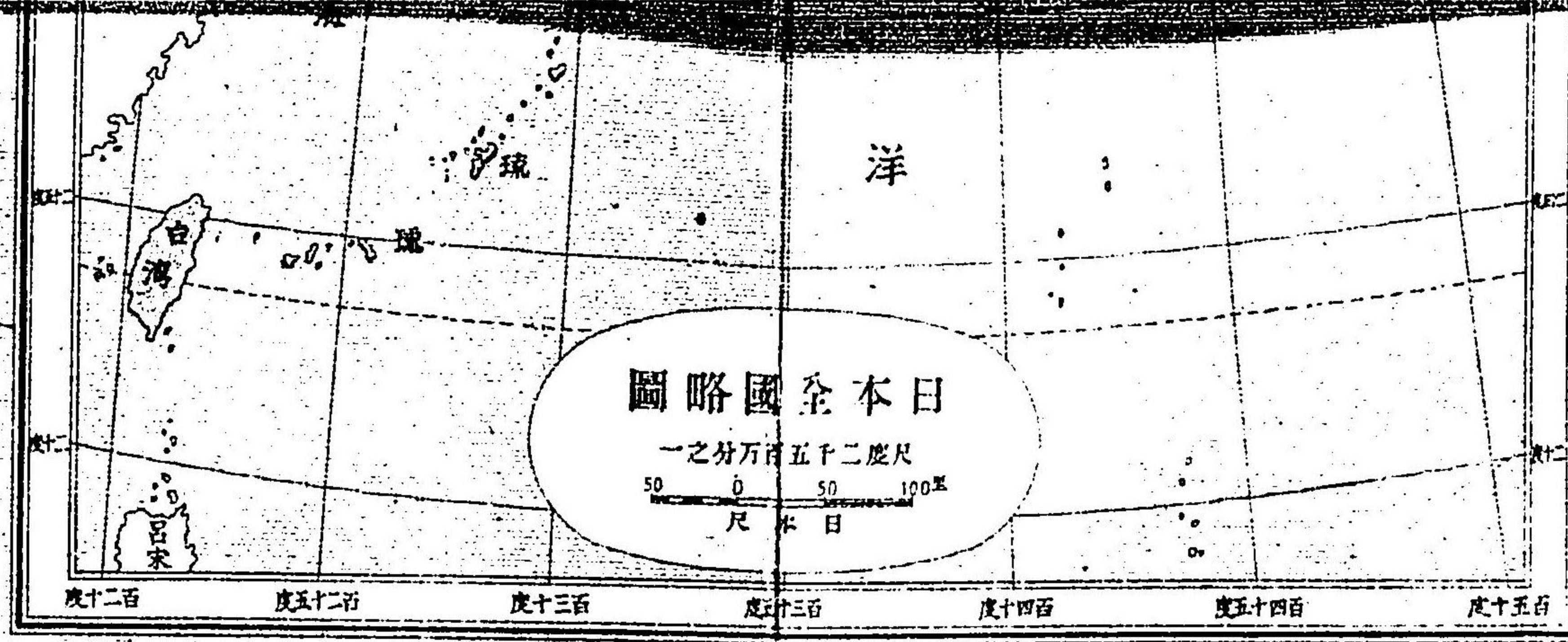
山登松散  
島根  
島根

波佐

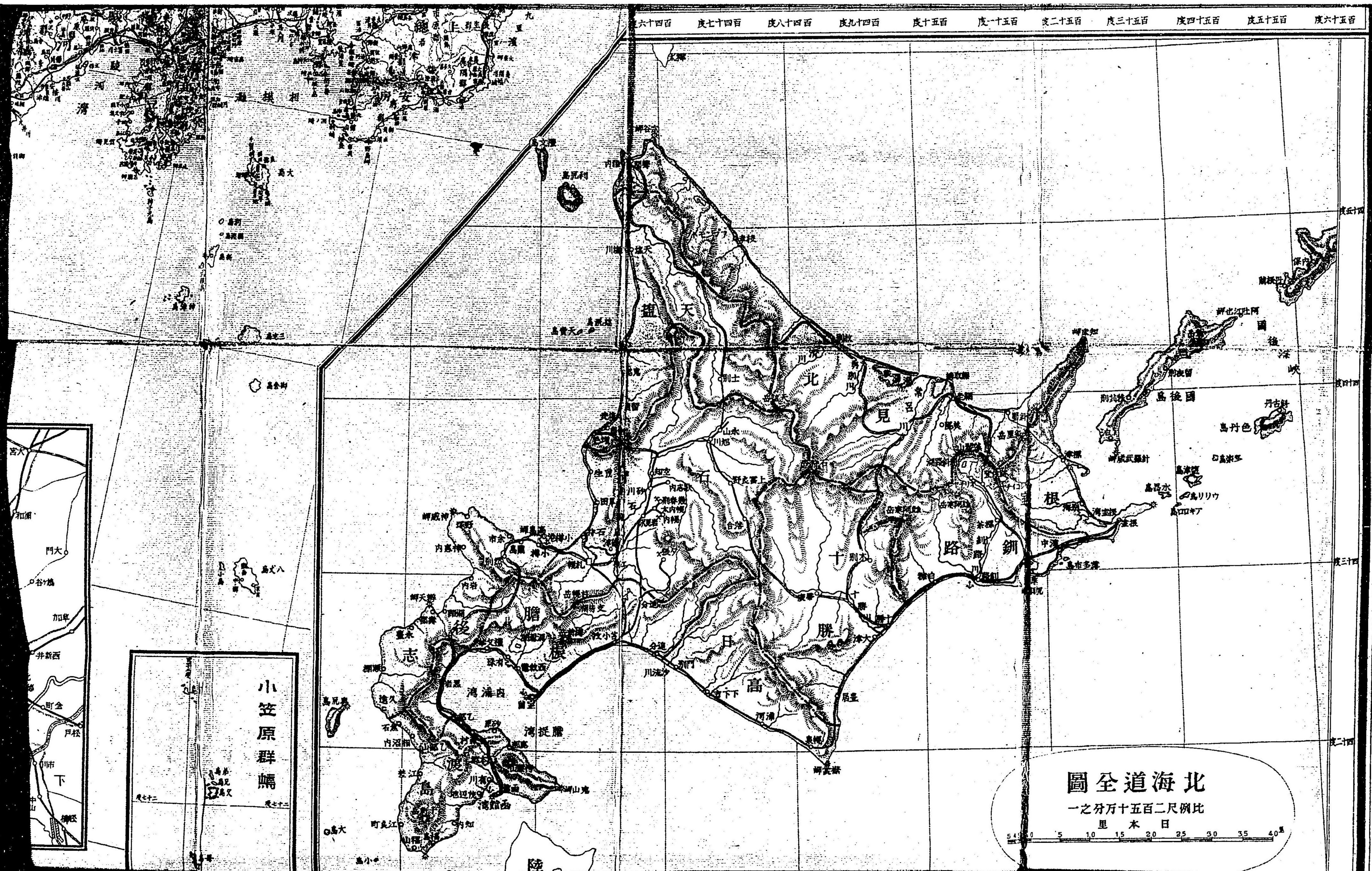
後

武藏

度百



度六十四百 度七十四百 度八十四百 度九十四百 度十五百 度一十五百 度二十五百 度三十五百 度四十五百 度五十五百 度六十五百

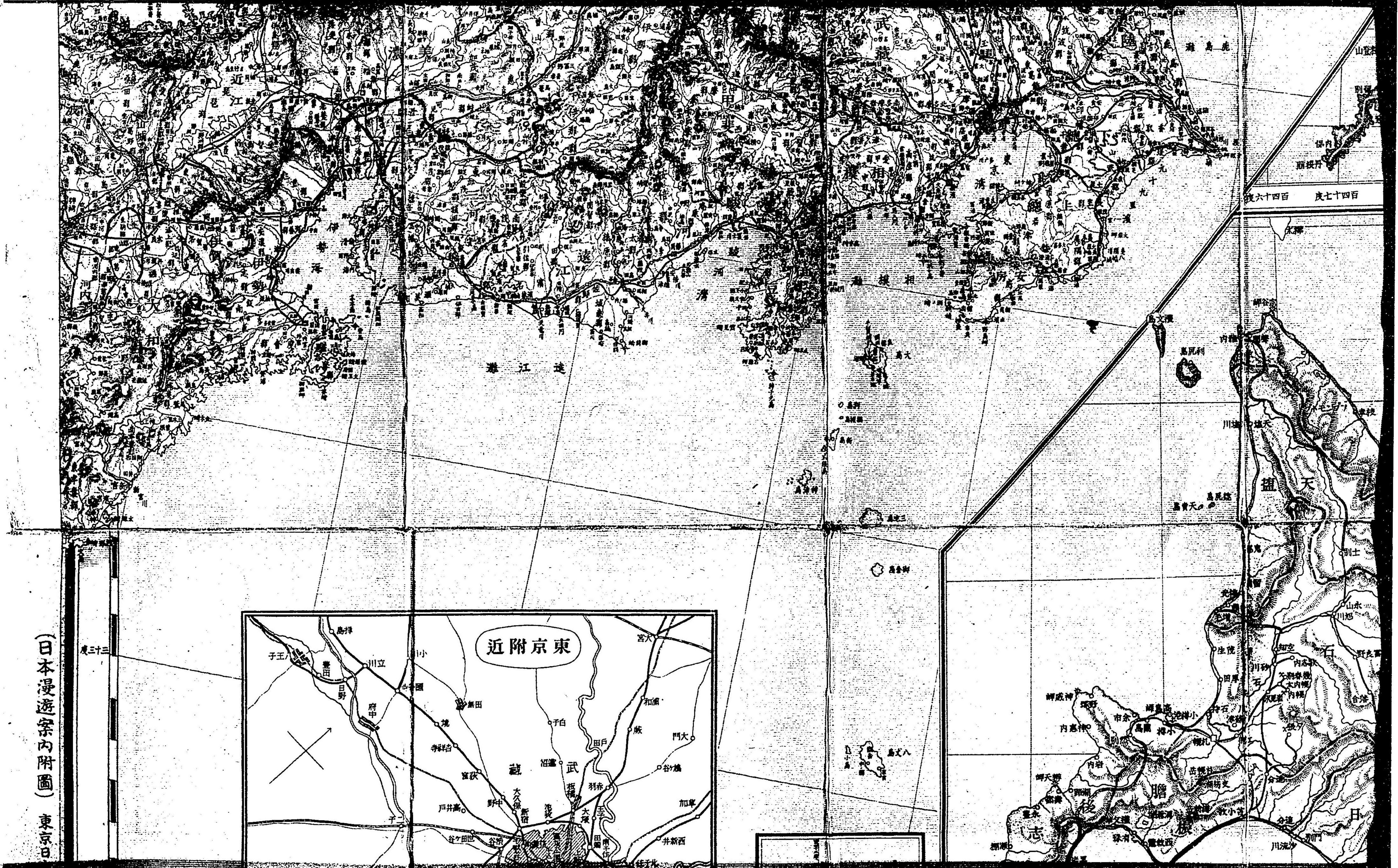


圖全道海北  
一之分万十五百二尺例比  
里木日  
5 10 15 20 25 30 35 40

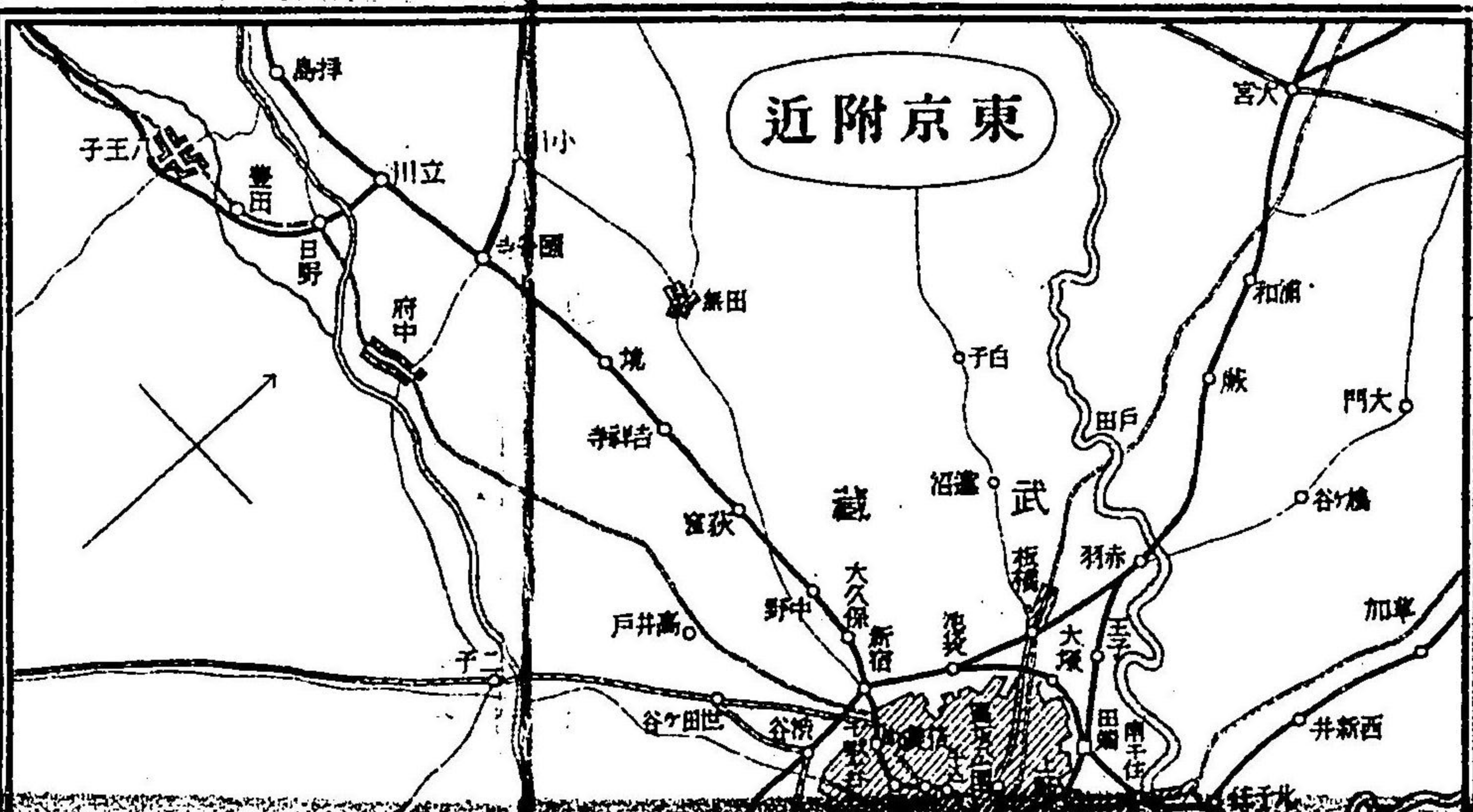


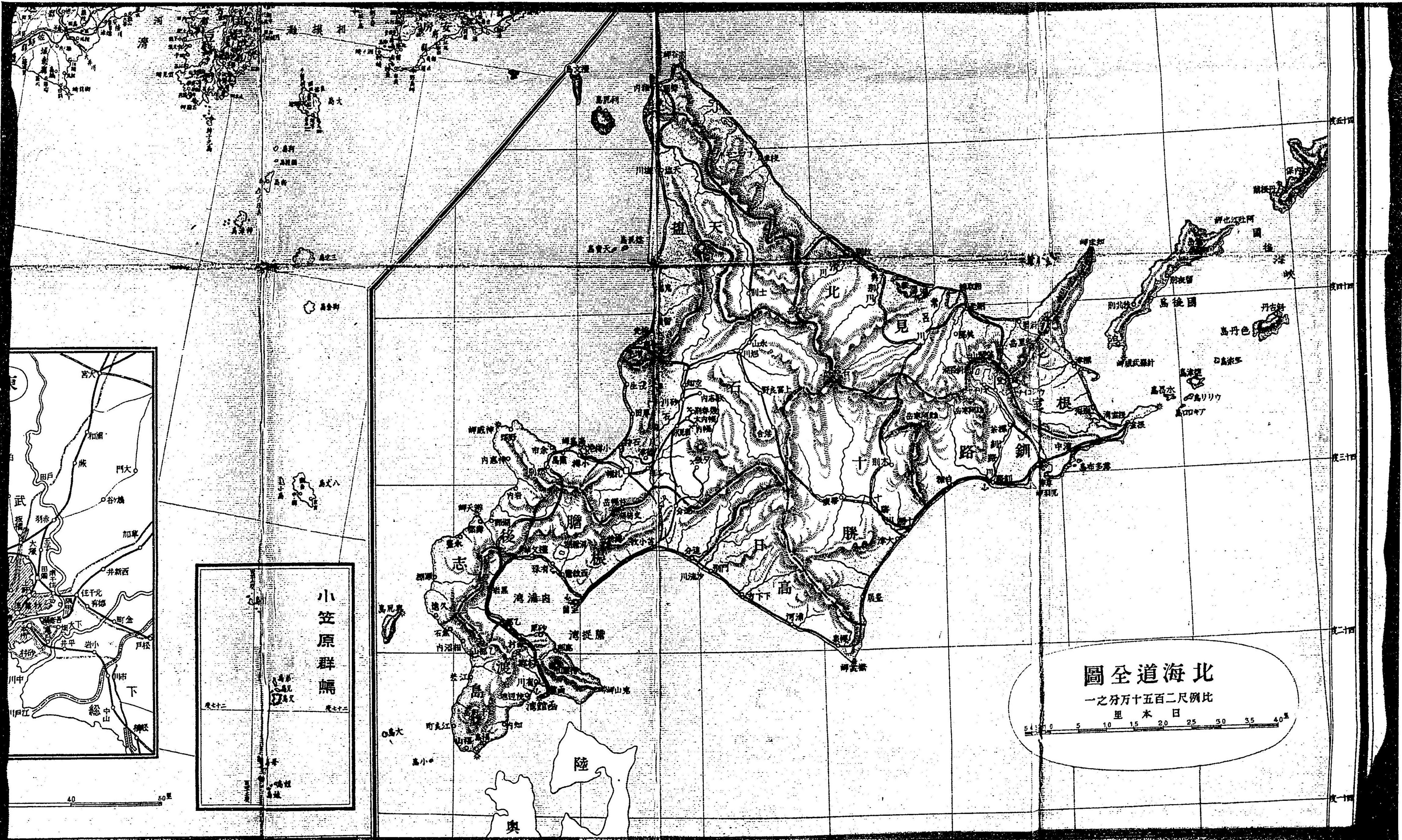
小笠原群島  
度七十二





(日本漫遊案内附圖) 東京日

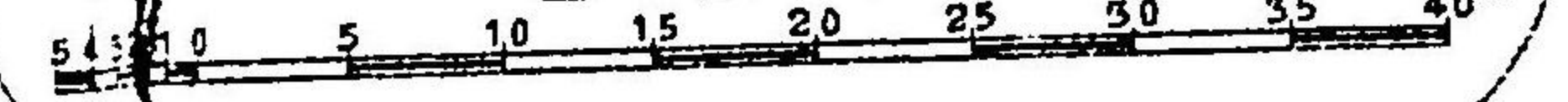




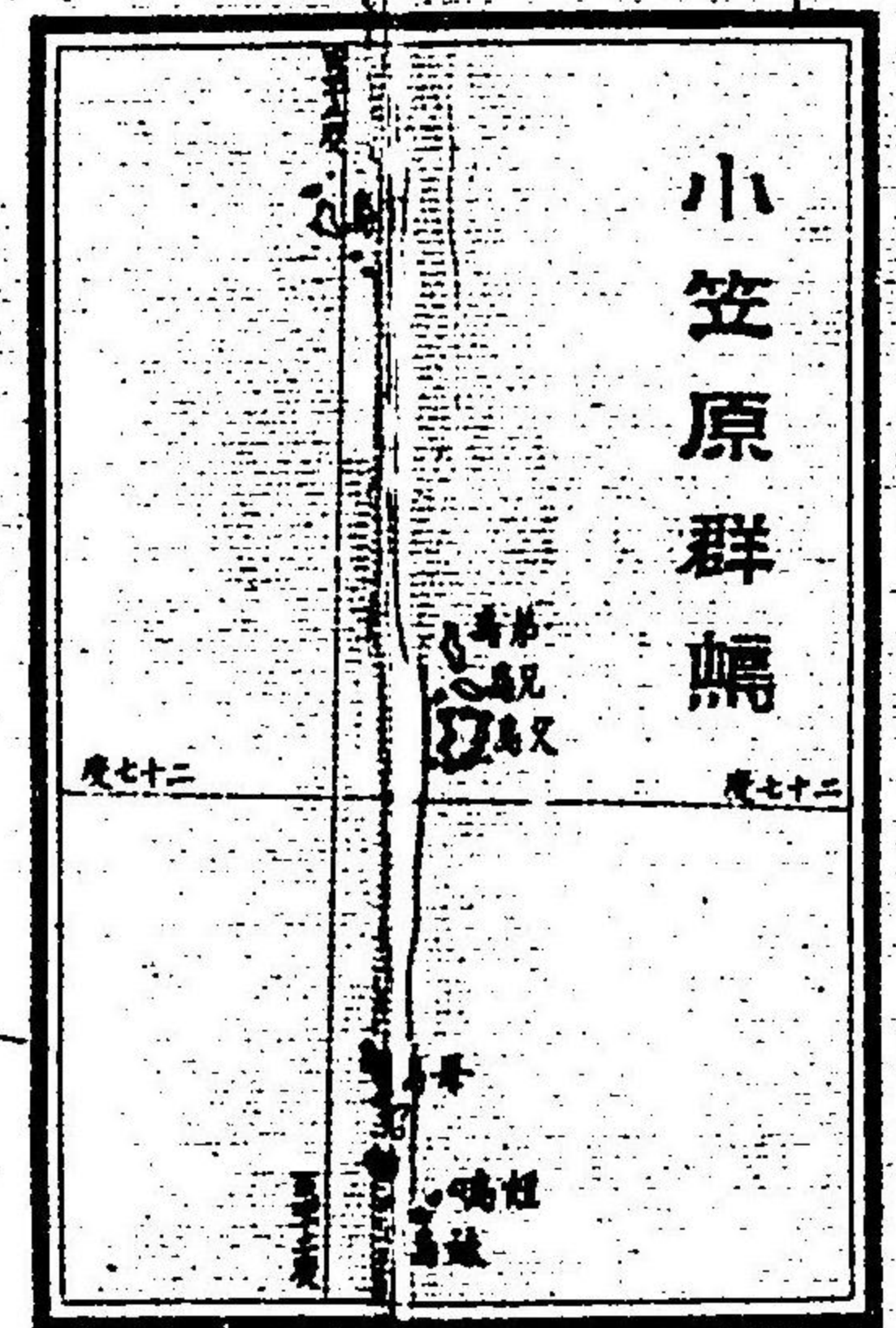
北海海道全圖

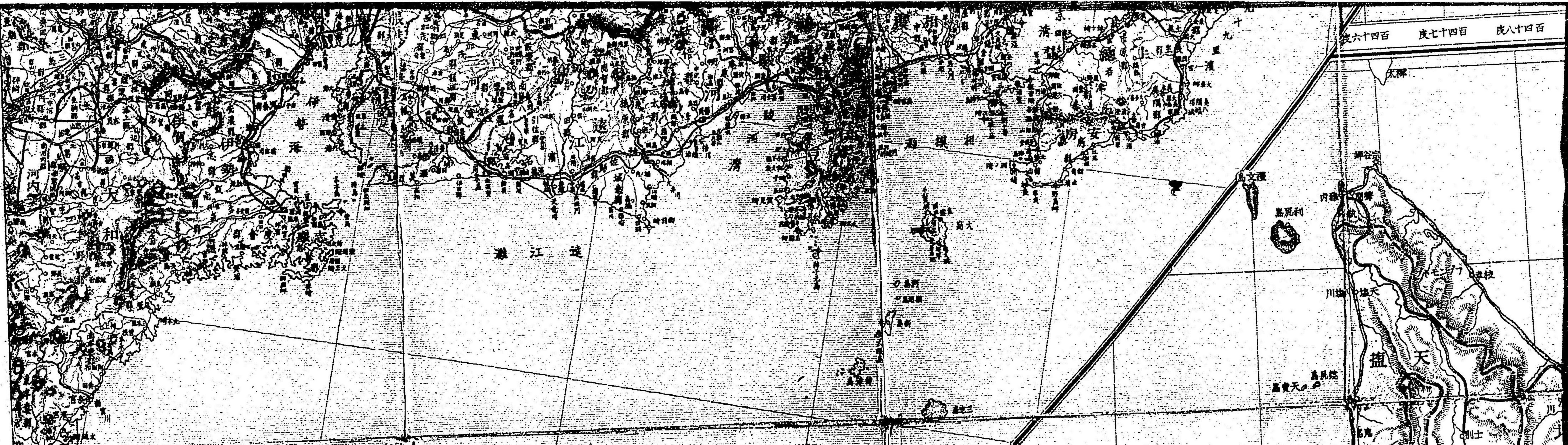
比例尺二百五十分之一

日本里



小笠原群島

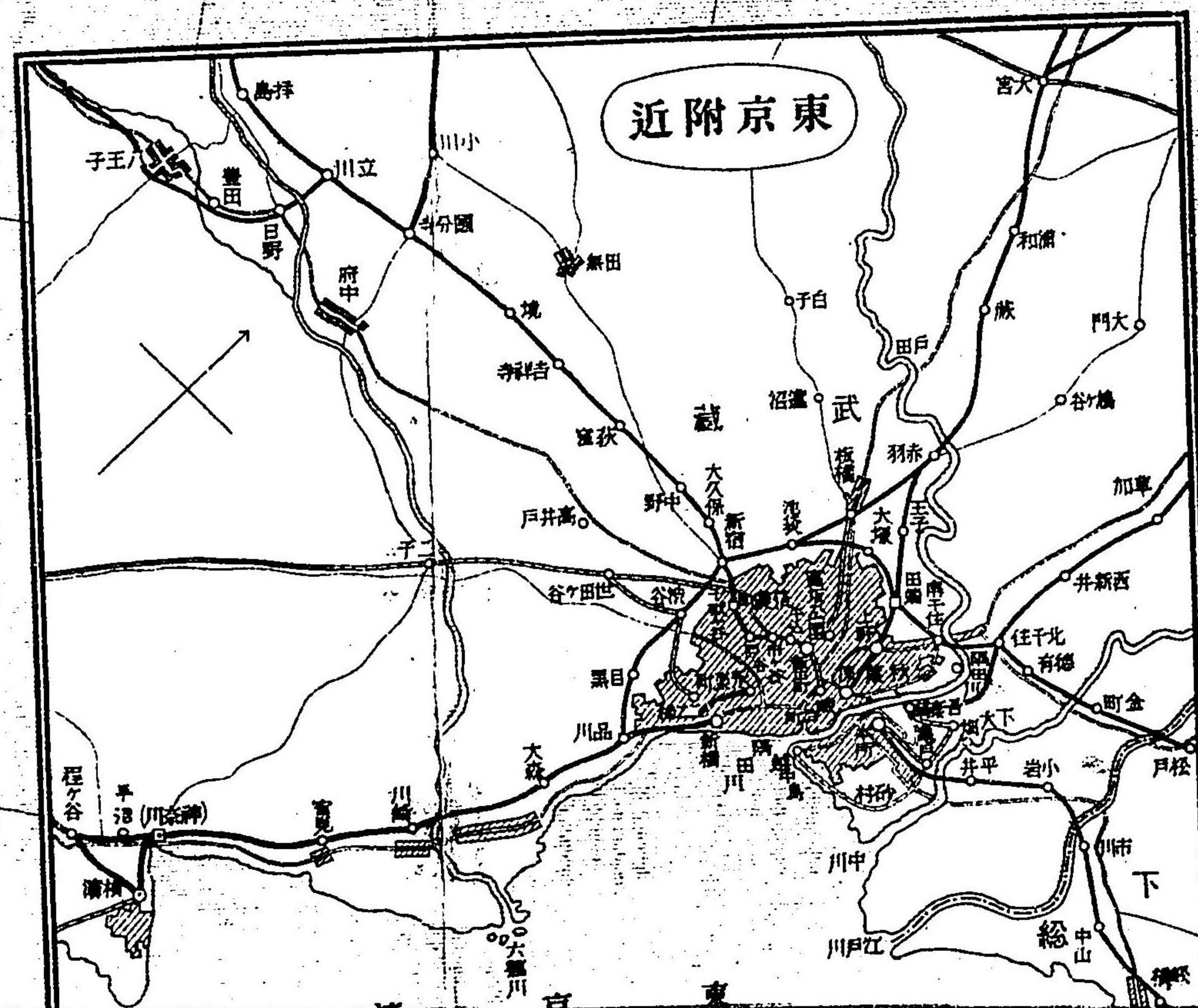




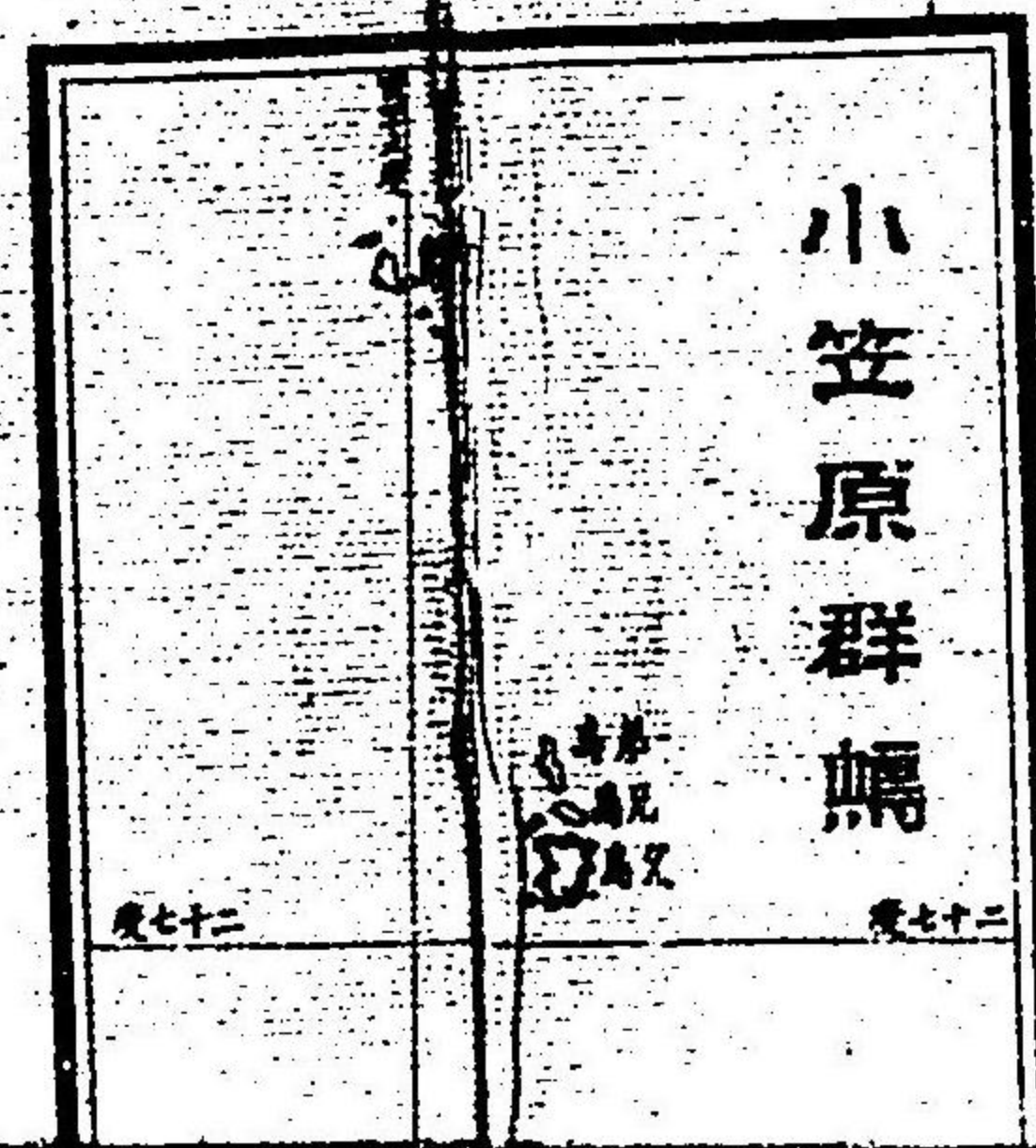
利根川

天

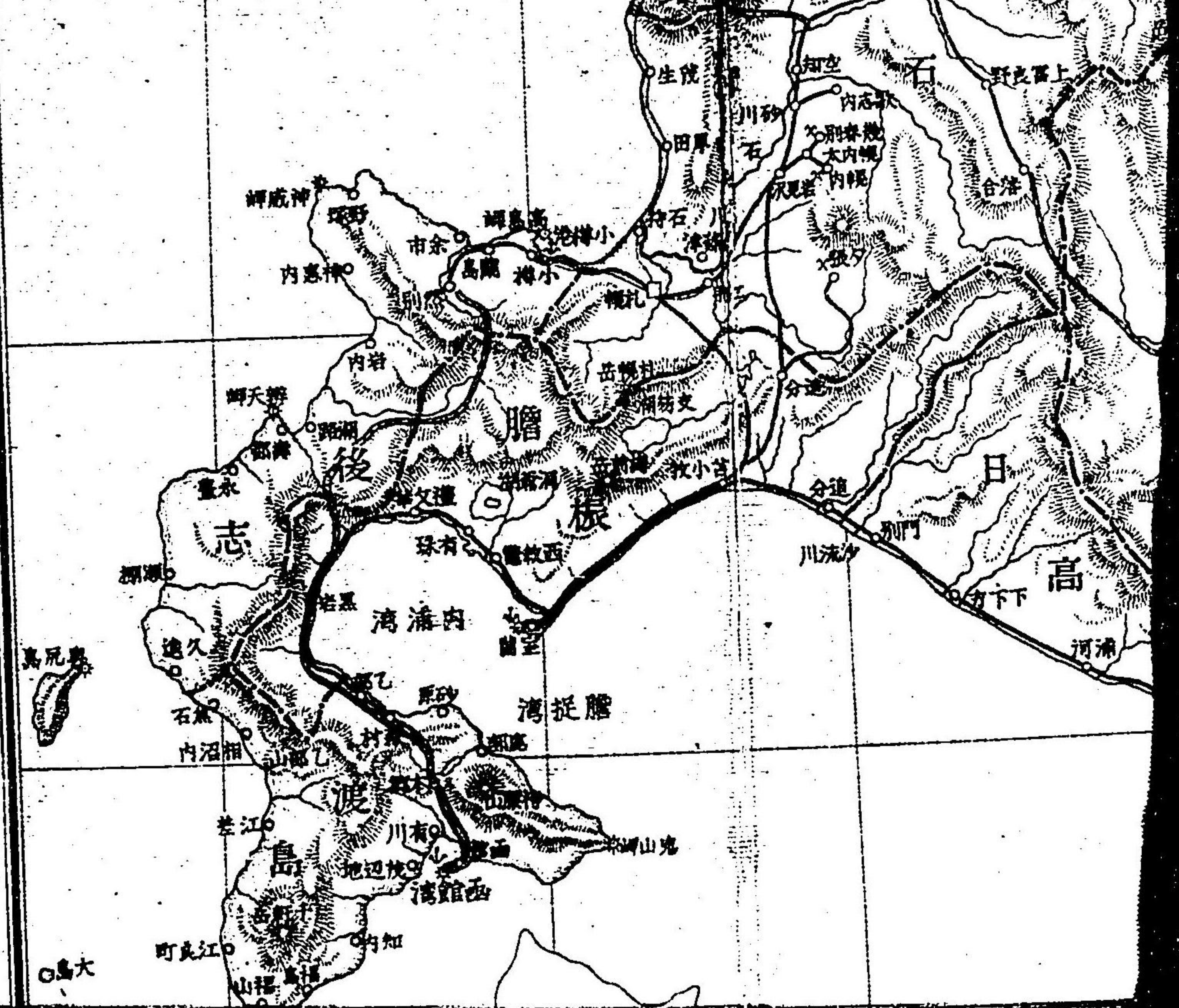
高



近附京東



小笠原群島



志

島

(日本漫遊案内附圖) 東京日本橋區本町三丁目八番

度三十三

度二十三

度七十二

度七十二

